

布教研究所報

昭和61年3月

第3号

浄土宗布教研究所

布教研究所報

昭和61年3月

第3号

浄土宗布教研究所

目次

集中研究会指導講義

文書伝道の基本……………宝田正道……………4

研究所員研究成果報告

新聞コラムにおける法話の試み……………梅庭昭寛……………28

北海道開教二世紀への提言……………片山浄教……………34

三上人遠忌の現代的意義……………東海林良雲……………37

地域に根ざした教育活動のあり方……………浜村泰道……………42

十念(念仏)の綱要……………宮崎浅良……………47

——唐沢山阿弥陀寺に参加して——

テレホン法話について……………大門俊正……………53

——アンケート調査によるその実状報告——

仏教の実態……………山本雄毅……………59

——白石部落の調査から——

源智上人の布教について	羽田恵三	64
知恩・報恩とお念仏	有本亮啓	69
聖光上人の伊予遊化について	村中成信	73
布教の原点	山上光俊	77
現代人の死と念仏	金子貫司	83
農山村地域における仏教婦人会の結成	岡崎覚豊	88
——一つの方法——		
無常よりの出発	西岡信孝	94
——三上人の場合——		
布教とコミュニケーション理論	大室照道	99
臓器提供の宗教的意義	佐藤雅彦	105
教団レベルでの広報の意義とその展開	加藤俊哉	112
教学布教大会意見発表		
三上人大遠忌にあたっての布教活動		120
彙報		153
編集後記		157

集中研究会指導講義

文書伝道の基本

浄土宗新聞編集参与 宝田正道

はじめに

ただいまご紹介にあずかり、過分なお褒めの言葉をいただきました。宝田でございます。今日の題といたしまして「文書伝道の基本」ということで、お話をしてみたいとおもいます。

今回は皆さん全国からおいでになられたそうで、中には浄土宗新聞のモニターをやっていたりいる方までいらっしゃるようです。ただ皆さん方はこれから、この浄土宗布教研究所の所員、研究員という形で、実際に布教をおやりになる。理論と実践をここで学んで、それをまた一般の大衆に能化として役立てていただくという、使命をお持ちになつてここへお入りになったことと思いますし、またお入りになった以上はそれ相当のしごとは、直接ご自分で工夫してやっていただかなければならないと思います。

一、口演布教

さて、一般に布教と申しますと、ご承知のとおり口演・文筆・全身の三つに分けて考えることができます。

一番初めの口演とは、いわゆる口でするお説教、法話の類でございます。これはもちろん読んで字のごとく、話を大勢の人の前で演ずるといふもので、昔流にいうと話芸でございます。話芸というのはただ単なる会話をしたり、人と話し合ったりというのではなく、芸という言葉がついている以上はこれは芸術であり、しかもその芸術の内容が仏教芸術というくらいの意味も持っているのではないかと思います。

この話芸、つまり、口演伝道、口演布教と申しますことにつきましては、私どもの仲間であります関山和夫という先生が非常にくわしくその歴史なり内容なりをお調べになつて、ご本も出されていますし、研究もされていらっしゃると思いますので、こういうものを読んでいただけると大変よくその重要さというものがわかってくるだろうと思ひます。

それでこの口演布教をちょっと簡単に申し上げますと、これは今言いましたように種類はいくつもございます。とにかく口を通じてですから、檀信徒との日常会話もそうですが、法話もそうですし、それから講演としてのお話もそうですし、日曜説教ももちろんそうです。

むかしは、明治時代までは節談説経といひまして、まるで講談師の話でも聴くように、聴衆は弁当を持ってそれを聴くのを楽しみにたくさんお寺へ来るといふような時代もございました。今はそういうものがラジオやテレビにかわりまして、マイクを通じて皆さんにいろいろのお話をするという時代になってきましたけれども、芸能的な要素はほとんど削られてゆき、いわゆるお説教、あるいは法話という、なんとなくかたくなるしいような内容を思わせる話芸の時代になつてまいりました。

しかしそれでも、とにかく口を通して皆さん方に釈尊の教えを伝えるという使命のもとに、この口演布教が非常に重要視されているということは、昔も今も変わりがないのです。

それでこの口演布教の基本的な特長を一つ申し上げますと、平安時代の清少納言の『枕草子』に「説経師は顔よき」とあるように、説経師というものは顔がよくなくちゃあいかん、男前であって女の人に好かれるようなりっぱな顔をしていなければならない、とそういうことが書かれています。

それからまた、一般には説経師を評しまして、一、声、二、節、三、男というようなことが言われていた時代もごさいます。つまり声が良くなければいけない。これはもちろんでございしますが、その声が通って、しかもその抑揚が立派であって、あまりダミ声であるとか、かすれ声とか、小さな声ではまずい。抑揚をうまくやりながら、まず第一に声を大事にしてもらいたいということです。

その次は、節談説経の時代でございますから、その節回しがとてもうまくなければ、ということでも評価したのです。三番目にくるのが男です。

以上、説経師の重要な要素としてまず声が大事であり、節も大事であるが、男も大事である、ということとは、昔の説経師の人たちが、服装から態度から声から、あるいは全体の容貌から、ないし読み書きその他すべてをふくめまして、宮中を中心とした女房たちにかにもてたかということです。

逆にいうと、そういうタレント風の男でないとお説経師になかなかなれなかったわけであります。

昔、澄憲という人がおりましたが、その息子の聖覚法印は、釈尊の十大弟子の一人で説経のうまかった富楼那の再来であると言われたくらいに、節もうまければ声も良く、顔ももちろんよかったです。浄土宗でいえば、法然上人の「登山状」という、あの有名な文章をお書きになったということになっているくらいであります、文章も

うまければ説經の味わいも誠によかつた、という評判があつたようです。

聖覚法印を祖といたします、いわゆる安居院流の説經というものがどんどん發展してまいりまして、ついに明治時代ごろまでは、安居院流の説經は天下一品のものではあつたといわれており、それが浄土宗や日蓮宗、真宗の方面まで影響を与えていたといわれます。

この中の一人で安樂庵策伝という人が、京都の誓願寺という西山流の大本山におられました。この安樂庵策伝という人が『醒睡笑』という本をお出しになって、落語の種をいっぱいお書きになつたという歴史的事実がございます。浄土宗と非常に密接な関係のある方でございます。

そういう安居院流の中に立派な説經の種がおりこまれていて、これをまず頭に入れておくと、説經というのは大変古くから、大切にされてきたんだなということ、そしてその中にこういう人たちが出世されたんだなということがわかると思います。

説經の主体としては、今申し上げました、顔だとか、男つぶりだとか、声だとか節といったものなどが必要であると同時に、それと同じくらいの重さで口演布教の基本が四つございます。この四つは何かというと「声・弁・才・博」ということです。

第一の「声」は、ただ口から出すというのではなく、その時々に応じたかたちでもって抑揚や大小をつける、そういうことがもちろん必要になってきます。そういう技術を身につけることによって説經師としての資格ができます。

第二の「弁」はもちろん弁舌です。立て板に水といいますけれども、その方の勉強もしなければなりません。

第三の「才」は才能です。センスのことです。時代や聴衆に合った話ができるかどうか、その他アドリブ的なセンスも持っていないと、説經師としては落第なのです。

最後の「博」はもちろん博識です。百科事典的にいろんなこと、世の中のことを知っていて、歴史的なことも、あるいは社会的なことも、政治、経済から世界的な動きにいたるまで、ある程度ふだんから勉強しておいて、それをお説経なり法話のなかにうまく取り入れてゆくという才知が必要になってくると思っています。

口演布教の説経師としては、この「声・弁・才・博」ということを、どうしても勉強してゆかなければ、本当の説経師にはなれないわけでございます。皆さん方は布教師としての資格をこれから十分に発揮されるわけですから、とにかくこれを基本とした勉強を十分にやっていただかなければならないということでございます。今日は文書伝道のお話をするわけですから口演布教の方はこれくらいにしておきますが、この「声・弁・才・博」ということを基本にしていただきたいということだけを、お願いしておきます。

なお、ついででございますが、御飯を炊くときに「初めチヨロチヨロなかバツバ」と言って火加減をよくします。これと同じようにお説経にしても、法話にしても、さてどういふ調子で話したらよいかという、一つの基本がございます。それは「初めしんみり、中おかしく、終わり尊く」といいます。初めにしんみりとした調子で話し出すのが一つのコツなんです。しかし途中はある程度おかしくする、つまり笑い話のような要素もうまい具合に取り入れてゆくということです。とくに昔の節談説経のような場合だと、節づけをして面白い話をいっぱいやりますと、弁当を持って来た聴衆は非常に喜ぶわけですから、そういう意味で「中おかしく」というわけです。落語みたいなことばかりでは困りますけれども、たまにはそういうのも入れてみます。

たとえばこんな笑話があります。

漁師が魚を獲っています。そこへ坊さんが通りかかり、

「殺生してはいかんじゃないか」

「いえ、私は殺生しておりません」

「じゃあ何をやってるんだ、網を張っていて魚が入っているじゃないか」

「いえ、網には波が入っているのです。波がダンブダンブ来るので、波網ダンブ、ナムアミダンブ、なむあみだぶ」と、念仏を申しているんだ、と言ったというわけでございます。

そういうふうには、初めはしんみりとゆっくりと声も小さく、だんだんとそれを高くしてゆき、中ごろになって面白い話をいろいろといわれると、居眠りしかかっている人でも、ちゃんと起きて笑い出すというわけです。そういうふうには、間をつないでゆくことも大切だということです。

そうして、終わりはやっぱり尊く有り難いという印象を与えるような意味において、最後はピシッとしめなければなりません。

「初めしんみり、中おかしく、終わり尊く」というのはそういう意味です。私どもはとてもそういうふうにはうまく話できませんけれども、そういうつもりでお話する技術が重要になってくると思います。

なお、この「初中終」というのをつづめて言いますと、これが、「しょっちゅう」という言葉になります。しょっちゅうというのは初めから終わりまでということですが、この言葉のことは『法華経』の初中終から来たんですけれども、「初めしんみり、中おかしく、終わり尊く」ということは、説教の初めから終わりまでしょっちゅうこのことを頭においてほしいということです。これは一つの駄じゃれみたいなものですが、大切なことなのでお話しした次第でございます。

そういうわけで口演布教のだいたいの枠というかコツというものは、これでおわかりになろうかと思えます。

二、文筆布教

これを序の口といたしまして本論は、いわゆる文筆布教、文書伝道です。

これは口ではなくて文章、筆一本でやってゆくというようなことでございますけれども、これが不思議なんです。説教師（以下、経を使わない）の方は、口はうまくしゃべっていただけるんですけども、実際に文章をたのんでみると、あんまりうまく文章の書ける人は少ないんです。浄土宗新聞でよくこの布教師の方々に文章をお願いするんですけども、特に若い布教師の方々にいろんなことをたのもうとすると、あの人は立派な布教師だと思っている人が文章を書かせると、案外この声弁才博的なものが出ていないんです。文章に出しにくいんですね。それを勉強してもらわないと布教師として一人前とはいえません。口でしゃべることのうまい人が、どうして実際に書かせたらだめなのかということ、私はいつも疑問に思っておる次第です。

皆さん方の中で、オレは文章はりっぱだと思ってるしゃる人があるかもしれませんが、実際に書いて下さいと言った場合には、むずかし過ぎたり、あるいは長過ぎたり、字がまちがっていたり、ちゃんと課題に合っていないかったり、いろんなことがあります、なかなかこちらの思う通りの文章になっていないのが正直な話多いんです。この布教研究所においては、今後口演の説教法を勉強するのはもちろんですけれども、この文筆布教、いわゆる文書伝道ということにもっともっと力を入れてゆかなければならないかと思えます。まして浄土宗をこれから背負って立っていただかなければならない皆さん方ですから、ぜひぜひご自分の能化としての技術を十分にその筆の上で生かすようにお考えいただき、また勉強もしていただきたいものと思えます。

さて、文筆布教というものの根本的な条件というものは、先に述べた「声・弁・才・博」に対して「語・文・世・訓」

といえるかと思ひます。

①語 第一の「語」というのはもちろん日本語のことです。まず日本語というものを正しく勉強していただくというのが一つです。詳しくは後で述べようと思ひます。

皆さん方は、日本人に生まれて、日本語というものを習わなかっただろう、という語弊がありますけれども、オレは日本人だから日本語なんか当然話せると思つてらっしゃる方が大部分ではないかと思ひます。けれども良く考えてみますと、日本語というものは小さいときに、お父さんお母さんに教わるのです。まずはじめはトトだとかママとかパパとか、同じような連音の言葉をおぼえるわけですね。それが本当かどうか、そんなことは知らないままに、赤いものがチヨロチヨロ水の上にといたら、これは金魚だと教わつたとおり金魚だと思ひ込む、そういう信仰が初めからあるわけです。相手にそう言われたら、そのとおり口うつしにしゃべる。私がママなんだよと言われたらそう信じこんで覚える、あれがパパなんだよと言われたればパパと覚えるわけです。そういう幼児言葉ということから始まりまして、幼稚園に行きますと、お互いに今度は友達同士で、花だとか木だとかいろんなことを話しあううちに、だんだんと言葉を覚えてゆきます。それから今度は小学校へ行つて、学校で国語読本というものを習うわけですが、国語として習うわけで、日本語としては習っておりません。それが問題なんです。

われわれは国語として、ハナ、ハト、マメ、マスとなつたわけです。皆さん方や、もっと若い世代の人たちは、もちろん他のことを習っているでしょうけれども、とにかく単語ならば単語をポツポツと教わつて、後は応用にまかせるというような形の教え方をされているはずですよ。そうしてどんどん社会的なつながりができてきて、友人の間、男女の間、あるいは親との間、会社員となれば上司との間、というふうにだんだん年を取るにしたがつて、自分の覚えている日本語というものが多く広くなってゆくのは当然でございます。

ところが、それがはたして正しい日本語かどうかというのを誰も教えてくれず、自分でも反省したこともない。相手を信じきっているものだから相手の言うとおり、すなおにそうだと思いこんでしまうんですね。

ここに問題があるんです。外国人が初めて日本語を習うのと日本人が日本語を習うのでは、ここで態度が違ってくるんです。外国人は日本語というものは非常に難しいと言います。日本人は全然難しいともなんとも言ったことがない、自分でちゃんとしゃべれると思ひこんでいる。その正しいと思ひこんでいるところが問題なのです。だから流行語でもなんでもすぐ耳にして、そのままペラペラしゃべることを、まるで自慢のように思っている人が非常に多い。ところがその日本語たるや、どんどん間違ってきているということがあります。

例えば「病、膏盲ここうに入る」という言葉がありますけれども、これなんかも今や「病、膏盲ここうに入る」といって、盲の代わりに盲という字を使うようになってきました。目と月の違いですが、盲という字は、めしいる、目が見えないということですから、盲という字は、心臓のわきの器官から出るあぶらという意味です。「病、膏盲ここうに入る」というと、こういうところへ入り込んだ病は非常に重くなるというわけです。めしいた所へ入る病などというのは、聞いたこともないし、ちょっと考えられないですね。

それから「情けは人のためならず」というような諺がございます。これなんかも、今、情けをかけておくとやがてそれはその人のためではなくて功德が自分に回ってくるというような意味に、昔から解釈されています。人に親切にしてあげたほうがいいという諺として、通用していたわけでございます。けれどもこのごろの若い人はそうではない。電車の中でおじいさんおばあさんが席を譲ってほしそうなかつこうをしていると、譲ってあげたいんだけれども、今あの人の情けをかけたらあの人がだめになってしまいうらうと考える。ゆれる電車の中でしっかりと立つ訓練をしなければあの人のためにならない、というんで、「自分は立ってやりたいんだけれども」とかなんとかいって、居眠りなどをした

がら立たない。そういうことが「情けは人のためならず」ということだ、と思ひ込んでいる人が若い人のなかで多いんですよ。

それを聞くと「あ、そうか、それはそういう意味か」と、別の一人の人がそういうふうには解釈する。人に話す。ものに書く。どんどんどんどん広まって行って、いつのまにやら間違ったことが正しいかのようになってしまうんです。日本語だけではないんですけれども、日本語の伝播の中には、そういう間違いが間違っただまどんどんと発展するうちに本当になってしまふというケースが非常に多いんです。

「一犬虚に吠え、万犬実を伝う」という言葉がごさいます。一匹の犬が何かの影に怯えてワンワンと吠え出すと、あつたりの犬たちが「何だか知らんけれど、あいつが吠えたんだからオレも吠えよう」ということで吠えだすと、あちこちでワンワンワンワンと万犬がありませんことを事実として伝えてしまふ。本當のことのようにして皆が吠えだすというわけですね。

それと同じようなことで、日本語も一人の人が間違つたことを相手に言ったがために、それがどんどんどこまでも広がって、間違つた日本語が世界中に散らばってゆくという結果になる。まして布教師の皆さん方が一言間違つたことをおっしゃってごらんなさい。例えば『選択本願念仏集』という法然上人の主著の読み方を、真宗のほうでは「センジャク」と言っております。ところが浄土宗はこれを「センチャク」と言わなければいけない、というふうには、私も石井教道先生に教わつたことがございます。このセンチャクという読み方でさえ、今では真宗のほうでセンジャクというのが、どんどん広まってきて、浄土宗の人までついセンジャクと読むのが正しいんだと思ひ込んでいく傾向さえ少なくありません。

そうすると、あれはもうセンジャクシュウだ、と新聞や雑誌の編集者たちもそう思つて、そのとおり外部へ活字でな

がしてしまふ。やがてどんどんと世界中にセンジャクシュウというのが広まって行つて、われわれが「いや、あれはセンチャクが本当なんだ」といくら言つても、かえつてそれは間違ひなんだ、というふうになつてしまふわけですね。

ですから、言葉をつつしんで正しい日本語を身につけることを心がけていただかなければなりません。皆さんの使命として、義務として、勤めとして、これは必要なことなんです。このことを頭において文書伝道に取りかかれませんと、かえつて「万大実を伝う」的なことになつてしまふことを、私は恐れるわけでございます。したがつて文筆布教の一番初めには、この日本語というものを正しく把握するということを、しっかり覚えておいていただきたいのです。

②文 次に日本語の文章を書くコツを、やっぱり覚えていただきたい。文章というものは、言葉をつぎはぎして相手に自分の意志を伝えることです。このつぎはぎするということが、また難しいんです。糸を通して、針でものをぬいつけるように、簡単にはいかなんです。いろいろな言葉がございます。それをどう選び、どう組立て、どう言えば相手に正しく自分の意志が伝わるかということを、工夫しなければいけないわけですね。後で詳しく申し上げます。

③世 それから伝道の文章を書く時に大事なこととして三番目にあげた「世」というのは、世俗のこと、世の中の動き、世界の動向、そういうものにしよっちゅう気をつけて自分の心に置いたり、あるいは頭に入れておいたりしてもらいたいということです。

われわれとしては、例えばさしづめ三上人のことを頭において、文書伝道をしたい、という気になるのが当然でございます。また、そうしてもらわなければ困るということです。そういうときに三上人のことなんか知りもしない人は、文書伝道をやろうとしてもできないで、布教師として失格になつてしまふ。世の中の動き、あるいは世俗のいろんな事件その他と共通の場で、私どもは生きていますから、共通の土俵で相撲のとれる内容を豊かにしたいということですね。それをするこゝろによって相手も近づいてくれますよ。鎌倉時代のことや中世のことばかり言つていたんでは、な

かなか今の人はついて来ません。

今の世の中、怪人二十一面相がどうのこうのとか、あるいは中曾根さんが言っているように、百ドルの品物を買えば日本の貿易摩擦もある程度緩やかになるんだというようなことも、一応は人々の関心を誘う話題となるわけで、そういう話をもってくるのも一つの方法でしょう。

つまりは世の中の動きというものに、しょっちゅう敏感に耳を傾けていて、それをうまい具合に取材しては、話の内容にとけこませてゆく、そういう機知が必要ですね。

④訓 それからもちろん、これは最後にしめくりとして必要なことは、文章に教訓、いわゆる仏教の教えというものが入ってなければ、これは普通のお話になってしまいますね。文書伝道というものは文書によって仏さまの教えを、あるいはお祖師さまの教えを伝えなければならぬ、という重要な任務があるものですから、これを忘れてはなんにもなりません。したがって「語文世訓」というこの四つのことも、「声弁才博」と同じように、一つ頭において、文書伝道の基本にしていたきたい、そういうふうに私は思うわけです。

三、全身布教

最後になりましたが、三番目には全身布教ということがございます。体全体を布教の材料とすることです。一つ目は口で説く、二つ目は文章で教える、三つ目は全身布教、この全身布教は読んで字のごとく、自分のからだで教えを伝えるものです。

例えば比叡山のほうで、これは天台宗の修行になりますけれども、山へこもって千日のあいだずっと回峰行をします。そういう行をしているのも全身布教の一つだと思います。本人は、一言も言ったり書いたりしないでも、一般人

は「あの人はりっぱな人だ、大変辛い行をされたんだ、ありがたい」という気持ちになってくれるわけです。

それからまた、知恩院なんかに行っても清掃奉仕をやっている信者さんがいます。黙って草をむしったり取ったりしている。その姿を見て胸打たれ、ここにも仏さまがいらっしゃる、というような感じで、相手に強い印象を与える。これも全身布教の一つではないかと私は思います。あるいは托鉢に回ったり、勸進に歩くというのも、もちろん全身布教のあらわれかもしれません。

アフリカやエチオピアあたりで難民が苦勞しているという話を聞いたら、自ら単身で向こうへ行行って働く、口ではなにも言わなくても体でもって勤勞奉仕するということによって、「ああ、日本の坊さんはえらいものだ」「仏教というのは、りっぱな教えだ」という感銘を与える。それだけでも、やはり全身布教といえましょう。

そのように、自分の全身でもって仏さまの修行の再確認をする、と同時にそれを再現してみせる、それが大切なんです、しかし本当は、見せるという意識があつてはいけません。これは三輪清浄のお布施と同じように、相手かたにか報酬を期待するというのではなく、そうせざるを得ない、やむにやまれぬ確たる信念とりっぱな心がけをもつて修行をする、それこそ全身布教だと思ふんです。歩き方一つにしても、そこに仏さまの姿があらわせるような、あの人の後姿を拝みたいといわせるような歩き方をさせていただきたいと思ふます。したがって全身布教というものは、人が見ていようがいまいが、自分自身を一つの修行の場であるというような気持で行動すること、それが全身布教だと私は思うのでございます。

以上、布教の種類というものは、このようにだいたい三つに分けていろいろ研究をすることができるとは思います。

四、日本語の特色

さて文筆布教、文書伝道の基本について、今申し上げました、「一語文世訓」ということの一つ、すなわち日本語というものの特色、これをまずお話ししておこうと思います。

日本語の特色については、いろいろな本もございますし、いろいろなことをおっしゃる方々もいらっしやいますけれども、私は私なりに、四つか五つに分けて考えてみる事ができると思います。

①あいまい 一つは、日本語というものは非常にあいまいだということです。たとえば、やはりとか、どうもとか、よろしくとか、がんばれとか、そういう言葉が日本語にありますね。やはりとか、よろしくとか、簡単に口から出ますが、良く考えてみますと、やはりというのはどういう言葉なのでしょう。やはりというのは、やっぱりというのと同じですね。つまりあなたが考えていることと私の考えとは同じであると、そういう予測を私はしていたんだ、だからやっぱりそうだったのだ、という意味で使うわけです、あいまいな言葉ですよ。あいまいだけでも、そのあいまいな点が非常にいいわけです。

「私は病気で二、三日休みました」というが、「二日と五十分休みました」とか、「二日と三時間休んだ」とかはいいない。「二、三日」という概数、つまりあいまいな言い方が、日本語としては流暢である、というふうに評価される。正確に言わないところが非常にうけるわけです。

「今夜半、台風は室戸岬をこえて……」などということを言います。今夜半とはいったい何時ごろのことでしょうか。午前一時でもいいし、十二時ジャストでもいいし、三時ごろでもいい、どれでもだいたい今夜半に当たります。みんな今夜半です。こういうごまかしの言葉みたいのが、通用しているわけです。だから外国人は非常に不思議に思うんで

すね。そういう点で日本語というのはどうもわからない。

そして道で知人に会うと、「ヤア、どうもどうも」と言います。どうもという言葉は、どういう意味ですかねえ？
はっきり答えられますか。よくわからない、わからないけれどもカンが鋭いからなんとなくわかる。

よく年寄りが「おまえさんは業が深いから」とか何とか話し合っていますね。「業がふかい」って、業とはなんぞやって、聞いてごらん下さい。おばあさん、どう答えますか。「いや、私はよくわからないけれども、なんとなく業が深いんだ」と、それでわかっているんですね。わかっているけれども、学者に言わせると論文の何百枚か書かなければならないようなのが、業という言葉です。カルマと言います。日本語というものは、わかっているようでわからないところが、あいまいでいいんですね。あいまいなところが日本語の特色であると考えられます。

だいたい日本という国名がそうです。皆さん方の中にはニッポンと呼ぶ人もありますが、そうかと思うとニホンと言う人もいます。どっちが本当なんでしょう。仮にお札の裏をひろげてみますと、ローマ字でNIPPONと書いてあります。そうすると造幣局でちゃんとニッポンと決めて書いているのだからこれが本当だと考えます。ところが古典の中でも、例えば、『平家物語』に「ニッポン一の豪のもの」と書いてある。しかし、一方では『日本書紀』とか『日本靈異記』とかは、ニホンというのが読みくせで、はたしてどっちが正しいかといわれたら判らない。外国人に聞かれて、どっちでもいいんです、という言い方をついしてしまふ。しかたないからJAPANという言い方を許し、JAPANとかJAPONとか言われても平気でおります。自分の国の名を、ニホンともニッポンとも決めかねているのです。ちゃんと「日」という字と「本」という字を書いて表しているから、それでどうでも勝手に読みなさいというわけです。日本という国は誠におおらかな国でございまして、細かいことはいわないのです。

だから外国人は不思議がるのです。東洋の七不思議ではないけれども、日本の女の人の微笑というものと日本語とい

うものは本当に不思議でしようがない。彼らにとってみればどうしてはつきりと、ニホンとかニッポンとか決めてくれないのかということです。

昭和九年にNHKでどっちかに決めることを論議いたしましたして議会に出したことがございますが、結局は論議だおれで決まらないまま五十年、どっちでもいいということで両方通用しております。ただ日本が、よそとスポーツをやる場合にはユニフォームにNIPONと書いてございます。今から四十年前の戦争の時代には、いかにも強そうに「大日本帝国」と言いました。私も大日本帝国のもとに戦争に行ったわけです。そのころは「ニホン」なんて言ったら、そんな女々しい言い方は駄目だ、と叱られたものです。その当時は強くて、勇ましい、大日本帝国が正しかったようです。けれども戦後はやさしくて平和な日本のほうがいいということで、どんどんニホンのほうが優勢になって広まりました。しかし大日本というような使い方は今でもないことはありません。大日本印刷などそうですね。ニッポンというよりはやはり力強い。ともかく日本語というものが、ついあやしくなるのも、日本という国自体の呼び名からして、いい加減で、あいまいだからかもしれません。

②省略 さて二番目には、省略です。皆さん方に「セ」、「ペ」といったらわかりますか。「セ」というのは野球を知っている人ならすぐにセントラルリーグとわかるはずで、「ペ」といえばもうパシフィックという具合に、一字でわかります。

つまり物事を省略するというのが日本語の特色なんです。新聞の三行広告を見てみると「歴持参」などと書いてあります。これはつまり履歴書を持って来いという意味です。これをカタカナなかにかでくどくどと書いたら、とても三行には収まりません。

このように略してある言葉が、非常にたくさんありまして、少ない字数でもって意味がちゃんと通ずるようになって

います。カラオケなんていうのもそうですね。カラオケって、はじめ、なんだろうと思ってたんです。どういふ桶だろうなどと考えて、空っぽの桶かなぐらいに思っていました。空っぽの桶が音楽や歌と、どういふ関係があるのかなあ、などと考えたりしていたのですが、そうじゃない。オケはオーケストラの略、カラは日本語の空っぽのカラと同じだといふから驚きですよ。ね。「歌のない音楽だけのオーケストラだ」といふような意味であると聞いてびっくりいたしました。

そういうように、こっちもわからないけれども何か流行してくると、なんとなくそれに乗っからなきゃならない、と言わんばかりにそれを覚えてゆくわけです。ちょうど日本人が日本語を覚えるのと同じようなもので、それが正しいかどうかよりも、やはり時代に乗りおくれまいとして、やみくもにそういった流行語を覚えるから間違いを起すのです。物事を省略するという特色は日本の文芸にもはつきりと表れています。つまり和歌とか川柳、俳句など、わずか三十一文字、十七文字で、天地、宇宙、大自然あるいは世相の一端を、短くぎっしりと凝縮して表すものです。そういう文芸の形というものが日本文化の中での、特に短詩型の特色として出てきています。これはすべて省略形でございます。このように日本語というものの二番目の特色は、省略といふことがいえると思います。

外来語が入って来ると、どんどん省略されたものが、創作されてゆきまして、うっかりすると何のことかわからなくなりまます。プロといふだけでもプロ野球のことなのか、プロフェッショナルのことなのか、プログラムのことなのか、それともっと他のプロのつくものなのか、単にプロといふだけではわからないんですが、そんなことにおかまいなくとにかく省略するといふことが、日本人のせっかちな気持ちにびったり合うんですね。「せまい日本そんなに急いでどこへ行く」などといふ標語がよく書いてありますが、例えばハワイなんかへ行きましても、トコトコトコトコ走っているのは日本人ばかりなんです。そういうふうに、日本人はいつもせかせかせかせかと、せっかちですから、そんなに急

いで行っていったいどこへ行こうとするのか、と問いたくなるのももっともなことです。だいたい昔から日本人はせっかちですから、ものごとをなるべく短くパツパと縮める性格が言葉の上にも現れたらしいですね。

③ 同字異訓 三番目には同じ字でもって読み方がちがう同字異訓ということがあります。また、同じ音でもって字が違う、同音異字ということもあります。そういうのが日本語の特色です。例えば、海という字がごさいます。海という字は、ふつう、皆さんごぞんじのように、カイと読みます。ところが日本語の熟字訓というのがごさいまして、海の下に女という字を書くと、海女あまと読ませるんです。豚という字を書いた場合、海豚いもかとなります。それから丹という字をつけて海丹うぐ、同じく老をかけば、もちろん海老えびですね。最後に海の下へ髪という字を書きますと、これは海髪あぶらと読みます。海髪というのは海草の一種で、女の人の髪の毛のように、海の中でユラユラゆらいでいるものだそうです。食べられる海草の一つです。ということは海という字の読みはカイだけじゃなく、五字でアイウエオと読むことができる、と言えるわけです。

このように、日本語の中には一つの文字でもっていろいろな読み方ができるという例が沢山ございます。

生せいという字があります、生蕎麦とか生卵なんかもちろんこの字を使います。生きるという読みもありますから、やっぱりアイウエオとあてられるんですが、この生という字には、なんと三百近い読み方があるそうです。

それから逆に今度は、同音異字というものです。音は同じでも字の違うものですね。これがまたたくさんあります。例えばキシヤです。キシヤというのはいっぱいあります。あなたの会社も貴社ですし、動くのも汽車ですし、相手に恵みを与えるのも喜捨です。だからキシヤのキシヤがキシヤしたキシヤ（貴社の記者が帰社した汽車）などという言い方さえできるわけです。それからキョウなんというのもそうですね。原稿をよこす場合もそうですし、船が港へ帰って来るのも帰港、その他、工事を起こすなどの同音を含めると、熟語は二十幾種類にも上ります。

そういうように同字異訓、同音異字というものが、日本語の特色として、非常にたくさんあるということを、覚えておいていただきたい。

④ 外来語 それから四番目には外来語です。

日本の言葉のなかに、外来語がこんなにたくさんあるのかと思うくらいに、いろいろあります。もう日本語になりきってしまったようですが、例えば、瓦とか、奈落とか、あるいは卒塔婆なんていうのも外来語です。もともとは梵語、すなわちサンスクリットから来ている言葉がそのまま漢字に移されて日本に帰化した形です。

近代ではポルトガル語とか、スペイン語とか、オランダ語とか、あるいは英語とかフランス語、ロシア語、その他、全部、幕末から明治にかけてどんどん外国語が入ってまいり、次第に日本語化されました。

ポタンなんていうのは、日本語として花の牡丹がごさいますけれども、洋服のポタンというのは英語そのまま通用しています。ページなどもそうです。

とにかく外来語というのは、あらゆるところに、みんな入り込んでいます。それを知らずに日本語だと思ひこんでるだけのものも、かなりあるようです。

ナイトゲームのことを、日本語で勝手にナイターなんて言っています。外国ではナイターと言っても、わからないですね。そういう通用しない日本語の外国語、一般にこれを和風英語と言っておりますが、英風和語と言った方がいいのかも知れません。英語になぞらえて作った日本語なんです。そういうのが近頃はどんどんと創作され出して、あちこちで国籍不明の変な日本語も、はやり出しているというような状況です。とにかく外来語が非常に多くて、デパートへ行きましても、化粧品屋へ行きましても、洋品店へ行きましても、カタカナや横文字で書いてあったり、英語で書いてあったりして、中にはチンプンカンプンのものもいっぱいあります。女の人なんか良くわかってるのかなあと思うくら

いです。

このように、外来語は非常にたくさんは入りこんできていて、ほとんど日本語化しつつあるということです、

そのほか、女言葉という独特な言葉もありますし、敬語の数々などもありますが、とにかく日本語の特色といたしましては、あいまいであり、省略されがちであり、同音異字や同字異訓、それに外来語が多いなどという四つぐらいの特色は、十分覚えておいていただいて、文書伝道にこれを活用していただきたい。もちろん間違った活用だけはしないようご注意くださいと思います。

五、文章のコツ

次に文章を作るときに、どういうコツがあるかというところ、十カ条くらい挙げられると思います。

①まず、何時も話すんですが、ニュースの文法というものがござります。新聞記者がニュースを取材して、その原稿を書く時、どのようにメモするかというと、五W一Hを心得よと教えられます。

誰が (Who) 、何時 (When) 、何処で (Where) 、何を (What) 、なぜ (Why) 、どのように (How) という五つがニュースを送る時の条件です。この五W一Hが一つでも欠けると、十分な記事は書けません。

しかし、五W一Hは、ニュースだけでなく、すべて文章で物ごとを伝える場合にも必要な要素だと思えます。正確に相手に伝えるには、どうしても五W一Hだけは最少限必要だというわけです。まず第一にこのことを頭に入れておいて下さい。

②次には正語です。八正道の一つです。いつも正しい言葉で書いて欲しいものです。

例えば漢字のテン一つでも、うっかりした打ち方は許されることがあります。玉たまという字のテンの打ち場所を、王

のように打ってしまおうと「きゅう」と読みます。傷の付いた玉のことです。「王人」は「きゅうじん」、つまり玉に傷を付けて細工をする職人のことになります。

「テン」一つで大変なちがいが生ずるわけで、「犬」と「太」がテンの位置で別字となるようなものです。

③三番目には、読み易くわかり易く書くということです。仏教語そのままでは理解しにくいので、一般の人にわかるためには、在家の身になって書く工夫をせよ、ということですよ。

④四番目に、仏教語は生ままで引用しないで、なるべくなら現代語に直し、自分自身の納得した言葉で書くようにしませんと、なかなか効果は上がりません。

⑤五番目、センテンスの長すぎるのもいけません。いわゆる息の長いものは禁物です。なるべく短く、ぶっ、ぶっと切るような習慣をつけないと、文章がだらけて冗長になるからです。

⑥六番目は、句読点や「々」の注意です。「、」と「。」をちゃんと打つべき所へ打たないと、とんでもない誤解や間違いを生じます。例えば、「ここではきものをぬいでください」と書かれた文章では、着物を脱ぐのか、履物を脱ぐのか判りません。また、この頃新聞などの影響でしようか、「人びと」「国ぐに」「日び」などと書く人がいますが、「々」(同の字点)は漢字一字の重複の場合、使えるわけですから、「人々」「国々」「日々」としてよいわけです。

ただし、「大正大学学長」のように、大学と学長とが別語の場合は、「々」でつながず、面倒でも学という同字を二度書かなくてはなりません。結婚式式場とか研究会会場なども同じです。

⑦七番目は、重複する言葉には気をつけなければいけません。「馬から落ちて落馬した」などというような言い方は避けるべきですね。

⑧八番目は、二重敬語です。

「法然上人が弟子をお連れになって」「どこそこへ行かれた」とつづける場合、「お連れ」「行かれた」の二重敬語にせず、最初は「連れて」で十分なわけです。天皇陛下も「○○に行つて△△された」でよいことになります。

⑨九番目、ませ書きです。当用漢字以外の漢字を使う場合、新聞なんかは仮名にしますね。例えば「うかい（迂回）」の場合「迂」は常用漢字にないので、回だけ漢字を使って「う回」としますが、こういう漢字とかなのませ書きは、やめたほうがいいと思います。仏教語の中には常用漢字以外の字がたくさんあります。したがって、難しいと思つても、一部を仮名に直したりすると、かえつて読みにくいので、要すればルビをふつておくのが親切でよいわけです。

⑩最後に、漢字とかなが調和よく使われているのが日本文の特徴ですから、原則としてひらがな七割に、漢字が三割くらいの割合で書くのが読み易いように思います。

以上の十項目を基本的に覚えておいて、これにふれるようなことは、なるべくさけて書くのが、布教文をつづる場合の要点といえるでしょう。

六、一字一仏の精神

いずれにいたしましても、一つの文字には一つの仏さまが宿つていらっしゃるといふ「一字一仏」と考えることが、私の信念でございます。「一字一仏」ということを心において、原稿用紙に向かつていただきたい。例えば三上人の「上」という字がないと「三人」、「三人遠忌」なんて書いてもわかりませんよね。この場合、この場所に「上」という字が書いてあってこそ、「三上人」という意味が出てくるので、この字がなければ通じないわけです。だから「上」は仏さまと考へてよいと思います。このように、言葉というものは、それぞれの場所に、それぞれの形で字がおかれ、それぞれの読み方で読まれた場合に、初めて通じるわけです。私の意志がみなさん方に通じるのも、ここにその言葉があるから

です。その一字に仏さまが宿っていらっしやるからこそ、通じさせていただけると受け取る気持ちですね。したがって、間違った字はもとより、点一つといえども、おろそかに書いてはいけない、ということ。善導大師の「一句不可加減」という精神もそれです。

このごろ、原稿を書いて来る人の文字を見ていますと誤字が多いんですよ。よくもまあこんなでたらしめな字をかけるな、という例を、一つだけ挙げておきます。

「これからもっと勉強いたしますから、足からず、ご了承下さい」

こういう誤字を書く人がいるんですよ。つまり自分で言った音のとおり、なんでも良いから字をあてればいいという、戦後の国語教育の一大欠陥が、こういう所に出てきているんです。

いまや日本人の生活時間の中で、私どもが耳からきくのは五〇%、口でしゃべるのは三〇%、ものを読むことは一〇%ですが、書くことにはなんと五%も使っていないそうです。文書伝道をする場合は、どうしてもこの五%でも良いから有効に使って、ペンに親しむ練習をしていただきたい。日記を書くのもよいし、短文の原稿やはがき通信を心がけるのもけっこう。

そして正しい文字を使ってください。正しい言葉を使い、正しい文章を書く、「一字一仏」であるということを心において、文筆布教に励んでいただきたいと思えます。

研究所員研究成果報告

新聞コラムにおける法話の試み

研究所員（北海道支部） 梅 庭 昭 寛

以下に掲げる七篇の小稿は、昭和六十年六月より同年十二月迄の七ヶ月間、『北海道新聞』文化欄で五十回に亘って連載したコラム「仏心仏語」より抜粋したものである。

近年、三分間のテレホン法話が一般教化の媒体として全国的に活発であるが、拙稿のコラムでは、六百字前後の限られた字数で、不特定多数の読者に仏教の思想的意義を理解してもらうことを眼目として試みたものである。したがって採り上げる仏教用語としては、日常生活に広く浸透しているもの、また文学・美術・芸能の分野でなじみの深い用語を選び、できるだけ平明に、そして読者の人生観になんらかの示唆を与え得るような表現方法に心がけた。

長期に亘った掲載中、各種各層の人びとからさまざまな反響があった。大衆化社会という拡散した時代相のもとで、仏教が社会と人びとにどうかかわり、関心を持たれているかを感じること大であった。マスコミを媒体とした教化活動の一つの事例として、大方のご批評を賜りたく、転載させて頂く次第である。

合 掌

両手を合せて仏に祈りを捧げる合掌は、仏教独特の作法であるが、東南アジアの仏教国では人びとが挨拶を交わす時にも合掌する慣習が定着している。これは、生きとし生けるものが共どもに互いを敬愛し合え、とする仏心に基づいたマナーといえよう。

ところで「南無」という語が仏教ではよく使われる。南無阿弥陀仏、南無釈迦牟尼仏、南無妙法蓮華經、南無大師遍照金剛等々に共通する南無とは、インド古代のサンスクリット語「ナマス」の音訳された漢語であり、「深く帰依する」「心からの信を捧げる」の意味である。祈りの姿としての合掌も、人それぞれが信ずる信仰の対象に深く帰依するという南無の思いの表われに他ならぬ。

人間にはなぜ祈りが必要なのであろう。肉親との死別、あるいは人生の岐路に直面したとき、人は人智の及ばぬ巨大な闇の前に立ちすくむ。そのとき人は闇のかなたに一点の光明を求めて祈るのである。人間は「祈る動物」でもある。しかし物と金、地位と力が猛威をふるう世界から南無の心は生まれない。

彼 岸

仏教の年中行事で俳句の季語として定着しているものも少なくはない。「彼岸」もその一つであるが、春と秋に二度あるので、春彼岸、秋彼岸と使い分けなければならぬ。この彼岸に、仏壇やお墓に供える供物として、

糯米を餡でつつんだいわゆるおはぎがある。春彼岸ではこれを牡丹餅と言い、秋彼岸ではお萩と呼ぶのが古来の習わしである。牡丹と萩、春と秋の風情を感じさせる供え物の呼び名ひとつをとっても、いかに日本人が季節感の中で生きてきた民族であったかがうかがわれる。

ところで仏教の各宗派を通じて営まれている彼岸法要であるが、これは日本固有の仏教行事で、インドや中国には見られないという。しかし「彼岸」の語源はまぎれもなくインドのものである。原語は『般若心経』にも出てくる「パーラミター」、漢音訳で「波羅蜜多」がそれであり、正確には「到彼岸」つまり「彼岸に到る」と意訳される。迷いと煩惱の岸辺を離れて、平安と寂靜の向こう岸へ渡りたいという願いをこめて生まれたことばである。

春分と秋分、すなわち真東から昇り真西に沈む日の太陽の軌跡を人生の道筋になぞらえて、大自然の中に人の世を渡る人間のあり方を問い直す日が彼岸の趣旨とされている。

賽の河原

「これはこの世の事ならず、死出の山路の裾野なる賽の河原の物語、聞くにつけてもあわれなり……十にも足らぬ嬰兒が賽の河原に集まりて、父恋し母恋し、恋し、恋しと泣く声は、この世の声とは事かわり、悲しき骨身を徹すなり」。

日航機墜落時の惨状を物語るむごい光景がまた一つ、生存者の口をついて出た。奇跡の生還をした落合由美さんの証言——数人の子供の元気な声が聞こえていたが、それもだんだん弱くなっていきました——を聞いて、そこが五百人の人びとの墓場と化す前に、地蔵和讃に歌われた賽の河原を思わせる痛ましい最期の数時間があったことを知った。賽の河原は、この世と彼の世の間の幽明界に広がる一望の石の河原であると伝典は語る。そこでは親と死別した幼い子供たちが、河原の石を拾い集めては親たちの追善供養の石塚を積み重ねるのが習いであるという。死屍累々たる群馬県山中の地獄の墓場で、死にきれなかった子供たちは何を思い何を叫んでいたのか。「……そのとき能化の地蔵尊、ゆるぎ出でさせ給いつつ、汝ら命短かくて冥途の旅に來たるなり……幼き者を御ころもの裳の内にかき入れて、あわれみ給うぞありが

たき」。この地蔵和讃に歌いつがれてきた土俗の信仰を、近代は一笑に付すことができるものであろうか。科学技術の粋をこらした装備が一瞬の内に破綻して見せた深い裂け目の向こうに、荒涼たる賽の河原が広がる。

観 想

大江健三郎に『核時代の想像力』（昭和四十五年・新潮社）という評論集がある。この中で大江は広島に原爆が投下された日、広島近郊に住む一人の農家の主婦が目にあたりに見た惨状を紹介している。その主婦は広島から田舎の方へ逃れてくる被爆した亡者のような人びとの群れを見て、まるで『往生要集』の言う地獄絵図そのものでした、とつぶやいたそうである。

『往生要集』は人間が未だ体験したことのない地獄の修羅場をあたら限りの想像力を駆使して垣間見せる書物である。そしてその惨鼻をきわめる世界を凝視した者だけが、一転して至福の浄土を乞い求める心をおこすことができるとの主張で貫かれている。

近未来に起り得るかもしれない核の業火による破壊と破滅の光景は、それが現実体験された時、もはや語る

ことば一つすらない空無の世界と化す。この恐るべき予感を踏まえて、大江は次のように述べる。「われわれの祖先の仏教徒が、たとえば『往生要集』をつうじておそろしい地獄について克明な想像力を働かせるようになったと同じく、われわれが未来の核戦争について激しい想像力を働かせる訓練を日々かさねなければ、ついにわれわれは核戦争に抵抗する力をもたないということであろうと思うのです」。

この未体験の世界を観察し想像する精神の営みを仏教では「観想」と言いならわしている。不戦の誓いを宙に漂わせないためにも、観想の思いを心中に深くすべき四十年目の夏である。

往生礼讃

「一生を穴倉のような巨船のオールを漕ぐ部屋で、鞭と刑罰の中に過ごす人たちの唯一の生きる楽しみは、歌とリズムだったのである。あの船がマルタ島に近づいた時、橈の音よりも、歌声のほうが先に聞こえてきた、とユーゴーが『レ・ミゼラブル』の中でいっている」(中井

正一『美学入門』)。

昭和初頭に活躍した美学者・中井正一が指摘するよう
に、歌の多くは、苦しみ、悲しみの中で生まれるのであ
ろう。とりわけ、死と向かい合う仏教の思想風土の中か
ら、至福の世界を乞い願う数々の「歌」が生まれた。そ
の一つに、中国唐代の浄土教家である善導の撰述した
『往生礼讃』がある。「願共諸衆生、往生安楽国」、すな
わち、願わくは多くの人びとと共に、安楽なる国に往生
せん、との結びで抑揚をつけながら唱え終わるこの『往
生礼讃』は、大唐の都、長安の人びとの心を深くとらえ
た。当時の長安は、遠くローマとシルクロードで結ばれ
た人口百万を擁する国際都市として、繁栄の絶頂期にあ
った。しかしその華やきが落日の発する最後の光芒にも
似たものであることを予感しはじめたとき、人びとは永
生至福の世界である西方極楽浄土を、夕映えのかなたに
求めたのである。その浄土を願ひ讃える歌として『往生
礼讃』が生まれた。哀調を帯びたその浄土欣求の旋律は、
今日でも浄土宗の法要等で唱え継がれている。

鬼手仏心

心臓手術の名医として世界的に知られた故榊原仟博士

が生前活躍されていた頃、博士の医術に賭ける姿をある雑誌が特集するに当って、掲げた見出しが「鬼手仏心」であった。開かれた患者の心臓へメスを入れる博士の白い手術用手袋は鮮血に染まり、患部を凝視する博士の目は鋭く光っている。その光景を写し出したカラー・グラビアに「鬼手仏心」の一語ほどふさわしいことばはないように思われて、印象ぶかいものがあつた。

人びとの苦しみや悩みを取り除いてやるために、仏には手荒な手段を講じなければならぬ場合がある。それは一見非情な鬼の手のように見えるかもしれないが、その手を動かしているのは、深い慈悲の心に他ならないというのが「鬼手仏心」の意味するところである。心を鬼にして——という言い方が日常よく使われるが、仏と凡俗の際立った違いの一つに、仏はどんな修羅場に立っても慈悲の心を離れることはない、という特性をあげる事ができよう。

いま病める時代の症状として、その病根をますます根深いものにしていく学校内での体罰・いじめの蔓延は、弱い者がより弱い者に向って鬼の手をうごめかす地獄絵の世界のように思われてくる。そこは、閉ざされ冷えき

った鬼心の邪鬼が、より弱い相手を求めてさまよい歩く陰惨な修羅の世界でもある。この時代の病根を予言したかのように、江戸時代の名僧慈雲は次のように述べる。「彼此の区別のない一切平等の世界にありながら、人びとはあえて仕切りをこしらえ、隔てを設けて、自分自分を窮屈にしているのだ」と。

白 道

「やがて私の絵は、空も港も大漁旗も、海も、白一色になつてしまふでしょう」。北海道西岸の岩内町に生まれ、終生郷里の自然を描き続けて独自の画境を開いた故木田金次郎画伯が、その晩年に語つたことばである。一つの道を極めつつある者が、その行く末に思い描く世界として、「白」のイメージほど万象を包みこんで、しかも澄明な光景はないように思われる。仏教ではそのような世界に到る道筋を「白道」と呼んでいる。

中国唐代の善導の著作『観経疏』によれば、「白道」とは、南から炎を巻いて迫る火の河、北からは奔流となつて押し寄せる水の河が旅人の行く手をはばんでいる。しかしこの二つの河がせめぎ合うそのわずかな狭間に見

え隠れする一筋の白い道、すなわち彼方の西方浄土へ通じる悟りへの道としての「白道」があるのだとされる。

ここで言う火の河とはわれわれの内なる怒りの心、水の河は貪りの心を具象化したものである。だが、宿業として断ち切ることのできない怒りや貪りの心を内に宿しながら、それでもなお人間にとって救いの道が残されているとすれば、それは火が水を鎮め、水が火を止めるその一点一点を見出して歩を進めて行く以外にはないのではないか。その細い一筋の白い道が、開かれた彼方の澄明な大世界に通じている。深い現実凝視から生まれた「二河白道」の教えを善導はこのように説いたのである。

昔も今も変わりなく「白」のイメージは人の心を永遠なる境に誘ってやまない。

石山の石より白し秋の風 芭蕉

(北海道第一教区・帰厚院)

北海道開教二世紀への提言

研究所員（北海道支部） 片山 浄教

一

浄土宗の北海道開教は、明治31年に時の管長・野上運海宛下が発布した改定宗制の中に、浄土宗開教区制度が創設され、北海道は第二開教区として位置づけられていました。

有珠の善光寺や日本海沿岸の寺で江戸時代に創立されたものもあるが、その数は少なく、道内寺院の多くは明治10年以降、屯田兵や開拓団の入植と同時に宗教活動を始めたものです。したがって時間的には、今日まで約百年の歴史をとどめたにすぎません。

宗勢については、昭和44年刊行の全日仏寺院名鑑によれば、

浄土宗 一三五ヶ寺

真宗大谷派 四八八ヶ寺

真宗本願寺派 三五二ヶ寺

曹洞宗 四三三ヶ寺

日蓮宗 二〇一ヶ寺

真言宗 一三四ヶ寺

その他合計 二、一九四ヶ寺とあり、浄土宗の全体に対する割合は16%となり、しかも、その分布を見ると内陸より沿岸に集中していることがわかります。

一方、戦後の人口動態は経済構造に深くかわり、高度成長時代を経て都市部への人口集中と農漁村の過疎化は、全国的に見られるパターンと同じです。

夕張、空知地方では相次ぐ炭鉱の閉山、二〇〇カイリ

漁業区域による漁業不振、冷害や水害による農業経営の悪化と離農は自然が厳しいだけにその進行は早いものでした。内陸の都市部へ集中した人口と、沿岸に分布する寺院とのアンバランスが見られるのであります。

藤井正雄先生が『現代人と仏教』の中で、宗教浮動人口とご指摘のとおり、核家族化と寺院に帰属しない世帯が都市とその周辺に集中したのであります。

二

およそ宗教教団が、その組織の性格上、教勢の拡大を図らなければ衰退と消滅、残るものは遺跡だけです。開教という意味を、浄土宗寺院の無い市町村に寺を建てることだというハードな面でとらえれば決してたやすいことではありません。現に道内32市のうち8市に浄土宗の寺が無く、地価の高い都市とその周辺では土地の取得に多大な資金を要するばかりであります。

では、先に申しあげた宗教浮動人口の対策はないのでしょうか。かつて檀信徒が寺院に帰属する縁は、帰依仏、帰依法、帰依僧のいづれかであったが、昨今はむしろ利便性が優先する傾向にあります。そんな彼等の目を通し

て宗教を見た場合、

(一) 宗派が多すぎて何が何だかわからないし、特に大きな宗派はない。

(二) お経は難しく何をいつているのかわからない。

(三) お通夜などの説教もつまらない。

単純ではありますがこの批判をこめた宗教に対する不満は、宗教浮動人口をして、益々新興宗教を拡大させる原因といえそうです。

(一)の対策としては、通常の寺檀関係は、仏壇と先祖の位牌をまつり墓地や納骨堂を所有し寺に帰属していると思う家を檀家と称します。では独立して一家を構えた二男や三男に対していかなる対応をしているでしょうか。

彼等と接する機会は法事や墓参りくらいですが、この機会をとらえ、浄土宗念仏の法縁を確実に結ぶことであります。その手段として、念持仏または阿弥陀如来の画像を授与し、たとえ仏壇が無くとも朝夕の合掌礼拝は家庭教育にとって意義あることですと勧めます。但しブランド思考の現代人に対して、念持仏も画像も権威のあるものでなければなりません。少なくとも浄土宗の家庭に育った人達が宗教浮動人口になることだけは制止し

なければなりません。

(二)について。この問題は古くからの懸案であります。解り易いお経とは、経文を現代風に作り変えることではありません。

法事や定例法要、できれば通夜、葬式も宗定の差定に従って作成し、僧侶一緒に読誦すべき時代だと思えます。高等教育を受けた大衆でありますから文字を通して大意を知る力はあると思います。これは各寺でできることであります。

(三)について。北海道では通夜布教が慣例となっており、しかし聴衆側から見ますと、必ずしも満足する状態ではありません。『布教研究所報』第二号でご指摘の通りであります。当然ながら内容、布教能力に個人差がありますから、昨今のマスメディアを通じて秀れたものを撰択する現代人にとって、通夜の布教は苦痛かも知れません。私は教区の教化団または布教師会にお願い致します。浄土宗のお通夜に必ず拝読するお通夜の場に最もふさわしい名文を作成することを。

たとえ若い住職であっても、布教が苦が手の住職も堂々と自信をもって拝読し、浄土宗の念仏信仰を正確に伝

達できる名文でなければなりません。この方法のメリットは、内容にばらつきが無く浄土宗の儀式を特徴づける上にも有効と思われます。

三

三上人の御遠忌を迎えるにあたって、様々な事業が計画されております。こうした一宗あげてのイベントを實行する時こそ、通常足なみをそろえにくい事でも可能性があることだと思えます。社会は高齢化と国際化にむけて進みます。開放手段としての文書伝道、写経、婦人会、青年会活動が部分的、極地的であっても熱心な継統は大きな結果を生みだすことでしょう。一方、宗教浮動人口といわれる不特定多数に対する対応策として前記のごとき、そまつな提案を試みた次第であります。

(北海道第二教区・天徳寺)

三上人遠忌の現代的意義

研究所員（東北支部） 東海 林 良 雲

善導大師一三〇〇年遠忌・法然上人八五〇年生誕会もそれなりの意義と効果があがつたようである。明年明後に迎える三上人遠忌は盛上がりを欠くように思えるが、三上人の業績は偉大であり、決して吉水の流れをくむものとして安易に受けとめてはいけない。三上人の遠忌を縁として報恩行をつとめることが大切である。宗祖法然上人の眞精神を継承堅持し、その教えを受けつぎ、浄土の教えをそれぞれ日本各地に教宣流布された三上人に報恩謝徳し現代の教化に生かす方策を生み出さねばならない。

三上人の業績

宗祖法然上人は、教団造りは最初あまり乗気でなかつ

たといわれる。門下の数は「七箇条起請文」に署名した直弟子、信空・証空・源智を中心として約三百人ほどであったが、滅後五十年ほどになると、日蓮から「日本国中皆一同に法然房の弟子と見えけり」といわれたり、「まがいもの」の弟子が多く世にいた。この様に異義異流が続出していたなかから三上人は正流の伝持者として世に出られた。というよりは出るべくして出られたといえよう。特に三上人は、法然上人の正統を伝承しながらも、三上人それぞれの布教活動でなく三位一体であった。聖光上人は源智上人から法然上人の正流をくむものとして保障を得、そしてこれをそっくりそのまま法嗣良忠に伝え、それを発展させたのである。二祖三代の教学はここに完成した。このような歴史的にも、地理的にも三位一

体ともいう教学の確保が宗祖法然上人の浄土宗を、今日まで綿綿とあることの礎となったのである。

聖光上人の熱烈な布教活動

聖光上人は三十六歳より四十三歳までの八年間宗祖の許で参学修業し、宗祖は「汝は法器なり伝持にたえたり」といったり「源空が所存皆御辺に申し畢んぬ」と書状を送ったり、宗祖自らが正法を伝持するに足る浄土宗後継者と認証し、同門人もそれを認めていた。聖光上人は、宗祖の「偏依善導」の教育によりしきりに心を高祖善導大師に傾け、芸術を浄土宗布教の媒介として、音楽、歌謡に対する関心も深く、「善導大師和讃」「来迎和讃」を唱えたり、地藏菩薩、十六羅漢を造立するなど、芸術に力をいれた巧みな布教姿勢がしのばれる。宗祖の英風・気魄は八十年の全生涯を貫いたといえる。極刑にあいながら寸毫も所信を曲げなかった。聖光上人も吉水の正統をつぐ身の責任から、異義邪説に対して、烈烈とした信火を燃やし、破邪顕正の大役をはたしたのである。筑後の高良山の厨寺で千日の如法念仏を修したとき、一山の大家から「真言止観の寺であるから専修念仏はまかりな

らん、明朝を期して退散せよ」といわれた時も少しも耳をかさず称名念仏するばかりで、その姿はまったく宗祖と同じであった。生命のこもった信仰、熱烈な信仰はいっさいのものをひざまずかせるものであり、一山の大家は聖光の念仏行を、仏が西方から助ける夢をみたといわれている。毎日、六時礼讃、六万遍の念仏、六巻の阿弥陀経を誦し、また千日の別時念仏を修するなど、現在の我々には考えられない、たいへん強い信仰をもっておられたのである。法然門下には、四流、五流、六流或いは、十五流とも言える異義を唱える者甚だ多く、聖道門諸宗からも非難、圧迫も激しかった。聖光上人は、学門的根底に立ち、宗教的体験に基いて研究実証の論拠を示し、親承明証を挙げ、理論的、かつ信念的に自らの主張を披瀝した。種々の行を詮じつめれば、口称念仏の一行となるとして、宗祖の只一向に念仏すべしと軌を一に、行中心の信仰生活一筋であった。

良忠上人の日夜講義と布教活動

良忠上人は、法然上人滅後三年に出家、二十年間、天台を中心とした仏教を研鑽、生仏法師の夢告で聖光上人

と出会い弟子となり、聖光上人から浄土教義の講義を受

ける。聖光上人から「然阿（良忠）は是れ了が若く成れ

るなり」と信頼を受け、三祖となる聖書を受け、その後

上洛し布教にあたる。その後京を立ち、伊勢、信州を経

て、利根川ぞいを関東に、関東教化は群馬、栃木、武蔵、

上総、下総、常陸におよぶ。下総がその中心でその後鎌

倉に移り、布教化に席のあたたまることになかったと

いう。鎌倉でも大活躍で鎌倉仏教の指導の立場にいた。

日蓮の挑戦を受けて立ち日蓮を告訴、日蓮を流罪に追い

こんだ。このあと晩年から死に至るまでの十余年入洛し

宗門に尽力したのである。門下への付法や著述など青壯

年時代にも勝る精力的な伝道魂を発揮、八十歳を過ぎて

もかくしゃくとして著作活動を続け、その健脚は、八十

八歳で京都から鎌倉へ旅をし、六百キロを一日三十キロ

歩いて二十日という驚異の伝道魂を発揮する。また日に

つとむる念仏は日に六万遍といわれた。聖光上人から一

器の水を一器に写すが如く領受したといわれる所以で、

宗祖から聖光上人、聖光上人から良忠上人と、宗祖の熱

烈な衆生救済の信仰の灯が受けつがれてきたのである。

特に良忠上人は著作活動に心血を注ぎ多数の労作を残し、

その著書の多きが故に「報夢鈔五十余帖」と言われる。

源智上人の積極的な布教活動

源智上人の業績の第一は「一枚起請文」の要請である。

『選択本願念仏集』が宗学の根本聖典に対し、「一枚起請

文」はやさしく念仏信仰の精髓を叶露した信仰白書であ

り、要請した源智上人の業績大なるものがある。宗祖滅

後の年、早くも師の恩徳を報ずる為、源智上人は三尺の

阿弥陀如来像を造立、信楽の玉桂寺より発見されたその

仏像より、源智上人に導かれ宗祖の引接を蒙らんと五万

人及以上大衆道俗の方々が利益衆生を基として勸進され

るといふ証しが発見され、改めて源智上人の積極的な布

教活動と行動力の抜群さが見直されている所以となつて

いる。また知恩院の再興も忘れてはいけないことで、大

谷の廟所が破却暴行の法難をうけて七年、恩師二十三回

忌に正当の時、大谷禪房を再興、知恩院の基礎を築かれ

たのである。熱烈な勸進聖であった。学者ではなかった

が、宗祖に対する正義感と報恩謝徳の念はきわめて強か

った。

三上人の遠忌を現代に

いかに受けとめるか

一二三八年、この年に宗祖の二大弟子が此の世を相次いで去り、一九八七年には聖光上人、源智上人の七百五十回遠忌、一二八七年に良忠上人が没して、一九八六年に七百回遠忌の御縁が重なり、この忌辰に我々吉水の流れをくむ浄土宗僧侶は勿論、浄土宗信徒は宗祖の正しい伝灯を伝えることに心を痛めなければいけないのではないでしようか。異義邪説に対して烈烈とした信火を燃やして、破邪顕正の大役をはたした聖光上人、良忠上人、源智上人の足跡をよくたずねて、自己の足元をみつめ、今日の浄土宗の念仏信仰に、迫力とエネルギーを欠いている現状を認識しなければならぬのではないだろうか。今日のいわゆる新宗教の信仰そのものはどうであれ、あの素晴らしい宗教のエネルギーと迫力はどこからくるのでしょうか。私共浄土宗の僧侶や信徒は、今ここで、しっかりとした反省する心をお互いに披瀝し合いながら、三上人の業績を訪ねるならば、三上人が宗祖の本質に立脚した単なる時代的主張に終らないで、対他的教義でな

い所説として三上人と共に、自己にきびしく、念仏の行者としての生活をして実体験から異義邪説に真向うから対決したい。当時の国内外からの政治不安でこの世の終りかと動揺する人々にこれに堪え生きぬくこと、末法という歴史の断絶のなかで、三上人が一般大衆の救済に力を尽したそのことを私共吉水の流れをくむ僧侶、信徒はしっかりと受けとめ、今日の浄土宗の布教の姿勢をみつめなおしていかねばならぬのではないだろうか。それが三上人の遠忌に対する報恩行であり義務ではないでしようか。生きることの喜びと感動を生む力強い人生信仰を現代の人々に広宣流布することです。三上人が宗祖から受けついできた念仏の教えしかないという気迫を、一人一人の浄土宗僧侶は持たねばならないと自覚する好機ではないでしようか。人間の存在はいつも末法の様相を体しており、末法の永遠性を自覚する時、まさにこれが現代の人々に遍く求められておるはずで、三上人の布教力を私共は学びとらねばならない。宗祖は八百年前、選択本願念仏の歴史的生命によって時代を救いottaといわれています。現代もまた、その真相においてはある意味で、その八百年前より更に深刻な末法の様相の時代だといえ

るのではないでしょうか。私共はこの世界的な末法の様相を、勇気をもって三上人が不惜身命で日本国民、いや人類が救われるよう念じつつ、法然上人の真意を正しく受けとめ、行動されたことを増幅し、現代に向かって、

世界人類を救う念仏という、永遠不滅の生命力を打ちこんでゆく使命があるのではないのでしょうか。活性化といふことが最近よくいわれますが、もう一度宗祖の教学と布教に生命をあたえていくことが、現代に生きる私共浄土教徒に課せられた、自信教人信の道であると思います。

私は学者でもないのですが、三上人の教学や足跡について、少しも現代的理解について展開できませんが、三上人が宗祖の正しい法灯を三代にわたって展開させ、素晴らしい浄土門の礎となった所を、当時の伝統的宗学に基いて、現代的理解において教化を推進し広宣布せねばならぬいのではないのでしょうか。時代が変わり、信仰の受けとめ方や考え方にそれぞれニュアンスの相異はあっても、三上人の特に称名念仏の実践を通し、その教えの中に入る様な布教活動の実践をしていくことが大切であり、三上人が宗祖から受けついで、熱烈な布教活動をしたその原点に還ることによって、浄土教の精神を、未来に向か

って創造し、展開していききたいものである。それが三上人への報恩行であり、それが取りも直さず宗祖法然上人への、何よりの報恩行となるはずである。

参考文献

- 一 『法然門下の教学』安井広度（法蔵館）
- 一 『法然上人をめぐる人々』稲岡寛順（浄土選書）
- 一 『法然浄土教と現代の諸問題』林靈法（百華苑）
- 一 『浄土教の思想と歴史』香月乗光（山喜房）
- 一 『輝く法灯』宝田正道（浄土宗）

（宮城教区・雲上寺）

地域に根ざした教育活動のあり方

研究所員（東海支部） 浜 村 泰 道

青少年教育のあり方が、国民的な課題の一つとして、クローズアップされてきております中、私たち宗門に携わる者として、次代を担う青少年の健全な育成に対する手だてを、真剣に考えなくてはならない時機に來ていると考えます。そこで私が指導してまいりました子供会活動を通して、青少年教化のあり方を考えてみたいと思えます。

現代の子どもの姿は周知の通りであり、まさに退廃文化の中で崩されようとしている心身、これを放置することとはできません。「宗教なき教育は知識の悪魔をつくる」と西洋の哲人の弁に表現されますように、まさに現代日本の社会構造そのものにメスを入れなくてはならない重大な時機に直面しております。その中であって、宗教指

導者に課せられた使命の大きさを認識する必要があるます。

古くから地域社会における教育の力が日本の精神文化を創りあげ維持してきた事は、言うまでもありませんが、戦後四十年を経過する中で、信教の自由という民主主義の理念が信教の不在を作りあげたことに対して、憤りを感じずにはおれません。つまり信教は自由であつても不用ではないはずであります。しかし科学技術の発展とともに科学に埋没してしまつてはいないでしょうか。科学する者の心を育てられてこそ、生きた科学であり平和の繁栄が得られるのであります。仏教においては、葬式仏教の汚名から脱皮し、真に求道の仏教に戻さなければならぬと考えます。

浄土宗においても、児童教化連盟が結成され長い活動の中から、ボーイスカウト・ガールスカウト・お手つぎ子供奉仕団等の活動がなされ、宗教情操のための教育が実践され成果が現れているようですが、まだまだ十分な地域活動として根を下ろしていない現状であります。ここで私は寺院を拠点とした仏教子供会の組織化を提言したいと考え、二年余の実践の経過を報告申し上げたいと思います。

一

子供会を組織する中で最も重要な事は、その目的であります。宗教指導者の目的と親の目的と必ず一致することが組織化に欠くことができません。しかし必ずしも一致しない場合が多いようです。親のねがいを分析してみますと

- (1) 学力がすぐれる。
- (2) 健康である。
- (3) 他の子供にまけたくない。
- (4) 友だちと仲良くできる。
- (5) 人に迷惑をかけない。

大別しますと右のようなねがいを持っているようです。私は子供たちに「たしかな学力」をつける事で、親のすべてのねがいを満たすことができると考えております。

「たしかな学力」とは単なる学習能力の意味でなく、真に人間らしく生きる能力のことであり、その訓練が幼い時からされなければ「たしかな学力」は育たないのです。そのためには、感性を豊かにし、自立(自律)の心を育て、忍耐力を養う活動が重視されます。幼い頃からの心の教育が、将来大きな力となって発揮されることとなります。

次に大切なことは、子供たちが今何を求めているかを的確につかまなくてはならないでしょう。子供は仲間と共に育ち、冒険と感動の中で生きていくものですから、そのねがいを満たすための活動を取り入れなければ子供は集まりません。感動を与える活動の一つに、宗教的情操活動も良い方法であります。本の読み聞かせ(参考— 仏教話大系・浄土宗新聞の活用)や、礼拝行、座禅などをさせたり、映画・VTRの活用も子供は喜びます。また草花の栽培も効果的です。私は子供たちに菊作りをさせてまいりました。これは春、さし木をして根付く六月に

鉢に植え替え、夏に育てあげ、秋に花を咲かせる、一連の作業を通して育てる喜びを感じとらせ、すべての物が生きている実感を味わわせることにより生命の尊さを学習させ、ねばり強い心をも身につけさせることにつながると思います。また私たちは地域の文化祭に積極的に出品させていますが、これは子供たちの育てあげた喜びを、親が素直に誉め讃えるためであります。

感動する事は心を磨くことですから、色々な事柄に対して意図的に指導してまいります。時には冒険を楽しむような活動を企画し、子供たちの自主的な活動を促すこともあります。たとえば登山や探検などは子供に感動を与えることができます。昨年実施した例を述べてみます。近くにある「行者の岩場」と呼ばれる、鋭い岩山を登りました。もともと修験道の行場として古くより開かれた峻酷の霊山でありましたが、近年はハイカーがおとずれ、安全策が施され一般の人たちも十分な装備さえすれば、踏破することのできる岩場であります。指導者側としては、あらゆる危険性を考慮しながら計画を練りあげ、子供たちにも危険性を認識させます。これはより安全に行動し判断する基本でもあるからであります。たとえば

ロープの使い方から、歩き方、荷物の持ち方等、細部にわたるチェックをしながら、危険に対する俊敏な対応の仕方を訓練することにより、計画は実行にうつされます。無論万一の事故にそなえての保険の活用も忘れてはならない事柄であります。(スポーツ障害保険)

このような行事を通して子供たちと語り合い、自然と人間との調和、生きている喜び、生命の大切さ、感謝の心を教え、幅広い人間教育の場としています。

二

青少年教化の場作りとしての手法の一例をあげましたが、地域性によって変化に富んだ方法があるでしょう。その他過去から実験的に取り組んできました内容をあげてみます。

- (1) 登山
- (2) 芝居
- (3) キャンプ
- (4) 料理学習
- (5) 工作
- (6) 奉仕活動

(7) 新聞作り

(8) 子供御忌

(9) 盆まつり

(10) 花まつり

活動に対して企画から実施まで、常に子供を交えて討議し、子供たちの夢をより多く取り入れるために配慮するよう心がけなくてはなりません。たとえば花まつりを企画する場合「釈尊ご生誕をお祝いする」ことの基本をはっきりさせることは当然ですが、この日こそ寺の御堂全部が子供の場となるように心がけます。作品展のコーナーを設け、作品や絵、習字等の日頃から温めている作品展示をします。集まって来る親に対してお話しの間を設けたり、またはやさしい仏教の教え、家庭教育のあり方などのパンフレットを配ったりする機会に利用するのです。このような教化活動を組み立てることにより、子供から親へ、親から地域全体への教化の広がりとなり、寺院と地域の連帯は強化され真に仏教教化の目的をはたす助けとなり得ることを考えます。

三

子供たちへの教化内容について考える場合、指導者側が認識しておかなくてはならないことは、現代っ子の意識の問題であります。

今年の「七夕まつり」に書き込まれました子供たちの「ねがいごと」を調査する機会を得ることができました。

- (1) お金もちに 四二%
- (2) 勉強ができるように 三三%
- (3) おこづかいが増える 一〇%
- (4) 習い事が上手に 三%
- (5) その他 一二%

右に示すように「お金・勉強」に執着していることがよくわかります。しかしその割合に比べて(3)のように現状には満足しているのですが(1)(2)の内容には共通したものの考え方があるように思います。つまり学力を高め安定した会社に勤め、高収入を得、平穏な生活をねがっていることが窺うことができます。

現代っ子は大人社会の縮図をみごとに映し出している感があり、宗教心に対しても同様のことが窺えるように

あります。ユニークだと申しましょうか「ねがい」として「ねこの子が生まれないように」というものがあります。現代人の感覚をはっきり表現している言葉のようではありませんか。

現代人の宗教に対する考え方はさまざまですが、特に言えます事は「宗教とは現世利益」と考えている人の多い事で、諸々の神社仏閣にそれを見る事ができます。古来よりその思想の中で日本人は生活してきたのであり、未来に続く現象でありましょう。

さて、それではこの現実主義の子供たちにとどのような教化が相応しいかを、考えてみたいと思います。まさに現実主義にはそれをもって対応することが合理的に思え、私は科学的な内容、現実的な内容を教化の中心にしております。たとえば人間と自然と科学を主題に置いて話をしております。子供たちにはそれが最も理解し易いからです。こうした方法で、命いのちの小ささ、(自分の生命が如何に小さいか)の存在を教え、万物との調和の中に自分が存在している事を知らしめています。こうした内容の中から、いたりや思いやりの心を育てていきたいと思いません。

四

未来社会を担う子供たちに真の幸福を教えるために今、宗教者はあらゆる手段を用いて教化の努力をしなければなりません。その一方策として地域に根ざした宗教情操教育の実践が各寺院においてなされることにより、仏教の社会化が醸成されることになるのではないのでしょうか。ニューメディア時代の中で宗教者は常に現代感覚を養い科学的認識を持ち、形にとられない教化方法を考察しながら、現代に即応した教化をするべきであり、そのための高度な学習能力も身につけなければなりません。すべての社会の機能が人間の心から培われるような精神文化を育てあげるための努力が、宗教指導者に課せられた今日的使命ではないのでしょうか。

(伊勢教区・称念寺)

十念（念仏）の綱要

——唐沢山阿弥陀寺に参加して——

研究所員（東海支部） 宮 崎 浅 良

一

長野県唐沢山阿弥陀寺様を会所として、昭和六十年大正大学伝道実践道場が、八月二十八日から八月三十一日迄、三泊四日の日程にて修行されました。一度は参加してみたかった私でしたが、縁成有って土屋光道先生の御依頼を受け、指導員という責務を汚しました。参集学生は約五十名、各々四班に分れ、指導員と副指導員の二人がペアで各班一組を受け持つ指導形態、時恰も日航YS八一一九号ジャンボ機旋回後墜落炎上の計報を紙面が賑した直後の実践道場でもありました。御存知の様に、墜落寸前の約三十分の間、機内の乗客の各人々は色々な

思いで種々悩まれ、後に残りはせぬが様々な思いを心に刻まれた事かと思えます。また或る人はメモを取り遺書とでも申しましょるか、家族へ宛てられた絶筆ともいべきノートも発見されました。そこで特別企画としてその件に関する討論会の時間が各班に持たれ、私は二班を受け持ちました。課せられたテーマが「日航機墜落炎上事故に関する云々……」と題されました。

二

先ず因に学生諸君に問いかけました。

「ここに参加している皆さんの中で、彼のYSジャンボ機に若しかして乗っていたとするならば、諸君ならば、

どの様な態度であつたらうか。また仮定ではあるにしろ、三十分間という限られた時間なら、君達自身どの様に對処したであらうか。乗客の内にも未だかつてこれまで神や仏を信じなかったという無神論者もいた。しかし最後には神様助けて下さいと記されてあつた。その点君達には日々、否、思い付いた時にだけでも手を合わす心構えを、持ち合わせて居るだらうから、その点をも加味して、自分なりに思い感じている意見、また蛇足ではあるが自分が若しかして、彼の場面に遭遇していたらどうであつたらうか、という仮定法過去としての考をも、述べて頂きたい」

種異様な意見が交され、その中のごく一例に過ぎませんけれど、左記を御覽下されたい。

日生「若し自分が乗客の一人なら、後先の事は何も考ずに、ただ瞑想に耽っている」

受けて曰く「瞑想に耽っているその間、何も思わず考ずに居られるだらうか。もし居られるとしたなら、それこそ無我の境地に入れただらうか、どうだつたらうね。もしかして観念の念仏を申しているのか」

日生「いいえ、念仏も申さず、ただ瞑想あるのみ」

間も髪も入れずに、二、三人の学生「念仏申して本當に助かるのか、想像するのに、機内での彼の様な状態なら錯乱して、とても念仏を称える自分にはなれぬ」と。

受けて曰く「成程ね。そうしてみると、やはり私の方が皆より飯を喰っている回数が多いね。幾らか機内混乱している状態であるにせよ、スチュワーデスからマイクを借りて、講釈技きにして『皆様、落ち着いて下さい。皆様の助かる道は唯一つ有る。私の口まねで結構だから、今から申し上げる事を大きな声で言ってみて下さい』

(少々間をおく、何かなと注目するのを待って)『南無阿弥陀仏』、続いて乗客一同唱和、『南無阿弥陀仏』、続いて乗客一同唱和……と十遍のお念仏を唱和して頂きますね。

その中には反く人もきつと居ると思うが、ならそれでも良し、口称する人だけでも良し」

殆どの学生「そんな事は無理でしょう。」「まず不能に近いと思いますけれど。」と色々耳にしました。

受けて曰く「今迄に一度なりとも御先祖、御本尊を仰ぐことのなかつた人でさえ、臨終の間際を迎えたならば、その人の耳元で呟く様にゆつたりと十遍のお念仏を称えてあげると、きつと、その人も、たとへ声には出ずとも、

口をもがもがさせ乍らでも、念仏を称えるものですよ。

茲ですよ、浄土宗の有難い由縁は。聞名往生と云って、仏の御名を耳にし乍ら、生れ代らせて頂けるといふ事です。だから亡くなれば必ず枕経へ行くとしよう。弥陀三尊の御來迎を願わんが為でも有るのです。息引き取ったとはいえ、直に全身の細胞の活動が止まるのでは無く、種々なる細胞は爪先から止り、段々と身体の上の方へ揚つてきて、耳が全く聞えない状態になるのは早くとも三・四時間は掛かり、遅い人では何と七・八時間位迄、親族有縁の人達の話声が聞えているのですよ」

するとH・S・T三学生「浄土宗にもそんな聞名往生というのが有るのですか。念仏で往生するとは知っていますが」

受けて曰く「そうですその通り。念仏往生が一等有難く誰にでも容易に申せて、たとへ目の見えぬ人でさえ念仏申す事により往生出来るといふ、往生の方法としての代名詞でも有る。この他に三つあり、参考迄に申せば(イ)諸行往生(善い行いをする事に徹する、念仏を申さぬとも皆から喜んでもらえる施、行為、所作を懸命に作す事により往生を願う方法)(ロ)助念仏往生(諸行往生と似かよった往生の仕方

で、念仏も申すが皆に喜んで頂ける行為をする)(ハ)聞名往生

(仏の御名を聞き乍らの往生の仕方)の三つが念仏往生以外の往生の仕方ですよ。それからして善導大師のお示しなされた五種正行にも、称名正行が一等の綱領であると教えられている。その点からも御諒解頂けるといふ、浄土宗では君達の言う様に念仏往生を願ひ、一番有難い、行じ易い再生の方法を、僧籍の身にある私達は檀信徒に流布せねばならぬ使命がある」

記述した外にも色々な意見があったが、是はと思つた私の記憶に残っていたのを記しました。

三

前述した「機内で十念を称う」を受けて、

「何故、浄土宗では、最低十遍の念仏を申さねばならぬのか。一念でも三念、五念でもよいではないか」

賢明な諸大徳御一同からは「愚考としかいひ様がなし」と御叱正を賜ると思ひますが、最後まで眼をお通しくださいたい。

A、形式的には経本にも十念と有るから。

B、表面的には本来の意味は判らぬが儘に。

C、内面的には培われてきた念仏が本当に有難いから。

単純に考るならこの三点位ではないだろうかと思いません。そうなら十念申さずとも一念でもよいではないか、成程と思います。時に一念申す丈でも結構な様に受け取れるが、御承知の如く法然上人に反旗を翻した、各々諸師の義の中にも内容説明の過程として取り上げれば、幸西の一念義を例に引いてもお判りと思います。宗祖門下での異義者の一人でもある一念義の代表者、成覚房幸西は浄土往生するのに多念を要せず、一念を以って往生決定すと主張した。その主意は、真仏は本来衆生が具しているから、凡夫の信心が仏智の一念に冥合する時、決定往生疑い無きものにして、一念の外に多念を必要せずという義。無論、幸西の一念義も最もと思う。善導が『観経』下下品の苦に責められて仏を念ずる能わざる行者が、臨終に僅か一声の称仏によって救われたとある事実からしても、しかし浄土宗は右の一念義よりも上尽一形下至十声一声（念仏行者口称名相承の方法）の方が尊いと教えられている。因みに一形とは人の形骸の存続期間、即ち一期・一生涯と同義語で、上は尽寿一生涯の念仏から、下は十念の念仏に至るまでという語意。ま

た『往生礼讃』に「但だ信心求念するものをして上一形を尽し、下十声一声等に至る迄、仏願力を以って往生を得やすからしむ」と有る。

四

十念（念仏）の綱要は左記にあるのではと私は思います。因みに念の意義は「思い出す、記憶する事、過去を追念する事、憶念ともいう」とあるが、主観ですけれど、上上人（念仏行者）也と思う我々凡夫が、上求菩提下化衆生の信念を念う^{おも}処の今、気付かせて頂いたその気持心構えではなからうか。

◎念仏（仏の功德や相を心に思い浮べること）

今この様にこうして居られるのも何億という兄弟姉妹を代表して、父母から生を受け、先祖の血の繋を与えられたこの御恩と、阿弥陀如来のお加護を受けて生かされているという事は、本当に有難い事であると念う気持で南無阿弥陀仏。

◎念法（仏法の秀れている由縁を念ずること）

お釈迦様のお説きなされた經典や善導大師のお示し下された、み教や『観経疏』散善義中より御苦勞され、開

宗された法然上人の開宗御文、元祖様の御法語を頂き私達は何ら苦行せなくとも、念仏を唯申すだけで、有難き御縁を頂けるお蔭を念いつつ、南無阿弥陀仏。

◎念僧（教団・僧の功徳を憶念すること）

難行苦行しなくとも、唯、弥陀の名前を口に声を出して呼ばせて頂くだけで、この世で生き乍らにしてでも、再生（現世証得往生）をも出来得る浄土宗の教団と、そのみ教えを口授心伝して下さる各住職、宗侶に有難く感謝しつつ、南無阿弥陀仏。

◎念施（けちで欲ばりの心を離れること）

三宝を敬い念う気持にならせて頂ければ、自然と掌を合す姿が身に付いてくる。左が仏・先祖と受け取り、右は衆生であり私と思い、左右の掌を合す事によって、嗚呼、有難い先祖様阿弥陀如来のお蔭やと、大きな心持ちになり欲ばりの心やけちな心からも離れ、自ら喜んで布施出来る人柄にならせて頂けるといふ様に、自身有難く念いつつ、南無阿弥陀仏。

◎念戒（念の戒を憶念すること）

日々夜々、戒律も有り判って居乍ら、私は戒を守るにとすら出来ぬ、罪深い凡夫です。だから罪障消滅の為に

お名号を口称する、その事により一惡滅し、善心生れる様に、南無阿弥陀仏。

◎念天（神を憶念すること、惡念を離れる為である）

天地大宇宙の恵によって私達は生かされているけれど、何程も恩恵を感じておらぬ筈、さも当然であるかの様に思い続けている、その当然であると思う、悪い考えから離れようと念じつつ、南無阿弥陀仏。

◎念安般（諸々の衆生に対し、尊重恭敬して下劣する心なきこと）

資本主義社会の今日、貧富の差は有るけれど、譬へ家貧しき人に対しても、決して下劣する心を持ちませんと、念う気持で、南無阿弥陀仏。

◎念休息（世論に捉われず菩提分に於て決定を生ずる心）

私達は生命有つての物種です。朝から日傾くまで働き、体を動かす姿は、傍目には本当に尊く思われるけれど、時折世間の目を気にせず、また世論に捉われずに仕事の手を止めて、身体を休める必要がある。休んでいるその時に、自分は自分一人の身体であり乍ら、やはり私は御仏と一体であると受け取る気持、能く口にされる和歌に、「御仏と共に一日働いてわが家へ帰る今日の嬉さ」の念

から、南無阿弥陀仏。

◎念身（布施無き経・身命財諸々の善根を植し雑染あることのなき清浄な心）

ここまで申し述べてきました一つひとつの、各々の念の中からは、自と念仏が口から出して称えられる人柄にならせて頂ける、諸々の善根即ち念仏相統出来る身の上にならせて頂けた、阿弥陀如来を仰ぎ、身命財をも苦にせず、投げ出せる清浄な心にならせて頂いた如来様に、感謝する気持で、南無阿弥陀仏。

◎念死（諸如来に於て諸相を捨離し随意を起す心にて、死は避ることが出来ないことと念すること）

生とし生ける凡てのものは、近いか遠い将来に於ては、いづれ愛しい者との訣別を覚悟せねばならぬ事實は、避ける事の出来ぬ現実です。そこで幾時、如何なる時に弥陀三尊の御来迎を仰ぎ、臨終の夕を迎えましょうとも、決して錯乱せぬ自分を形作りたいと願う心持、『発願文』の真髓をよく体して、往生出来る自分を願ひ、阿弥陀如来に自分の総てを委ね往生させて頂くために、南無阿弥陀仏。

かくなる心持心構で一念一念の繰返々々の念仏を申し

続ける旨が念仏一会であり、念仏相統である。念仏相統の本意は当然乍ら、念々称名常懺悔でもある。

（伊賀教区・専念寺）

テレホン法話について

——アンケート調査によるその実状報告——

研究所員（北陸支部） 大門 俊 正

一宗がテレホン法話なるものに本腰を入れたのが昭和五十六年。

そして、北陸ブロック教化センターの一教区一テレホン法話の意向で、福井教区では拙寺ということになって一年半。

昨年一年は師匠が担当し、今年正月より私が法話を続けて現在に至っていますが、その間何かと思うこともあり、その感想を述べるという手もありましたが、全テレホン法話寺院にアンケート調査をして、客観的事実を把握することにより何か問題提起できないだろうかと思考し、後記のような項目で調査を行いました。

『浄土宗テレホン法話集』（昭和六十年度版）最後のペー

ジの「浄土宗テレホン法話開設状況」をもとに寺院名鑑で住所を調べ、全国六十三ヶ所に八月一日付けで発送し回答をお願い致しました。

住所、番号調べの段階で、ある程度予想したことですが、番号は一宗に届けてありますが今は休止中ですという所や、番号違いや、法話から童話専門に変えた所、本年より始めたという所など、かなりさまざまの変容がありました。

設置に際し一宗に届ける義務があるのかどうか、あるいは、設置状況を把握する拘束力が一宗にあるのか否かは知りませんが、電話というメディアの性質を考え、また、良くも悪くも変化するのが生の教化の実態というも

のだとしたら、一年の始めに間違いだらけの番号を書いた本を一冊出し、それで役目は済んだと考えているのならとんでもないことと思います。しかも、ほとんど同じ間違いを、新しい情報を提供すべき『浄土宗新聞』七月号が犯しているという事実は、我が宗の広報組織のお粗末さを如実に示しています。どんだん変化するものに追いついていけないしなやかさ、いや、もつと言うなら先を讀んでリードできるようなやわらかい頭脳を備えてしかるべきではないでしょうか。

また、アンケート調査に好意的にお答え下さった方々に今一度お礼申し上げます。お盆の忙しい時期にあたり、何の得にもならぬ繁雑なことをお願いしたにもかかわらず、ほとんどの方がなんらかの形で御返事頂き本当に有難うございました。

教学大会では十五分という短い時間でもあり、また、私の不手際も重なり、回答者の方々の意見を十分に反映できなかった所を本稿では多少なりとも補って、誌上発表とさせて頂きます。

一、アンケート調査内容

- 1 テレホン法話をいつから始めましたか
- 2 始めた動機は
- 3 テープを変えるのは
 - a 一週間（曜日）ごと
 - b 毎月1の日ごと
 - c その他
- 4 起用テープは
 - a 一八〇秒
 - b 一五〇秒
 - c その他
- 5 一日平均何回電話がかかってきますか
（はっきりした数字がわかればなるべくこまかく、もしわからなければ大体の数字を）
- 6 法話担当者は
（毎回本人がかならずするとか、誰かと交代でするとか、教区の布教師にたのんでいるとか具体的に）
- 7 宣伝のために何かしていますか
（新聞に広告を出すとか）
- 8 話の内容で苦心、心がけていること
（なるべく分かりやすい通仏教的なこととか具体的に）

9 他の教化方法、活動に比べてテレホン法話の利点

欠点はどこにあると思いますか

(対象が不明確で不安だとか、寝たきりの人に喜ばれたとか、なるべく体験にもとづいて)

10 今後テレホン法話の展望は

(大変有意義だから子供用を増やすつもりだとか、あまり電話がかかってくないから止めるつもりだとか)

11 その他(今までの質問以外にこういう大事なことがあるぞとか、教学大会でぜひ強調して欲しいというようなことがありましたら)

二、回答にもとづいて

データを列挙する方法もありますが、煩瑣な数字は避けて、データから読みとれるものを述べてみます。

1 設置寺院・箇所、本数

電話本数にして七十本あり、複数本数(子供児童専用の童話、仏事・經典の解説・案内など)の所も三つあり

2 開始時期(質問1・2)

五十六年に十七本設置され、その後五十七年から六十年までに設置されたものが三十二で、ほとんどが

五十六年以降であり、五十六年が我が宗テレホン法話元年といえようか。

しかし、それ以前に(四十九年開始の坂野泰巨師のダイヤル法話を嚆矢とし)すでに五本設置されていた事實は大いに評価されてしかるべきだと思います。

3 テープ交換は(質問3)

月三回(毎月一日)が五十七%、一週間ごとが十七%と、この二つで全体の八十四%を占めている。

4 使用テープは(質問4)

一八〇秒テープと一五〇秒のそれがほとんどで、その比率は大体半々。

三、内容的なことに関して

アンケート調査と並行して、七月二十八日に全テレホン法話を録音してみました。

いろんな方のお話が聞けると楽しみにダイアルを回し始めましたが、数を重ねていくうちに同じ話が何度も出てくるようになりました。あれ、これはどういうことかなど調べてみますと、『浄土宗テレホン法話集』の中に書いてある話でした。時期的に「お盆」「大暑」「お施餓

鬼」の話がゾロゾロ出てきました。

あるブロックの四箇所の寺院が全部同じお施餓鬼の話だったのには、一瞬啞然としました。

全くのオリジナル（創作）と思われるのは一割強、二割弱でしょうか。

宗務の担当局としては、『法話集』が大いに利用され結構々々、と喜ぶべきことかもしれませんが、反面、浄土宗は教化宗団だという趣旨からするなら、実に寒々とした実情と言わざるをえません。

アンケート回答の中には、一宗にもっと適切な資料（つまりはそのまま使える法話）を欲しいと訴えている人と、反対に、一宗のそれはピントはずれ、ロクなものはない、私は毎回必ず自分で原稿を創るという少数派に分かれていました。

伝統的な法要などの話はそのまま使える教則本もあって良いかとも思いますが、それとても一度元の話をばらして自分の文章で書き直すぐらいの努力は惜しむべきではない。そして、テレホン法話を長年続け、利用されている回数も多く、何よりも回答から熱い情熱が感じられるのは間違いなく後者（創作派）の方だったことを付け加

えておきます。

当然のことですが、布教、教化というものは自分の言葉で表現してこそ真意の伝わるものです。その過程では、書いたり消したり、ああでもないこうでもない、うまくいったり失敗したりの試行錯誤がありますが、そういう苦しみを通してやがて、その人らしい話がだんだん出来上がってきます。それなくして右から左に使える話をなどと考えるのはあまりに安易な態度だと強く主張しておきます。

テレホン法話をやるようになってから、よく本を読むようになった、街を歩いても新聞を読んでも今までとは物の見方が違う、一週間、十日がたちまち過ぎ、原稿を書かねばという緊張感が毎日あって良い、などと回答した方もかなりあります。

苦しみなくして真の喜びはありません。テレホン法話の同志よ、やり始めたら続けましょう。そして、少しでも良い話を、もっと人に訴えられる話を、今度こそ！という意識が私たちを高めてくれることを忘れてはならないと思います。

四、アンケート回答よりヒントを得ての

一、二の提案

今回の調査で気付いたことの一つに、テレホン法話の設置場所に、東京などの大都會が以外に少なく、中小地方都市での定着が目立ちました。

拙寺の地（北陸真宗門徒の盛んな土地柄）では三分でなんの話ができるものかという雰囲気すらありますが、寺との縁の薄い大都會なら電話という方法はわりと受け入れられやすいものとなると思います。寺へなんか抹香臭くてと敬遠する人も、坊主の話なんかと馬鹿にする人も、電話なら聞いてみようかとその気になるのではないのでしょうか。

そして、一方的にこちらから流す法話形式からもう一歩進めて、電話相談という方が適切と思われれます。

何かで読んだおぼえがありますが、お寺はお葬式、法事をしてもらう表の宗教、新興宗教（もはや私たちはこのような蔑称はやめるべきではなかるうか）こそ苦しい時に親身になって相談ののってくれる教えというような使い分けを現代人はしているそうです。

我らが宗祖の戦乱の巷での活躍、救いからもれていた人をこそ手をさしのべられたことを思う時、電話というものを使って現代にきりこんでいけないでしょうか。

寺や僧侶に親しみはなくとも、電話には親しみを感じているのが都会の人だと思えます。

そして、「浄土宗東京事務所テレホン法話です」、「浄土宗務庁テレホン法話です」などというようなトロクさいことを言わず、「増上寺です」とか「こちらは知恩院です」という言い方がはるかにすっきりもし、また、人々に受け入れられます。浄土宗なんて知らない人も「増上寺」といえば、ああ、あの有名人の葬式のあった所かと分かってくれます。残念ながら創価学会ほど我が浄土宗は知名度が高くないことを素直に認めましょう。まだ少しは知られている知恩院などの固有名詞をフルに利用して、それから念仏、法然上人と話を進めるべきです。

上手に宣伝したならば、大都會での電話を利用しての教化活動の発展性は、はかりしれないものがあると思いますがいかがでしょうか。

五、最後に

結局は私の勝手な考えを述べることになったようです
が、アンケート調査の整理、教学大会での発表からさら
に、発展、昇華させたものと読んで頂けるなら幸いです。

これからテレホン法話をやろう！ と意欲に燃えた方
は当方に各所より頂戴した資料があります。遠慮なく御
請求下さい。特に、今回言及していませんが、それぞれ
の方が宣伝方法に何かと工夫されています。ポスター、
新聞記事等々参考になるものがあります。

また、五十七年に宗務庁より出た坂野泰巨著『教化活
動事例シリーズ——電話伝道』は大変分かりやすく親切
にかかれていて大いに役に立ちます。

(福井教区・善導寺)

仏教の実態

—白石部落の調査から—

研究所員（北陸支部） 山 本 雄 毅

「新しい土地に行ったら、その土地の人に習え」かつてハワイ開教区へ出発の折、椎尾弁匡御法主からおくられた言葉です。富山県の白石部落に来て六年、これからの寺の教化活動方針を考えるにあたり恩師の言葉に従ってこの調査をした。

(一) 調査の目的

○部落の人々がどう仏教的習慣を生活の中に守っているか

○仏教についてどう考えているか

(二) 調査項目

○宗教の分布 ○仏壇 ○月まいり

○法事 ○信仰生活 等に関する質問を23にわけた。

(三) 調査対象 富山県射水郡下村白石部落
 (四) 調査総数 ○調査依頼数 81 ○回答数 79

○回収率 七・五%

(五) 調査結果

○回答者の性別と年代

	20	30	40	50	60	70	
男	6	4	9	5	4	4	
女	2	6	7	21	10	5	
	51	35.4					%

男女とも50代の回答者が多く、特に女性が家庭で中心的役割をしていることをうかがい知ることが出来る。

○宗派は何ですか

浄土宗 19 (当寺檀家5) 真宗 (西) 22

真宗 (東) 15 曹洞宗 16 日蓮宗 3

時宗 4 真言宗 2

浄土系 (浄土宗・真宗・時宗) 69%で、それを所属寺院別にみると、浄土宗 3 真宗 (西) 4 (東) 2

○仏壇がありますか

ある 77 (七〇・五%) ない 2 (二・五%)

○仏壇の大きさは (サイズは代 100代は約幅3尺)

50代 3 70代 14 100代 9 150代 23

200代 24 250代 4

100代から200代大が56%で、経済的負担の大きいことが判る。

○仏壇を購入したのは

35年以上前 四二% 30年前 九三% 25年前 〇%

20年以上前 六・五% 15年前 一六・八% 10年前 一五・六%

最近 七・八%

○御名号の掛軸がありますか

ある 四二% ない 五八%

山下現有大僧正・万誉大僧正・山崎弁栄聖者のがある。

○仏画の掛軸がありますか

ある 四二% ない 五八%

山崎弁栄聖者のが数多い。徳本行者の一枚起請文も一つある。

○月まいりをしてもらいますか

はい 四九% いいえ 五一%

「いいえ」の家にはまだなくなった人がない。

○誰が月まいりをしますか

自分の寺の住職 24 二元三%

縁故の住職 51 三三%

なし 4 四九%

浄土系の縁故住職 (当時) は4軒ある

○月まいりは何回ありますか

1回 12 一六% 2回 32 四〇・五% 3回 21 二六%

4回 9 一二% 5回以上 1 一・三%

月まいりは檀信徒と対話し親交を深めるよい機会です。情報交換も行われる。

○法事は何回忌をつとめますか

一周忌、三回忌、七回忌、十三回忌、十七回忌、

廿三回忌、廿七回忌、三十三回忌、五十回忌

全部つとめる 五・三%

ほとんどつとめる 九四・五%

※「ほとんど」には「全部」の数も含んでいる。

○法事はどこでつとめますか

自宅 73 寺 0 無回答 6

○葬式はどこでしますか

寺 58 三・四% 自宅 21 二・六% その他 0

○お寺の行事を手伝うことがありますか

はい 男 16 五% 女 38 四・五%

いいえ 男 12 四・八% 女 13 二・五%

女性が男性より多いのはお講当番に入っているから。

○仏壇におまいりするとき

合掌す 合掌し念 お経を
るだけ 仏する あげる (お経と回向
戒名をよむ)

男 11 14 3 0

女 11 23 14 3

男女あわせてほぼ四人に一人がお経をあげている。

○平生念仏を称えることがありますか

ある ない

男 24 五・七% 4 一四・三%

女 42 三・三% 9 七・七%

仏壇におまいりする以外でもほとんどの人が生活の中に念仏を称える習慣をもっている。

○死後の世界を信じますか

信じる 信じない わからない

男 15 三・六% 11 三・三% 2 七・二%

女 35 六・六% 2 三・九% 14 二七・五%

○極楽の存在を信じますか

信じる 信じない わからない

男 17 三・七% 8 二・五% 3 一〇・七%

女 29 六・八% 6 二・七% 16 三・三%

極楽の存在と死後の世界共に信じる人が過半数であるが、わからないと答えた人が三人に一人もいた。

今後の課題である。

○極楽は死後の世界ですが、現世にあると思いますか

現世 死後 わからない

男 19 三・八% 7 二・三% 2 七・二%

女 30 六・八% 10 一・九% 11 三・五%

過半数の人が死後の世界を信じると答えながらほぼ

同数の人が極楽の存在を現世に求めていると答えた

のに注目したい。「極楽」「往生」などの語句の意味

が説教などを通して、かなり異って受取られている
 ようだ。この項は後日深めたかたちで再調査したい。

○仏教が生活に役立っていると思えますか

はい いいえ わからない

男 18 六・二% 10 三・七%

女 39 六・二% 10 一・六% 2 三・九%

全体では 3・4が役立っているとしているが、実生活にどの様に役立っているかを調べたい。

○お寺に行くのはどんなときですか、(順に)年始、葬

式、年中行事のお講当番、寺の大法要、お墓参り、

役員会、その他

○どんなとき信仰が必要だと思いますか

家族が亡くなったとき 60代女

精神的につかれているとき 50代女

苦しみを感じたとき 30代女 60代男

いろんな不幸がつづくとき 50代女 60代男

困ったとき 心に悩みがあるとき 60代女

死について考えるとき 40代男

孤独を感じ来世が不安なとき 60代女

心に迷いが生じたとき 50代女

命があぶなくなったとき

先祖様のことを思うとき

日常生活全般に於て

心のやすらぎ

病気災難にあったとき

心のいたむときのよりどころ

喜び、悲しみ、苦しみに必要

生活の中でその時々々に必要を感じる

心の支柱としていつも

家庭や仕事に疲れ精神的ないきづまりを感じた時

自分を静かに反省するとき

心に疲れを感じたとき

常時

病気になった時

毎日健康に生活しているとき

毎日健康に生活しているとき

毎日健康に生活しているとき

毎日村の方と接してほぼ、村の様子、習慣、人情もわ

かってきたと思っていた。

しかしこの調査項目の最後の「どんなとき信仰が必要

だと思いませんか」の答えを見て、村の方々の心の声を聞くことに今後努力すべきだと感じた。

調査項目の中にはさらに追跡調査をしておくべきこともあるが、全体としては仏教習慣を生活に深く取組んでいる姿は出たと思う。

白石部落は射水平野の下村にある。下村は秋祭りは稚児舞(国の無形文化財)、春祭りはやんさんま(やぶさめ)としてもよく知られている。部落の簡数は百ヶ人口約五〇〇。寺は浄土宗と曹洞宗各一ヶ寺がある。部落の人々は下村の他の部落に比して、宗教的伝統、習慣を重んじ寺の大事事等にも村をあげて協力する。NHKのTVでは無公害農村として放映されたり、外国の農業視察団も訪れる等モデル農村地区としても注目を集めている。阿弥陀寺の秘仏(石仏)観世音菩薩は県下最古の石仏としてTV・新聞等で脚光をあびたばかりである。

(富山教区・阿弥陀寺)

源智上人の布教について

研究所員（近畿支部） 羽 田 恵 三

(一) 源智上人の布教の原点

三上人大遠忌もいよいよ目前に迫って参りましたが、この三上人の中で、九州に布教なされた二祖鎮西上人、関東方面に教線拡張なされた三祖良忠上人のお二人に較べ、元祖様の御遺訓『一枚起請文』の伝授者であり、本尊、房舎、聖教さらには、円頓戒の附属までも受けられたという、たいへん重要な地位におられたはずの勢観房源智上人については、ほとんど詳しい事が知られていなかったのであります。

「ただ隠遁をこのみ自行を本とす。おのずから法談などはじめられても、所化五、六人より多くなれば魔縁きおいなんことごとしとて、とどめられなどしける」

と『勅修御伝』に記されているように、我が身の境遇を思われてか、表立った事をなされず、父とも崇められた法然上人への常在給仕こそ、おのがつとめと心得られその事に専心なされたと、源智上人の行状について伝えられていたのであります。

ところが昭和五十四年に至って、滋賀県信楽町の玉桂寺阿弥陀如来像胎内より発見されました源智上人御自筆の「阿弥陀如来造立願文」に依って、またそれに関する新研究により源智上人のイメージは大きく変えられることとなったのであります。

それに依りますと、源智上人は、法然上人往生の後、わずか一年足らずの間にその数およそ五万人に及ぶ有縁の方々を勧進なされ阿弥陀如来の造立を願われているの

であります。

それまでは極めて消極的であったと見られていた源智上人が、祖師報恩のため、かつは正流護持のため全精力を傾けての、積極的な布教活動に及ばれたことがわかるのであります。

その願文の内容には、法然上人への報恩と利益衆生の熱誠が、あふれているのであります。

消極的と伝えられていた源智上人の、信徒への大きな影響力と、積極的な布教活動がこれに依って開顕された事は、誠に尊く有難い事であると思うのであります。源智上人の積極的布教活動は、法然上人往生の後に花開く事となるのであります。その原点となるものは、源智上人十三歳の時、法然上人との出会いの深い感動に依ってすでに決定づけられたものがあつたと考えるのであります。

(二) 法然上人とのめぐり会い

「飛ぶ鳥も落とす」程の勢いで栄耀栄華の頂点を極めた平家一門が、やがて没落の途をたどり、それに替って源氏の勢力が拡張されてくるというまさに世情騒然たる

寿永二年(一一八三)に源智上人は御誕生なされたのであります。

それに先立って、平家一門にとってまさに屈辱の都落ちちという日が訪れて参ります。

見物の人垣に紛れながら、二度と会い逢うことのない最愛の夫を涙で見送る一婦人がありました。その婦人こそ源智上人の母君であります。一方見送られる父平師盛は、翌寿永三年(一一八四)愛し子の誕生を知る由もなく「一の谷の合戦」に若き命を散らせたのであります。

身重の体ゆえ同行が許されず、淋しくひとり京に留まつた母は、頼みの夫を失い、やがて文治元年(一一八五)三月、平家一門が檀の浦に滅亡という憂き目を見ながらも、日毎に厳しさを加える平家残党狩りの手を抜くぐり、いかばかりか心細い思いで愛児を養育なされた事かと想像するのであります。

しかし、世間の眼を怖れ身を細めて暮らすこの母子にも、やがてお念仏の法縁が訪れて参ります。母は我が子の将来を案じ、また平家一門の追悼の意もあって、建久六年(一一九五)十三歳になられた源智上人を、吉水の法然上人のもとへ伴われたのであります。

その二年後、建久八年（一一九七）に初めて法然上人に
対面なされた二祖鎮西上人（三十六歳）、天台に比類なき
学僧と言われた程の鎮西上人でさえも、法然上人の気高
きお徳にふれられた時は、一言半句も無く、ただただ頭
の下がる思いであったと伝えられているように、源智上
人の場合も、いかに十三歳の若年とは言え、生涯を決定
づける程の大きな感動があったものと想像するのであり
ます。

また法然上人も、伴われた母君のお話を聞くに及ばれ、
おそらくは御自身の幼少期における身の上に思いを巡ら
され、涙の中にさだめし心動かされたであろう事は「上
人憐愍覆護他に異にして」（勅修御伝）とある事からも知
られるのであります。

（三）源智上人の布教

旧来の源智上人像を伝える『勅修御伝』の記述

「ただ隠遁をこのみ自行を本とす、おのずから法談な
どはじめられても、所化五、六人より多くなれば魔縁
きおいなんことごとしとて、とどめられなどしける」
とあるように、法然上人在世中は、表立ったことを一切

なされず、ただ法然上人の常在給仕に専心なされたよう
であります。それが同時に、この言葉は源智上人が、
対外的布教をなされなかつた反面、内面における信の充
実が図られて行った事を示すものであると解釈するの
であります。

常在給仕首尾十八ヶ年の間、知らず知らずのうちに、
法然上人のお言葉、お振舞いのすべてに薰習せられ、そ
のお徳を具えてゆかれたものと考えるのであります。

法然上人は温和な御性格の中にも、特に増上慢、高慢
については厳しく戒しめておられます。『選択集』述作
の折、筆記役であった安菜房遵西が、三章段の筆記に及
んだ時「能令瓦礫變成金」の文を聞いて、「能筆であつ
たればこそ他人に先んじてこの文を聞かせて頂いた」と
門弟の間に自慢していることを法然上人が聞き咎め、
「あの僧い、ささか慢心あり」とこれを退け、後の筆記役
に真感房感西上人を充てられたと伝えられております。

法然上人が慢心を厳しく戒められたそのお心も、いつ
しか身に頂かれました源智上人の行状は、結果的に法然
上人の在世中目立つ事はなかつたとも解釈できるのであ
ります。

またこの源智上人が、法然上人を父とも崇められたとするならば、兄ほども慕われたお方が真感房感西上人であります。感西上人もまた、自らのお役であった給仕役も源智上人に譲り、時折は老境の師に代って教学面での御指導もなされたようであります。

感西上人は、その後間もなく亡くなってられますが、その臨終に源智上人は、形見の要文を所望なされております。これに応えて感西上人は「如来本誓一毫無謬云々」の文を遺されたのであります。

本来、法然上人の兄弟弟子とも言うべき法蓮房信空上人、真感房感西上人といった古くからの門弟方とは特に親しく、またその影響も大なるものがあつたようであります。

没後起請文に於て一旦は信空上人に譲られた本尊、房舎、聖教等が、後に源智上人の附屬となつたという事も、源智上人と信空上人との間に並々ならぬ親交があつた事を物語るものと推察できるのであります。

すべてにおいて控え目であつた源智上人が積極的布教活動に移られたのは、法然上人御往生のあとの事でありますが、その一端を新発見の玉桂寺文書にうかがう事が

できるのであります。

祖師報恩と利益衆生の熱誠より、三尺の阿弥陀仏像を造立して、末代有縁の衆生救済を心となされた法然上人の恩徳を鑽仰すると共に、五万人に及ぶ念仏同行の姓名を納めて先亡靈位の恩徳を謝し、さらには仏像中に奉納された道俗、有縁無縁の者までもともに源智上人に導かれ、必ず法然上人の引接を蒙らんことを願われたのであります。それは法然上人が、利益衆生を先となされたことに依るものであり、また利益衆生こそ師の恩に報いる最大の作善であるとの、源智上人の信念のあらわれであると言えるのであります。

最後には、先に往生したものは還来して残つた人々を導き、もし自身が先に往生したならば速かに生死界に入つて他のものを教化し自他共に九品蓮台に生ぜんことの円満成就を諸仏諸菩薩諸天善神に敬白なされているのであります。

この願文の日付（建曆二年十二月二十四日）から、元祖様往生の後、わずか一年足らずのうちにこの報恩行を成し遂げられたという事がわかるのであります。

浄土門の宝とも言うべき『御遺訓』の金言「只一向に

念仏すべし」を頂かれた源智上人が、百万遍念仏を手段として、わずか一年足らずの間に五万人に及ぶ有縁の方々を勧進なされたその裏には、平生から正法護持を心となされた源智上人を、またそのお徳を崇めた紫野門徒と呼ばれる力強い後楯があつた事を忘れてはならないのであります。おそらくは、元祖様御流罪の間にもその方々の中にお念仏は、源智上人と共に根強く生きていたのであろうと推察するのであります。

源智上人の布教は、祖師報恩正流護持に徹されたという事でありますが、それは著書の上にも見る事ができます。『選択要決』は真撰であるか否か賛否両論のあるところではありますが、それは教学上の問題で、布教上は、たとえお弟子の述作であろうとも、源智上人のお考えを伝えるには十分であります。

二祖上人が肥州白河川往生院にて、「その義を水火に諍い、その論を乱菊に致すと」異流邪義を歎かれておりますが、時を同じくして京都では源智上人が、『選択集』に加えられた十の難に対して、自説他説を用いずに相伝の義をもって、常在給仕の人でなければ及ばない、元祖様の言動、ひととなりをもってその難を決しておられる

のであります。

源智上人の御生涯は、十三歳入門以来、偏に祖師鑽仰、正流護持そのものであります。またそのままが源智上人御一代の布教であつたと言えるのであります。

(京都教区・大善寺)

知恩・報恩とお念仏

研究所員（近畿支部） 有 本 亮 啓

はじめに

おおよそ仏教において恩を説かぬものはない。とりわけ浄土教の中心は恩を説くということではないだろうか。恩、おかげがあればこそ、人はこの世に生命を受け、現に生かされ、やがて浄土に救われてゆくのである。その恩を知り、恩に報いるのが人の道ではないだろうか。

ところが、ややもすると浄土宗においては、知恩・報恩・感謝は真宗の念仏なりとして、つまらぬ宗派根性の為、恩を強く説くことにいささかのためらいがあるようだが、大変な間違いであらう。

浄土宗の念仏は懺悔の念仏という。なる程その通りであるが、懺悔と感謝は裏表である。懺悔あれば感謝（知

恩・報恩）あり、感謝あれば懺悔ありである。そこで私はこの一年、知恩・報恩を中心にお念仏を説いてみた。その要旨を参考までに述べてみたい。

一 父母の恩は結局阿弥陀仏の恩

浄土宗の総本山は知恩院、恩を知ってお寺であります。この知恩こそ、お念仏の根本、中心であろうと思われるのです。

さて、その恩ということですが、恩にもいろいろありますが、まず第一に知らねばならないのが、父母の恩であります。昔から「ああ世の人心せよ山より高き父の恩、海より深き母の恩、知ること道のはじめなり」と言われているように、父母の恩ほど尊いものはない。この恩を

知り、かみしめ、報いてこそ人の道を歩むはじめであります。

父母の恩を忘れるような人はいかなる道を進もうと、いかなる職業、立場にあるうと、一時良くとも一代限り、すぐに駄目になる。恩知らず、親不幸は結局破滅であります。

そこでの父母の恩が、いかに尊い有難いものであるかということも申し上げたいのですが、ここに父母の恩の尊さを端的に述べられた詩がありますので、御紹介致します。この詩は印度に伝わる詩です。

まずお母さんをうたった詩、

「お母さんは天よりも地よりも、もつともつと大切にす。お母さんは十月の間お腹の中で私達をあたためてくれました。痛みをのりこえて私達を生み出して下さったお母さん、そしてその痛さを喜んで忘れてくれたお母さん、子供のためならば笑顔で命を捨ててくれるお母さん、自分よりも先に子供を食べさせ、食べる物が無い時は、自分が食べないですましてくれたお母さん、天よりも地よりも、もつともつと大切なもの、それはお母さんです」
全くその通り、長い間お腹の中であたためて下さり、

苦しみの中、私を生んで下さった、その苦しみも忘れて下さり、お乳をのませ、おしめをかえて下さり、子の為なら命も投げ出して下さるお母さん、いつまでもいつまでも、子供の事を思つて下さる、死んでのちも、きつとわが子を思つて下さるお母さん。有難いことです。母の恩を忘れたら、罰があたります。

さて次はお父さん。お父さんはお腹の中で育てて下さつておらんから、お父さんの詩はいささか短いのです。

「お父さんは空に輝く星です。人生の道しるべになつてくれる空に輝く星、それがお父さんです」

いいですね、お父さんは空に輝く星、人生の道しるべになつてくれる人、それがお父さん。誠にその通りであります。

そのように、父母の恩を知り、かみしめたなら、ああ有難い、勿体ないと感謝せざるを得ない、その感謝のあらわれが、感謝のことばが、南無阿弥陀仏ではないでしょうか。

私共の父母には又、父母がおられた、その親にも又、親がおられたというように、私共は御先祖より生命を頂いたのであります。だから父母の恩を知るとは、先祖

の恩を知ることでありませぬ。その先祖をたどり尋ねてゆくこと、どこまでもどこまでもたどれる。きりがないので、そのきりが無い生命のことを、仏教では無量寿と申します。無とは無い、量とははかる、測量の量、寿とは生命です。人間の知識でははかることの出来ない無限の生命、とわの生命であります。印度のことばではアミダであります。すなわち私共の生命の根源、一番の親、大先祖が阿弥陀仏であります。

その大先祖、阿弥陀仏のみ名を称えるのが南無阿弥陀仏、阿弥陀仏の恩を知る声、恩に感謝する声、南無阿弥陀仏、お母さん、お父さんありがとう、御先祖様ありがとうという感謝の声が南無阿弥陀仏でもあるのです。

南無阿弥陀仏とお念仏を称え、阿弥陀仏の恩、先祖の恩、今は亡き父母の恩、そして現に在します父母の恩を知り、感謝し、出来うる限り恩に報いてゆきたいものがあります。

二 衆生の恩も阿弥陀仏の恩

物で栄えて、心で滅ぶ、現代日本人の生活を端的にあらわした言葉であります。現代の日本は物が豊富にあり、

物質第一主義となり物を粗末にする、使いすての時代であります。その為に、物を大切に作る心、つくしみの心、いたわりの心、感謝の心を失ってしまっているのではないでしょうか、困ったことでもあります。

日本全国の学校給食一回分のパンの残量は約九十トンで、この量はアフリカ飢餓民を一日三十万人救える量というのであります。それを勿体ないとも、申し訳ないとも思わずに捨てているのであります。残すのが、捨てるのが、あたり前になっているのです。全く恐ろしいことでもあります。

一粒のお米をこぼしたら、「目がつぶれる、罰がある、すぐ拾って食べなさい」としかられた時代が嘘みたい。全く現代は感謝の心が失われているのではないのでしょうか。生きものを殺生して頂いているのだから、もっともつと感謝して、食事を頂かねば申し訳ないと思うのであります。

食べ物だけではありません。着るものも、住む所も、すべて生きものを殺して使わせて頂いておるのであります。又、天地自然、太陽、水、空気すべて頂きもの、御恩であります。人々のおかげ様もそうであります。考え

てみれば、この世の中はすべて御恩、おかげであります。もつともつと恩を知り、おかげを喜び、ものを大切に、感謝せねばならぬと思います。今感謝の心をとりのどさねば、やがて日本は、いや世界は本当に滅んでしまうのではないでしょう。そして、その感謝のあらわれが、感謝のことばが南無阿弥陀仏であろうと思うのであります。

天地自然の恩、一切の生きとし生けるものの恩のことを、衆生の恩と申します。衆生の恩を言葉をかえていえば、無量光という、無とはない、量とははかる、光とはひかり、ひかりはものを育ててくれる力がある、光はおかげ、めぐみであります。無量の、人間の知識でははかることの出来ない無限の光、おかげ、めぐみであります。その無量光を印度の言葉でアミダという、阿弥陀仏であります。

衆生の恩は無量光、阿弥陀仏、だから衆生の恩を知り、感謝する声は南無阿弥陀仏、阿弥陀仏のみ名を称えることとあります。お念仏を称えて、恩を知り、恩に報いるが為に、物を大切に、一切のものを本当に生かし活かしてゆきたいのであります。

まとめ

以上二話の要旨を述べたが、父母の恩、衆生の恩は阿弥陀仏の恩、この阿弥陀仏の恩を知り、恩に報いるのが念仏者のつとめであると説くわけである。が、実際にはなかなか知恩報恩が十分出来ぬ身の上である。

お互愚かな身、愚鈍の身、分かつているが、実行出来ぬもどかしさ、そんな自分に気付かされたなら、申し訳ない、すみません南無阿弥陀仏と懺悔の念仏が自然に、口から出てくるのである。ここに感謝と懺悔が裏表であるということが、はつきりするのである。

故に、知恩、報恩、感謝を力強く説くことが、自然に自然に、懺悔のお念仏を説くことにつながると私は信じてやまないのである。

(大阪教区・大鏡寺)

聖光上人の伊予遊化について

研究所員（中四国支部） 村 中 成 信

来る昭和六十二年、浄土宗は三上人のご遠忌を迎えるべく関係各方面で準備が進められておりますが私達布教師も機会をとらえて、三上人の遺された業績、ご伝記などを大いに語るべきだと思います。ご承知のごとく三上人とは、聖光上人、良忠上人、勢観上人の各お祖師がたですが、今回は私の任職しております松山に關係のある聖光上人の、しかもご伝記の中で特に伊予の国へのご巡教の様子と、師法然とのかかわりについて見てみたいと思います。

昭和六十年度の浄土宗指定巡教で、福岡県の筑後第二組を訪ねる機会に恵まれました。布教の合間にA師のご厚意により、上妻の天福寺に参詣することが出来ました。重厚な、又見るからに歴史を感じる本堂に案内され、鎮

西上人を偲びつつ、しばしの間お念仏に時を忘れ、やがて案内された境内にはご廟があり、そばに菩提樹が天高く聳えておりました。ちょうど芽どきで、黄緑色の柔らかな新芽が古木を包んでおりました。地面には去年落ちたのであろう玉のような実がたくさん散らばっておりました。

今をさかのぼること七百五十二年前、七十二歳になられた聖光上人、この地に留どまられて民衆を教化なされた由、手入れの行き届いたご墓所に佇んで感銘一入でございました。

さて、聖光上人のご事跡を顧みます時に、まず初めに大体のご生涯について次の年表をご覧戴きます。

この年譜をご覧になって次の年表をお分かりのように、法然上人

鎮西上人略年譜

西曆	年号	御齡	記 事	法然上人御齡
一一六二	応保二	一	五月六日御誕生	三〇
一一七〇	嘉応二	九	九月一三日剃髮 聖光房弁長と号す	三八
一一八三	寿永二	二二	叡山で学ぶ	五一
一一九〇	建久元	二九	学成り郷里に帰る 吉祥寺創建	五八
一一九四	建久五	三三	明星寺五重塔再建 着手	六二
一一九七	建久八	三六	明星寺完成本尊招 来のため上洛 (五月下旬法然に謁 す七月まで学ぶ) 七月末本尊を奉じ て帰国	六五
一一九八	建久九	三七	法然上人の命によ り八月より十二月 まで伊予に遊化	六六
一一九九	正治元	三八	二月再び上洛法然 上人に随侍 選択集を授けられ る (この年、良忠上人 石見に生る)	六七

一一二二	建暦二	五一	師法然上人入滅	八〇
一一三八	暦仁元	七七	二月二十九日聖光 房弁長崩す	法然上人 入滅後二 十六年

と聖光上人は約三十年の年齢差がございます聖光上人が法然上人とお合いになったのは、一一九七年五月下旬、すなわち聖光上人三十六歳法然上人六十五歳の時です。

しかも聖光上人は天台の学僧で油山の学頭の地位であり、多くの門弟たちの教養に当たっていました。吉祥寺を完成させ、つづいて三十三歳のとき、明星寺の衆徒より五重塔再建の懇囑を受けて工事の指揮に当たり三年後の建久八年、完成した五重塔の本尊を迎える為に上洛して、仏師康慶の宿に落ち着きます。この時点では法然上人と聖光上人とは何のつながりも有りません。しかしこの時六十五歳の法然上人には信空、感西、証空、源智、幸西、などの幹部クラスの門下生たちが常随しておりました。かねて聖光上人は、元天台の僧で専修念仏を説いている法然上人の噂は聞いて知っていた事でしょう。

法然上人をこよなく慕っている公家に九条閑白兼実公がおられました。以前より何回となく専修念仏の奥義は

聞いて参りましたが、後の世のために書物にかきとどめて下さいませと、兼実公の懇請を受けて書かれた書物に『選択本願念仏集』がありますが、書かれた時期も、『勅修御伝』にありますよに、建久九年に稿了したことはほぼ間違いないと思いますが、聖光上人が『選択本願念仏集』を師法然上人より授かった時期については異論があるようです。『勅修御伝』には「建久九年春、選択集を聖光房にさずけらる」とありますが、建久八年五月下旬から七月まで師事して一旦本尊を持って九州に帰っております。次の年建久九年の八月、伊予の国へ遊化の為に到着しております。すると一旦本尊を持って九州に帰って、建久九年に再び上洛した説を取るのが次の建久九年説であります。

建久九年説

『勅修御伝』より「これ月輪殿の仰せによりてえらべる所なり、いまだ披露に及ばずといえども、汝は法器なり。伝持にたへたり。はやく此の書をうつして、末代にひろむべしと仰せられければ、かたじけなく頂戴してうけぬ。我大師釈尊は、法然上人なりとぞ、たとび申されける。同年八月に上人の敕命をうけて、予州に下つて念

仏をすすむ云々」

『勅修御伝』、記主禪師の『決疑鈔』第五、『選択疑問答』、問師の『直牒』第十、良定の『選択之伝』、『九卷伝』第三、『十卷伝』第五、大基上人の『鎮西国師行状和讃』

又そうではないとするのが

建久十年説（正治元年）

了恵の『聖光上人伝』、『鎮西略要伝』、『鎮流祖伝』、『直牒』第一

良栄の『決疑見聞』第一、第五、妙瑞の『徹選択集私志記』

すなわち、伊予の国への遊化の大役を果たした後、正式の入門時に選択集を貰ったとするのが建久十年説（正治元年）でしょう。でないと言空、感西、証空、源智、幸西などの兄弟子の手前考えられないことである。

では何故、仮入門の聖光上人に今まで誰にも命じなかった遊化を敕命したのか、まず考えられる事は筑後への旅の途中に伊予の国があること、又一つには伊予の国が九条関白兼実公の領地であったこと、の二点が考えられます。『愛媛の仏教』の著者、越智通敏先生は鎮西上人

の四国遊化について、『勅修御伝翼賛』を引用して紹介していますが、鎮西上人の遺跡寺として、鷹ノ子の浄土寺、松山の正法寺の他に、山越の長建寺、弘願寺、不説院、久万山の法然寺などを開山にしております。当時の聖光上人は三十七歳で法然上人の弟子としては入門したてだし歳は若いし、名声から言っても全く無名に近かった僧が、わずか半年間で六ヶ寺を開基し、別れを惜しまれて自刻の像を遺すまで民衆の中に溶け込んで行かれた。一体聖光上人はどんなお方であったのでしょうか。

話は一年前に戻ります。大正大学の玉山成元先生は「法然門下における信空と聖光」のなかに、法然上人の遺跡と後継者は定めない方針であったけれども、建久八年五月までは門下生全員法然上人の後継者は信空であると確信していたし、信空が一番ふさわしいと誰もが思っていた。又法然上人の出会いについて、

「聖光が上洛した目的は法然にあうためではなく、あくまでも仏像の勧請のためであり、その仏像が出来るまで待つ間偶然に法然との関係が出来たのかもしれない。事実恐らくはそうであろう」

何故、並み居る幹部弟子たちに先んじて『選択集』の

伝授を受ける事が出来たか、信空を初めとした感西、証空、源智、幸西、隆寛、金光、が納得するべく特別な関係が結ばれたとするならば、前代未聞の英才で有ったのであろう。ここで一つ疑問が有るのが、法然上人ご法語集第三十の「一期勸化」に「法蓮房申サク、古来ノ先徳、ナソノ遺跡アリ。シカルニ、イマ精舎一字モ、建立ナシ。御人滅ノ後、シズクヲ、モテカ、御遺跡トスベキヤト。上人答へ給ハク、アトラ、一廟ニシムレバ、遺法アマネカラズ。子ガ遺跡ハ、諸州ニ遍満スベシ。云々」

この後に、念仏の声のするところはすべて遺跡である」とまで断言しているのだから聖光上人を一人限って二祖にするなんてことは考えられない。信空にも感西、証空、源智、幸西、隆寛、金光にも専修念仏の興隆を進めるように指示したに違いありません。

昭和六十二年に迫っています遠忌を前に、浄土宗の布教師として、聖光上人の時機を見る判断力、専修念仏へ帰入する決断力、布教に取り組むバイタリティーを今の世に生かさなければ、三上人遠忌を迎えて、ただお祭り騒ぎに終わったのでは三上人に申し訳ありません。

(愛媛教区・弘願寺)

布教の原点

研究所員（中四国支部） 山 上 光 俊

問 「説教師はつみふかく候か。又妻にならんも

つみふかしと申候はまことにて候か。」

答 「本体は功德をうべく候に、末世のはつみをえ

つべし。妻にならんものは、つみ。」

（和語燈録卷五 百四十五箇条問答）

この問答を読んだ時、私は驚きました。本山布教師に任命され、少々布教をしていた頃だけに、そのショックは大きかったです。限りなく尊敬する宗祖のお言葉なのだろうか。それならもう布教師を止めなくてはならないとさえ思いました。説教師が罪を得るといふことはどういふことなのでしょう。不浄説法するとか、七箇条御制誠の中で、唱導を好み、種々の邪教を説いて無知の道俗を教化しないこと邪法を正法と説き、また偽って師

の説としないこと、に該当する説教師に対しておっしゃった言葉なのでしょう。宗祖の著書や布教師のバイブルともいふべき『勅修御伝』・『和語燈録』を調べても、その真意がわかりませんでした。ところが最近になって『勅修御伝』を読んでいる時、次のような話に目が止まりました。

日に五万遍も念仏を称える立派な僧がいて、その僧は臨終の時にはさぞ立派に往生を遂げるであろうと誰もが注目していました。ところが意外なことに、とても見苦しい死に様でした。世間の人々がいぶかしくて噂をしていると、宗祖がそれをお聞きになって、「この上人は偽りの行者であろう」とおっしゃった。さて僧の遺品の中に衣箱があり、その中に

七条の袈裟と十二門戒儀が入っていました。それを指して宗祖は、「この上人は名譽を得、人に尊敬されて、戒師になりたいという目的で念仏していたのだ」と説明されました。

〔勸修御伝〕巻十 虚仮の行者淨心坊)

これは、速やかに生死を離れるために念仏をするのであって、名利を求めて念仏するのではないということをお教えているのでありましょう。布教師も、名利を離れて布教しなければならぬのですが、さて自分はどうかであろうかと考えました。なぜ布教するのかという問いに対して、「衆生濟度のために」とか、「念仏弘通のために」とか、あるいはまた「愛宗護法のために」等という答が浮かんできます。しかし、もう一度何のために布教するのかと自問してみると、生活するためにといった金銭欲や名譽欲つまり、名利に振り回されている自分を見出すことがあるのです。宗祖は、念仏は自分のためにするのであって施物を当てにして念仏してはいけないとおっしゃっています。だから布教することによって名利を求める気持が強くなり、宗教的主体性を喪失する危険性が潜んでいるから、説教師は罪だとおっしゃったのでしょ

うか。また同時に、布教回数を重ねれば重ねるほど、布教技術や知識の習得に傾注し、自己の信仰が空洞化する危険性をも指摘されていると思われまます。

それでは、布教師は罪とおっしゃった宗祖は一体どのような布教をされたのでしょうか。『選択集』に「自行化他唯念仏を緯とす」と言っておられ、これは宗祖の布教理念ともいべきものです。本来、自行化他は一体であって自行と化他に分けることは難しいのですが、ここでは宗祖の行状を自行・化他の二面から考察してみたいと思います。

まず、宗祖の自行的側面から、回心と三昧発得に焦点を絞って考えてみます。

ある時上人仰せられてはく、

「出離の志深かりし間、もろもろの教法を信じてもろもろの行業を修す。おおよそ仏教多しと雖も、所詮戒・定・慧の三字をば過ぎず。(略)わがこの身は、戒行において一戒をも保たず、禪定において一つもこれを得ず。(略)何ぞ生死繫縛の身を解脱する事を得んや。悲しきかな悲しきかな、いかがせんいかがせん。ここにわれらごときは既に戒・定・慧の三字

の器にあらず。この三学の外にわが心に相応する法門ありや、わが身に堪えたる修行すやあると、よろづの知者に求めもろもの学者にとぶらいしに、教うる人もなく示すともがらもなし。しかる間嘆き嘆き経蔵に入り、悲しみ悲しみ聖教に向かいて、手づから自ら開き見しに、善導和尚の『観經の疏』の、「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に時節の久近を問わず、念々に捨てざる、これを正定の業」と名づく。かの仏の願に順ずるがゆえなり」

という文を見得て後、われらがごとく無知の身は、偏にこの文を仰ぎ専らこのことを頼みて、念々不捨の称名を修して決定往生の業因に備うべし。ただ善導の遺教を信ずるのみにあらず、又厚く弥陀の弘誓に順ぜり。順彼仏願故の文深く魂に染み心にとどめたるなり。

〔勅修御伝〕卷六

ここは勅修御伝中で私が最も感動する場面です。これほど深い自己への絶望と喜びを経験した人はいないのではないかと思えます。宗祖の選択に選択を重ね求道された御苦労を思うと、涙なしには読めません。称える名号

が念々不捨であり、その念々に阿弥陀仏の心があるとお悟りになった時、これで速やかに生死を解脱することができる、これしかない、と確信されて、思わず歓喜の念仏が迸り出たことでしょうか。『十六門記』に、「高声二唱テ感悦髓ニ徹リ、落涙千行ナリキ」とあります。宗祖は回心されたその日から、たちどころに余行を捨てて口称念仏に専心され、日に六万遍の念仏に勧められるわけですが、その御心は、

われはただ 仏にいつかあほひ草

心のつまにかけぬ日ぞなき

という御歌に表われていると思います。宗祖の阿弥陀仏への愛慕の念がこんなにも深いものであったのかを偲ぶことができます。またそうでなくては六万遍も念仏を称えることはできないと思います。毎月別時念仏も修されたようで平生念仏と臨終念仏とは区別されることなく修されました。宗祖は晩年には一万遍加え、七万遍の日課念仏をされました。その頃は法談も止め、まさに一向に念仏されていたのです。そんなに激烈なまでに念仏された宗祖は回心から二十三年後、六十六歳の時、ついに三昧発得されたことが『三昧発得記』に記されています。

恐らくその時の御心境は、

あみだぶと 申すばかりをつとめにて

浄土の莊嚴みるぞうれしき

という御歌のごとくであったと思われます。

このように宗祖は、あの御絵像に見る円かで優しいお顔からは想像もできないほど、至純にして激烈なまでに念仏をされ、身をもって念仏を実験、実証されました。

『末代念仏授手印』に、

自行を専とするの時は口称の数遍を以って正行と爲し、他を勸化する日は称名の多念をもつて浄業と教

ふ

とあります。また宗祖は常に「名号を聞くというも信ぜずば、聞かざるが如し。たとひ信ずというとも称えずば、信ぜざるが如し。ただ常に念仏すべきなり」とおっしゃっています。

そこで宗祖は、在家には一万二万遍、僧尼には三万六万遍の念仏を申すようにいわれています。数遍を勧められるのは、解怠の心を打破するためでした。二祖聖光上人は入信された時、六万遍の日課念仏を誓約し、以来臨終までの四十余年間、六万遍の称名を一日も怠りなくつ

とめられました。また、三祖良忠上人は、陀多寺で不断念仏を五年間も修されたのです。当時は、二祖・三祖上人に劣らず多くの弟子達が念仏へ情熱を傾けたことでしょう。実際、私が六万遍念仏を申すとなると、一時間三千遍として二十時間もかかります。六万遍の日課念仏がいかに激烈なものがわかります。

さて、宗祖の自行的側面をみてきましたが宗祖や二祖・三祖を龜鑑として、自行としての念仏を追体験することが宗教的主体性確立には不可欠だと思います。また自信教人信という布教精神の基盤となるのです。布教師は浄土への道案内者であり、自信教人信なくして布教はありえないのです。

次に、宗祖は化他、つまり布教の面ではどのようにされていたのでしょうか。冒頭に述べたように、「説経師はつみ」と断言しておられる宗祖御自身は布教されなかったのかというと、決してそうではありません。『勅修御伝』巻六に、

尋ね至る者あれば、浄土の法を述べ、念仏の行を勸めたる。化導日に従ひて盛りに、念仏に帰する者雲霞のごとし

とあるように、布教に専念しておられました。その布教形式は、『勅修御伝』で検出してみると、

(一) 授戒・説戒

(二) 談義・唱導・法談・講釈

(三) 如法経(写経) 浄土如法経

(四) 別時念仏・不断念仏・如法念仏

(五) その他、開眼法要・臨終の善知識

(六) 消息(手紙)

に分類できます。宗祖は天台僧侶であったので、授戒・如法経・不断念仏等は天台流の法式でつとめられ、御自身で独自のおつとめも試みられたようです。当時の主流であった唱導については『元享釈書』にあるように、民衆に媚びて、泣いたり笑ったり、哀婉な声を出したり、手首を振ったりという布教技術の先行による質の低下が目立ちました。宗祖はそのような唱導はなさらず、法要や説戒の後念仏を勧められた、と『勅修御伝』にあります。殊に別時念仏についてはときどき「別時念仏を修して、心をも身をもはけましととのへ、すすむべき也」とおっしゃっています。

布教の対象となったのは、『勅修御伝』には天皇・貴

族・出家・武士・篤心者・遊女等が記載されていますが、貧賤・無智・無戒の名もなき多数の人々もいました。その布教内容は法語や消息などにみられるような念仏の安心起行に関するものであったと思います。宗祖の三十七年間の化他行は、源智上人の目に「先師はただ化物を以て心となし、利生を以て先となし給う」と映ったように粉骨砕心下化衆生の大慈悲心に満ち溢れていました。

あみだぶに、染むる心の色にいでは

秋の梢のたぐひならまし

の御歌のごとく、宗祖の宗教的体験が化他行として体现され、まさに「自行化他ただ念仏を緯とす」を身をもって実践された結果であったのです。

このように、宗祖の自行化他の二面から『勅修御伝』を読むと、布教の原点は、布教師の「自行化他ただ念仏を緯とす」にあり、布教師の主体性の喪失、信仰の空洞化を克服するには、この理念を實踐するしかないと考えます。つまり、唱導家達が布教技術の修得に専念し、本義を忘れていたように、布教の原点を失って真の布教はありえないと思います。

現代は科学の時代であるから、「なぜ念仏をするのか」

「どのように念仏すればよいのか」「念仏したらどうなるのか」といった主体的な問題に、自己の体験を通して答えなければ、本当の布教はできないと思います。

三上人遠忌を迎えるに当たっての布教は、「自行化他唯緯念仏」の布教の原点に立ち返り、平生念仏在家一万遍、僧尼三万遍以上の誓約と、三上人の遺跡での別時念仏を修することが真の報恩となるのではないかと考えます。因みに、石見教区浄青では本年十月十二日から三十一日まで、百万遍念仏を実施します。

(島根教区・向西寺)

現代人の死と念仏

今日の医学は急激な進歩をとげている。一方近い将来、六十五歳以上の人口が二〇%を越えるであろう高齢化社会となる。ここに、死をめぐる生命の倫理が大きな問題となってきた。

老人の七〇%以上（癌患者の八〇%）の人が、病院で生涯の幕を閉じるのである。本人、家族は勿論、医師、看護婦、ほか医療従事者にとって、「死の臨床」は切実重大なものになったのである。その人らしい晩年の生を全うさせ、安らかな死を迎えさせるためのホスピス（末期患者病院）、ターミナル・ケア（人生終末における看護）が必要であり、医学の目的が、疾病、障害の治療の他に、その人らしさを尊重するという、生命の質 Quality of life を重視すべきだという考え方が深まってきている。

研究所員（九州支部） 金子貫司

このような、人間の死をめぐる問題がにわかにかましくなった折に、肝心の精神の支えになる宗教、とくに仏教界は何をなし得るのか、葬式仏教だけではないか、との世間の声も高まりつつある。アメリカの病院には、必ずチャペルがあり、チャプレン（病院専属牧師）がいるし、大きな病院なら、プロテストアント、カトリック、ユダヤ教の三人のチャプレンがいることも普通といわれている。この点、国民性の異りもあるだろうが、わが国は非常に遅れをとっているのである。これから教化の第一線に立つわが宗の教師も、死をめぐる教育 death education を必修とし death educator としての役割を分担することが社会の要請と思われる。デス・エジュケーション・死の教育とは葬式倫理のことではない。そこには

生きる人間の生命の本質にかゝる、すべての項目が含まれている。死について学ぶことこそ、生命の尊厳、人生の意義を学ぶ最大のモチベーション・動機づけとなるのである。

「現代は死を忘れた時代である」といわれている。たしかに近代合理主義は、人間をさまざまな死の現象から遠ざけることに成功した。現代人はもはや、死をとおして生を考えたたり、生の一部として死をみたりする習慣を失った。現代は生だけが満ちあふれている時代であるといえよう。かつて死が直接的な事実として日常生活のなかにいすわっていた時代には、人生についてのあらゆる思念は、死とは何かという問題をめぐって展開されるほかはなかった。現代人の日常生活は死を忘れた、ごまかしの上に営まれている。

そのごまかしを容易ならしめているものとして、

- (一) 生活水準の著しい向上
- (二) 近代社会の分業組織
- (三) 能率中心の機械文明

の三要素をあげることができる。

生活水準の向上によって、核家族化が進行してきた。

ここでは、身近に祖父母が居ないのが普通であり、たとえ同居していても、平均寿命の延長により、死に立ち合う機会は非常に少なくなった。また、以前は兄弟子供の数が多く、病死、溺死、事故死など、実際の死に出会う頻度は、現在と比べものにならない。さらに死の床をほとんどの人が病院で迎える現在では、いよいよ死を看とることがなく、麻酔等による肉体的苦痛の除去、施設の整備によって死の処理が美化され、死が醜悪なものではなくなった。現代人は昔の人がどれほど朝夕死におびえながら生活していたかを想像することすらできなくなってきた。現代人は死になじまず、死を忘れて生活しているのである。

近代社会の分業組織化による大量生産と多様化の中で、連続的なアナログ性は失われ、記号化・デジタル化は、思考そのものを部分的、断片的なものとしていった。目の先の刺激には活発に反応するが、全体の見通しの上にならなくて、物事を考えることが出来にくくなってきた。いきおい全人的な理想、生きがいの喪失につながり、人生の究極にある死生観についても、語りにくい時代に現代人

は生きてるのである。

能率中心の機械文明社会では、人間そのものも能率的でなければならぬ。非能率のものは能率的なものにおきかえられる非情の社会である。そこでは死んだ人間は忘れられてしまう。健康な人間だけの社会である。したがって「死は穢れ」なのである。現代社会は、死を認めまいとする構造をもっている。

いかに生に対して自信をもっていようと、生あるものは必ず滅するのである。航空機事故など、以前には考えられなかった無惨な死もしきりである。いかに死を忘れようと、死の現象は充滿している。死の自覚なきものは、無防備でなすわざも知らず、死に臨んで人間の尊厳性は完全に否定され、無残に踏み躪られるのである。現代人の死の受容をパターン化すると次のごとくである。

- (1) 現代人は死を語り、考えることがタブー視された中で死を迎える。

- (2) 家族と医師の共同謀議によって、別の病名としていつわり、偽装されたまゝ死を迎える。

- (3) それは逆のことをいい、それによってかえって、

患者を孤独にする裏切られた死である。

- (4) 死を受け容れない患者は、自らの死を認めようとせず、拒否されたまま、準備されないまま死を迎える。

- (5) 家族もなく、頼れるものがないまゝに死を迎える人も多い。

- (6) 治療の名のもとに、医療と医療機器が先行して、患者の感情はふみにじられ、うちのめされたまま死を迎える。

- (7) 宗教的信仰や夢をもたない人には、死後の世界のない死である。

- (8) 「ひと」のいにちに畏敬をもたない人にとって、死はひとからものになることである。

- (9) 現代人の精神の底には、働いて疲れはてた末の静止として死は認識されている。

- (10) 死を自己の存在として考えようとしないうし、子どもたちにも見せまいとする現代人にとって、死の自覚を見失った死である。

- (11) 現代人にとって死は、肉体もこころもすべてがなくなってしまう。すなわち、すべて消滅する死である。

臨床医の間で、「日本人は無宗教なので、死の臨床で

の対応が難しい」といわれているが、現代人の死はロマンなき、永遠の生命についての希求も憧憬もない、つねに手遅れの死なのである。

人は生れた時から死すべき運命をもっている。しかし、誰しも自らの死を考えず、自分だけが例外のように、樂觀的に生きている。これは、死への恐れを「死は穢れ」として、目をそらしているだけである。現存は死への有限的存在である。しかも、死はいつやってくるか不定である。中世におおった死の陰はまだ目に見える陰であった。だが現代にしみ入っている死の陰は、生の光輝から生気を吸いとって、それをさむざむとした白い光に変えている。

現代人の不幸は、近代合理主義的批判のもとに、天国、極楽などの伝統的来世観を、迷信として破壊したことに始まる。伝統的来世観のもとでは、死の恐怖がやわらいだけでなく、死は理想世界への喜ばしい旅立ちであった。人びとはこの喜ばしい旅立ちにそなえ、功德を積み、生そのものも歓喜の泉となり、高次元から肯定されるのである。近代合理主義は、その信仰の根底をつき崩

したことよって、生への執着と死の恐怖がふたたび襲いかかってきたのである。

現代人は一般的に死について、「死は穢れ」という面だけを強調しているが、「無常だから成長する」という肯定的な面があることを忘れている。無常をとおし、いま、ここに生きる生の充実を積極的にはかることを学ぶべきである。

釈尊の出家も「四門出遊」にはじまり、さかのぼれば生母マヤーの生後七日目の死別が動機である。宗祖法然上人も九歳の時、父時国公の夜討ちにてとげられた非業の死、二祖聖光上人には、異母弟三明房の悶絶という無常が機縁となっている。人は死の不安を自分のものとする時はじめて、いままでの日常の生活が、自己本来から目を覆うた、非本来的なひとの生活であったと気付かせられるのである。死の不安を自らに引き入れることよって、それはあくまで不安でありながら、死への不安をそのまま死への自由へと高めていくのである。

死の恐怖のない平和な時代に、死生観を考えることは

どのアポリア、解決困難な難問はない。それだけになおさら、諸行無常を日常性の中で積極的に説き、二祖聖光上人の「念死・念仏」、「不離仏・値偶仏」を生きる倫理、精神活動の支柱にすべきである。

「念死・念仏」即ち、死を覚悟した生ならばこそ、生の一刻一刻がこの上なく尊いものであり、必ずくる別離をふまえての出会いだからこそ、その出会いが限りなくとおしいのである。「死すべきもの、いま、生命あるはありがたし」と、一期一会の賜りたる生の炎を燃えたたせ、念仏のなかに、生の充実をはかる決意となっていくのである。

「不離仏・値偶仏」とは、いつでも、どこでも、仏と離れることのない、仏とともに、仏の護念の中に生き、生かされるということである。現存在は、この世に投げ出された不安の存在であるが、念仏のなかに現生護念され、仏のかたより投げかけられた存在となる。

この現世護念は現代人の倫理の原点となるとともに、末期患者へのカウンセリング、およびターミナル・ケアの効果的な方法となり、「死の受容」を容易ならしめ、死の恐怖から充足した生へ、望ましい死、完成された死

(大往生)へのよりよき条件となる。

かくして、「念死・念仏」、「不離仏・値偶仏」のいさみある念仏のなかに、生と死、愛と憎、等々のあらゆるアンビバレンス、二分性は調和、統合され、「死生ともにわづらいなし」の開かれた人生が証得されるのである。三上人大遠忌を目前にひかえ、いま、なぜ念仏なのか、法然上人はじめ祖師がたの何を強調し伝えるべきなのか反省と思索が必要である。有限な人生にありながら、無限の生命に生きぬく力を与え、仏を忘れ、神を見失った現代人に暖かみのある共生の自由、至福は念仏によってのみ可能であることを説かねばならない。

参考文献

- 岸本英夫著『死をみつめる心』講談社
ロバート・フルトン著『デス・エジュケーション』現代出版
——『死生観への挑戦』
池見酉次郎 共編『日本のターミナル・ケア』誠信書房
永田勝太郎 共編『死の臨床』誠信書房
池見酉次郎 共編『死の臨床』誠信書房
永田勝太郎 共編『死の臨床』誠信書房
赤根祥一『禅の生死観』

(長崎教区・聖徳寺)

農山村地域における仏教婦人会の結成

— 一つの方法 —

布教研究所主事 岡 崎 覚 豊

一 はじめに

寺院では、日曜学校や子供会を開いたり、青年会、若妻会、壮年会、婦人会、詠唱会、念仏講など、各年齢に応じた、檀信徒の教化を試みていると思われる。特に女性教化のための組織として仏教婦人会は大部分は大部分の寺院において組織化し、運営に当って効果を挙げている。しかし、未結成の寺院もかなりあるのではなからうか。時々、布教さきのお寺で、仏教婦人会を結成したいが、どのような方法で作れだよいかと質問を受けることがある。

それぞれの寺院における伝統、また地域の差によって異なる。ここでは、農山村地域における結成の一つの方法として、C寺の発起から結成総会までの一つの歩みを述べてみたい。

二 婦人会結成に至る具体的な歩み

第一回、発起人世話人会
平素、寺門興隆のためよき協力者であり、助言者でもある総代世話人の夫人五名
社会教育現場で地域婦人会、農協婦人部等の役職経験者、檀信徒の中より三名

この方法が一番良いと言う決定的なものはなく、それ

住職、副住職と寺族が加わり、会を構成

住職は、会発起の趣旨説明

寺院には仏教婦人会を結成し、婦人に対する教化活動の必要を強調する。即ち、会のねらい、目的、いったいなんのために婦人会を結成するのか。それは、元祖法然上人さまをお手本としてお念仏を喜び、お念仏の中に「日常生活を明るく、正しく、仲よくしてゆく念仏者の誕生、育成」することがねらいである。

信仰を同じくする檀信徒が一堂に集つて、住職を中心に親睦をはかり、お念仏の中に心の洗濯が出来る憩の場を作ることを目的とする。

会員は、檀信徒を以て組織する。と、説明したところ発起人一同双手を挙げて賛意を表され、一日も早く結成されるようにとの激励の言葉を戴いて意を強くする。

直ちに座長を選出して結成の審議にはいる。

今回の会議のまとめ

- 一、地区ごとに結成世話人を選出する
- 一、会員募集の趣意書の作成
- 一、会則草案作りの審議
- 一、結成総会日程の審議
- 一、第二回、世話人会の日程決定

以上

上記の話し合いをして、住職が平素から考えていた会員募集の趣意書の案を上程して可決する。

趣意書

仏教婦人会結成会員募集のお願い。

今日、日本はめざましい進歩を遂げ、発展の一端をたどっております。しかし、これは経済や物質面について言えることで、精神面にはいまの世の中随分住みにくくなったとは思ひになりませんか。一日の終り、あるいは一年の終りを迎えて、その日その一年を静かに想い返してみて下さい。何か物足りないむなしさをお感じになりませんか。人間本来のすがたは、精神的なものと、物質的なものの両面が相まって、調和するものであります。健全な心から、健全なものが生みだされるべきであると思ひます。なかでも宗教に関する素養は特に大切であります。

今回、仏教の真精神を学びその正しき信仰によりお念仏の中に、「日常生活を明るく、正しく、仲よくするとともに婦人としての教養を高め会員の親睦をはかる」とを目的として、C寺仏教婦人会を結成致したいと思ひ

ます。なにかと御多忙の事と思いますが、この趣旨にご賛同いただき是非御入会下さいませようお願い申し上げます。

月 日

県 郡 町

C寺

檀信徒各位様

C寺仏教婦人会申込書

住所

氏名

電話 局電

有線

地区ごとに出選された世話人宅を任職が世話人就任の了解を求めると共に、会員募集のお願い状を持って巡回しお願いをする。

一週間後二回目の世話人会を開く。

第二回、発起人世話人会案内

拜啓 貴家御一同様には、益々御清栄のことと存じ上げます。

平素は、寺門興隆のため一方ならぬ御協力を賜り誠に有難く厚く御礼申し上げます。過日お願い申し上げます。如く、別紙の通りC寺の仏教婦人会を結成致したいと存じます。

農繁期で御多用中恐縮に存じますが、会員の募集を○月○日までをお願い致したいと存じます。また、左記の通り結成世話人会を開催致したいと思っておりますので、おくり合せ御出席下さいますように重ねてお願い致します。

記

日時 ○月○日 午後一時三〇分

場所 C寺本堂

議題 C寺仏教婦人会結成について

○月○日

様

C寺仏教婦人会結成世話人会

第二回、発起人世話人会出席者 三十一名

今回の会議のまとめ、

一、会員募集期間 十五日間（世話人で）
一、会員名簿提出 総会一週間前までに

一、会則案の審議

一、役員選任案の審議

一、総会の日時決定

一、総会当日の役割分担

一、総会の案内状 世話人で配布する 以上

世話人で会員募集を行ったところ、総会一週間前までに、総檀信徒の八十五パーセントの申込者がある。
住職は、募集期間中面接した檀信徒に入会を勧める。

結成総会 御案内状

拝啓、貴家御一同様には、益々御清栄にて御送日のことと存じ上げます。

いつも、寺門興隆のためになにかと御協力頂き、誠に有難く厚く御礼申し上げます。

このたび、C寺仏教婦人会を結成するに当り、会員募集を致しましたところ、快く御入会を賜り重ねて御礼申し上げます。

左記の日程で、結成総会を開催いたしたいと思いますので、おくり合せ御出席下さいますように御案内申し上げます。

記

一、日時 ○月○○日 午後一時三〇分

一、場所 C寺本堂

一、議題 会則審議 役員選任、事業の審議

一、法話 住 職 「仏教婦人会とは」

○月○○日
様

県 郡 町

C寺

『結成総会』

出席者数、申込会員の七十五パーセント

総会当日の細部については紙面の都合で割愛し、当日決定した会則についてのみ記述する。

C寺仏教婦人会会則

一、名称及び事務所

本会はC寺仏教婦人会と称し、事務所を○○郡○○町C寺に置く。

二、目的

本会は仏教の真精神を学び、その正しき信仰によって生活を明るく、正しくするとともに、婦人として

の教養を高め会員の親睦をはかることを目的とする。

三、必要な事業

本会の目的を達成するため左の事業を行う。

- (1) 総会及び年間二回以上の研修会を開催する。
- (2) 所属寺院及び宗門が行う事業への協力
- (3) 本堂内外の清掃
- (4) 教育及び福祉施設等への奉仕
- (5) その他、目的達成に必要な事業

四、会員及び会費

本会の趣旨に賛同して入会を申込んだ婦人を以て会員とする。会費は年額〇〇円とする。

五、本会の役員及びその任務は左の通りとする。

- (1) 会長一名、会務を総括し、本会を代表する。
- (2) 副会長二名、会長を補佐し、会長に事故あるとき、また欠けたときは、その職務を代行する。

(3) 書記二名、会の事務を担当する。

(4) 会計一名、会の会計事務を担当する。

(5) 監査二名、会の会計事務を監査する。

(6) 顧問若干名、会長の諮問に応ずる。

(7) 幹事若干名、幹事会を構成し本会の活動に協力す

る。

六、役員を選出方法及び任期

(1) 会長、副会長、書記、会計、監査は幹事会において選出する。

(2) 顧問は会長が委嘱する。

(3) 役員任期は別に定めざる限り二箇年とする。但し、再任を妨げない。

(4) 役員は後任が決定するまで、その任務を行う。

七、本会の会議は左の通りとする。

(1) 総会、毎年一回会長が招集する。

(2) 幹事会、毎年二回以上会長が招集する。

(3) 会長は会議の構成員の四分の一以上の要請があった場合は速かに会議を招集しなければならない。

八、会計

(1) 本会の会計年度は四月一日から翌年の三月三十一日までとする。

(2) 会の支出は幹事会の承認を得た予算内において行う。

(3) 会計は毎年度の決算を総会に報告しなければならない。

九、この会則の変更は、総会の議決によらなければならぬ。

附則、この会則は昭和六十年四月一日から施行する。

以上

三 おわりに

C寺の仏教婦人会結成について、発起から結成までの歩みを案内状等も含めて述べてきた。住職は婦人会の結成を三年も前から計画し、必要な資料の収集、結成寺院を訪問して仏教婦人会結成について微に入り細に亘って指導を受ける。その結果、発起人会を発足させる段階では募集要項、会則の案など一応のめやすをつけていた。

檀信徒に対しても三年前から会結成のPRに努めてきたので、会発起からスムーズに結成する事が出来たのであらうと思う。

要するに色々な困難はあつても、お念仏興隆のために住職が真剣に取り組めば、如来様の庇護のもと、初心を達成する事が出来るものであると信ずる次第である。

(尚、活動内容は紙面の都合で割愛する)

(山口教区・浄泉寺)

無常よりの出発

——三上人の場合——

一

「日ごろ見えない死が見えた」

死に直面する時、人はおのずと永遠なるもの、真実なるものを求めようとする。その死が自己存在そのものを問う極限に追いこまれる事が少々欠如している他者の死を通じて、求道へのはたらしにはなり得る。記憶に新しい日航機事故の不慮の大量共死に驚かされて日ならずして、毎日新聞に初めに記した標題をかかげて「記者の目」として次のような記事が載った。二十三年前国鉄三河島事故に遭難して、文字通り間一髪の生還を果たした大島奉夫という編集委員の一文である。

布教研究所主事 西岡 信孝

「文明の利器は両刃の剣だ。旅客機ぐるみ棺オケと化す凶器性を知る乗客だって多いだろう。それでも大抵は、この飛行機に限ってまさか、と安全を信じ高速便利という利器性の方に身をまかせる。最悪事態に巡り合わせる偶然はまずないものと居直ってしまう。

その共死のさまといい、この高速大量輸送システムの時代にあつて「まさかの死」がどれほど日常にしのび寄っているかという現実を衝撃的に示している。自分にもあゝいう死に方があり得るんだと。そして戦後の平和な安穏な飽食が続く一方、死に鈍感な世の中になつている」

と述べ最後に、

「ある日突然に土足で踏み込んでくる事故死の不条理を含め、現代の死を見つめることは、今どんな時代に私達が生きているか、その生をとらえかえすことでもある」

と結んでいる。

二

今三上人御遠忌をひかえて、三上人各々の出家への動機になったであろう処を述べてみたい。周知の如く法然上人は御年九歳の春、父時国公の敵人の夜襲による急逝にあわれ、終生耳の底に残りて胸の内に忘れることなしの遺言が、怨親平等、人類救済の念仏一行へと開花していったと思う時、若しあの事件がなかったら浄土宗は存在したか、念仏のみ教が私に迄与えられたかと思うと、漆間家に突然訪れた悲劇はまさしく浄土易往の行を導いたと申せば、上人に御叱りをうけるであろうか。父君の御遺言がそもそも勢至丸の法然房源空への幕あけであることは斉しく肯定する処であるが、勢至丸と母君の悲嘆またいかばかりであったかと新たな涙をもよおすばかり。後、勢観房源智の入室の因縁は、法然上人幼少の悲劇の

再現にも似て、ひとしお師弟のむすびつきを強められた事であろう。

廻って釈尊仏教もその第一歩は四門出遊の比喻で示された死の凝視、無常観の透徹に始まる。生母を一週間で亡くされたシッダルタ太子は衣食住の満足をもってしても心の淋しさを癒す事はなかった。身体を満足さすさまざまな充足が生を表面的に楽しませてくれても、生を活かすはたらしきには程遠い思いが二十九歳の出家へ道を開いていったのであろう。

父であれ母であれその死別を契機として真なるもの永遠なるものへの求道は、また真実の生の探求に他ならない。感受性の強弱もあろうが、人はその存在体である身心二面の極限に立たされた時、宗教の扉を叩くものである。即ち一は身体を通じての生老病死に代表される無常観、そして心の奥底を覗いての罪惡生死の三毒まっ只中の私の発見、罪惡観の二である。元祖の口称一行への道は罪惡生死の私が原点ではあるが、その第一歩は無常の風を身にうけられた事に始まる。話を飛躍していえば生命を考えるに二通りある。一は肉体的生理的な生命であり、他は精神的価値的な生命である。肉体的生命は人間

のみに限ったものでなく全ての生物が持ち合わせている。犬や猫も人間と同じ肉体的生命をもってはいるが、自分が生きている、生かされているという意識はない。つまり生命は自覚された時はじめて人間の生命たり得るのである。その自覚が永遠の生命の探究へ導くのである。このような生命の自覚は何によって得られるか。

東大教授で宗教学の権威、岸本英夫博士が十年近くの頸部に悪性の黒色癌をかかえての闘病記『死を見つめる心』の中で、「生命欲は自分にとっての死の意識を契機としておこる」「真に生を知るためには死を追求すべきである」云々と述べている。かく自他の死の追求こそが真の生命の探求をもたらすのである。釈尊仏教、元祖念仏行も死を契機としての求道の一步であり、また開悟開宗となったのである。

三

念死念仏を説かれた二祖聖光上人はその誕生そのものが出家への導きとなる。応保二年五月五日ご誕生のその日、母聖養（法名）は臨座受苦を身にうけて亡くなっている。今善導寺にある三祖堂は安産祈願の御堂として親

しまれ、また誕生地の吉祥寺には、腹帯阿弥陀如来像を自ら一刀三礼散華供養して刻まれた本尊仏として安置されている。聖光上人の母子共に安かれの声が聞こえてくる思いがする。

のち比叡山での七年間の勉学を終え二十九歳帰省、油山の学頭として学僧の名を恣にしておられた折、舎弟三明房の眼前での悶絶にあい、無常一陣の風をば観ぜられ、「忽ち眼前の無常に驚きて速に身後の浮沈を思ふ、即ち所学の法門を閉きて偏へに往生の行業を修す」出来事を体験された。良馬は鞭影に驚くが鞭をあてられて気付く中の馬、驚馬は鞭をあてられても走りだす気配乏しいの如く人の死を観て目覚めるは上の人。自ら死に瀕して初めて気付く中の人。死に居て尚死を知らぬは菩提に遠い人、驚馬のそれである。三祖上人が「念死念仏の言葉は実に教中の要言なり」と仰せられた念死念仏の教は実に上人実感の発露である。云く「安心起行の要は大乗修行の法の中に六念八念十随念ありと雖も、子が所存の如きは唯念死念仏の二念にあり。出づる息入るを待たず、入る息出づるを待たず助け給へ阿弥陀仏南無阿弥陀仏」〔西宗要〕また云く「八万の法門は只死の一字を説く。

然れば則ち死を忘れざるは八万の法門を自然に心えたる学者にてあるなり」喝破された上人の御言葉は実に千鈞の重味がある。

三祖良忠上人の言行の中に十一歳三智法師による『往生要集』講説を聞き頓に厭離の心を発し浄土を欣慕するとあり。十三歳正月の朝には「五濁の憂世に生まれしは恨みかた／＼多けれど 念仏往生と聞く時は かへりてうれしくなりにけり」と高声に和讃を吟じ一向に仏名を唱えられた。その時定月法師という僧ありて大いにいさめて「佳節にあたり人の機嫌をかまへざるや」と。時に童子思念すらく「無常迅速なり、何ぞ時を扱ばんや。念仏最要なり、あに機嫌をはばからんや。生れたる者必ず死す。彼亦免れざるべし。今却って名称を制止す愚痴の極なり」と心ひそかに彼を哀れみ口敢えて之を言わない上人であった。やがて生仏法師の導きにより二祖との邂逅がもたらされたのは御存知の通り。

次に「子が門弟に於て鎮西の相伝を以て我義とすべし」とされた勢親房源智上人は父師盛公が源平合戦の折、一の谷で若年にて落命。母君が平家追討の難をさけ一歳に満たない幼な子を育てし建久元年十三歳の童子の身を元

祖の慈愛の袖にまかされたのである。共々に早逝の父をもつ境遇の類似に元祖は涙の中でわが子の如きおもいを深められたであろう。常随給仕十八年さぞかし「源智よ源智」「お師匠さま」の声交いあり吉水の禪房であつたろう。

此度玉挂寺へ参拝してかの「阿弥陀如来立像胎内文書」の中、「源智阿弥陀如来造立願文」を目にし、先師恩徳を報ぜんと欲し三尺之弥陀像を造立し、像中に念仏信者五万余の結縁姓名を納められた由来を思うとき、師僧報恩の誠心また父を思う心にかよう思いを深めた次第である。

従来源智上人については「ただ隠遁を好み自行を本とす。をのずから法談などはじめられても所化五、六人よりおほくなれば魔縁きをひなむ。ことごとしとてとどめられなどぞしける」(勅伝第四五)とやゝ消極的な人物と評してはいたが、元祖滅后一年を経ない近日中に五万人余の念仏結縁を成就された行動力は、源智上人の燃える情熱―師僧報恩と念仏弘通―燃える所産である。かの上人京洛の地で元祖の正統を護持された故に、現在祖廟のある知恩院を中心に畿内に浄土宗の多い所以でもある。

三上人、九州・関東・京洛で不惜身命の念仏弘通あったればこそ、今私の口より御念仏が称えられる。慶讃の法要も大切ではあるが念仏興隆、祖師報恩の三業をもつて之に応えることこそ三上人ご遠忌をお迎えする意義があると愚考する。

一期くれ易し 一口惜むべし 弥陀大慈悲の無量寿の一瞬一瞬尊くありがたく生かされている喜び、念仏の声の中にしみじみと味わいたいものである。

三上人報恩と共に、三上人をとりまく多くの有縁無縁のかよいを今ひしひしと感じて雑文を閉じる次第。南無阿弥陀仏

(奈良教区・西方寺)

布教とコミュニケーション理論

布教研究所主事 大室 照道

「ラカン (Lacan, J.) の鏡像」という考えがある。

人間は、自分自身の姿を自分で見ることはできない。

そこで他人を鏡として、自分の姿を見るといふもの。そしてその鏡像を見ながら成長してゆく。

これと同様に、布教においても、コミュニケーションにおいても、相手を自分の鏡像と認識することが重要である。こちらが笑えばこちらも笑う。こちらが怒ればこちらも怒る。もし相手が自分の気に入らない表情をしているとしても、その責任の一半は自分にあると反省すべきであろう。筆者も最近これに気づかず、悲しい思いをしたことがある。

それでは相手が怒っているときは、どうしたらよいのだろうか。笑えばいいのである。これは大変むずかしい

ものだが、布教師としてそれくらいの修行は積んでおきたいものだ、と自分自身思っている。そして、自分が指導するんだというような思い上がった態度ではなく、一緒に何かを成し遂げるといふような気持ち、共鳴感、シンパシーが必要である。

これはラポート（感情的結合関係）とも言いかえることができる。だから、やはり本題にはいる前には、天気の話とか、どうでもよいような話をする。ちょっと無駄に時間を使うように見えても、ラポートはしっかり作りあげておかなければならない。

しかしこれも相手の機根に負うところが大きい。いきなり本題には入ってしまった方がよい場合も、もちろんあるだろう。

内容そのものも、聴衆に合わせなければならない。聴衆と顔を合わせた瞬間に、話の内容や程度を変えることができるぐらいになりたい。

話し出したら、今度は視線の使い方が重要になってくる。

第十一回集中研究会の後、宝田正道先生がおっしゃったが、だいたい三人の人と視線を合わせるようにするとよいようだ。前の人と中頃の人、そして後ろの方の人だ。直線ではなく、左右に別れていたほうがよいだろう。

これらの人々を代わる代わる見ながら話すと、あたかもすべての人を見て話しているような印象を与えることができる。そしてその三人は話をよく聞きうなずいてくれる人がよい。自分の話を聞き手がうなずいてくれればそれが自信となる。そしてその自信が、聴衆全体へ伝わってゆくわけだ。

歌手の三波春夫もこれがうまいようだ。両手を広げニコツと笑いながら、視線を振りつつ頭を下げる。だいぶ前に亡くなった祖母も、三波春夫のファンだった。コンサートに行ったあと「こっちを見て笑った」と大喜びして帰ってきたものだ。

八代亜紀なども、視線の使い方がうまいようだ。にらみつけるくらいにして、グイグイ引っぱってゆく。

都はるみのように、ただ左右上方を見て、ほとんど観客を見ないやりかたもあるが、やはり布教では相手を見たほうがよいであろう。

布教においては、大体こちらが話し、相手は聞くだけである。そこで相手が話がかかっているかを、どうして知るかという点、話の要所で相手がうなずくかどうかという点である。

このように、うなずくとか、その他の非言語的コミュニケーションには、大きな意味がある。バードウェステル (Birdwhistel, S. L.) によれば、会話中の言語の割合は三〇%〜三五%としている。メーラビアン (Mehrabian, A.) に至っては、わずか七%である。

どのようなものが非言語的コミュニケーションかという点、まず手の使用が上げられる。会話における手の使用のもつ意味は、あらためていう必要もないほどである。

顔の角度も重要である

上向き、現実ばなれした、観念の世界に心がある

真正面、現実的

下向き、心が沈んでいる

というように見ることができるといえる。

また眉の角度も重要である。筆者がかつて会った人物は、口ではまったく怒っていないと言っているが、眉が上がっており、息が荒かった。そこで心を和らげるように気をつけながら話を続けると、しばらくして眉が下がり本当にこちらの話をわかってくれた。これなどは、言葉より表情の方が真実を語るという一例であろう。また口は眉の表す感情を強調する。強い感情のあるとき、口は大きく変化化する。

大宰治の小説に『人間失格』というのがある。そこに出てくる主人公の少年時代の写真は、顔は笑っているが、こぶしを硬く握り締めている。大宰はこれに不快感を覚えると書いてあるが、そのとおりである。一度にまったく異なるメッセージが出てくると、人間は混乱してしまうものだ。このようなものは「裏面交流」「表情分離」というような言葉で表される。

木戸幸聖『面接入門』によると、登校拒否児の中学生を持つ両親が子供に向かって話す場合、話す言葉と非言

語的行为の間に、常に著しい矛盾が見られ、そのために子供が絶えず精神的混乱に陥るのを目のあたりにした、と書いている。

さらに木戸は、こうした病理的コミュニケーションが精神分裂症の病因になりうるという、ペイトソン (Payton, G.) の「二重束縛説」を紹介している。

それでは相手の本音はどこにあるかというところ、モリス (Morris, D.) 『マンウォッチング』は言葉より顔、顔よりは手、手より下肢に表れる、と述べている。

宇津木成介は、「音声におけるノンバーバル行動」という研究で、音声は性別など、視覚系に比べて努力、注意、練習の効果が少ない。故に音声による非言語的行動は、視覚のそれよりも基底的としている。

また音声のレベルを九段階に分けて、パイロットと管制塔との交信記録を調べているが、一―三段階は正常で、四―六のレベルに上がると何らかの異常が発生した場合である。さらに七―九になると生還の可能性が低くなってしまふという。

このように、声の調子というものは軽視してはならないものを持っている。

布教における声の調子については『浄土宗教学大系（七卷）』の中で詳しく述べられている。

またこれらを裏付けるものとして、「異種間コミュニケーション」の記事が『アニメ』（自然観察誌）にのっていた。

これは羊飼いが犬に意思を伝え、犬が羊をコントロールするときの、音の高低を調べたものである。これによると、人間が犬を鼓舞するときは高低差のある声、または口笛を小刻みにならず。押さえようとするとときは、低くゆっくりとした音を犬に向かって出す。犬もまた羊に向かって高低差のある声を出したり、低い声をゆっくり出したたりしてコントロールしてゆくという。他の動物でも同じようなことが言えるらしい。

また間も大切である。

木戸によれば、ある女性患者と面接中、患者のいうことを全面的に認めるように努めていたが、ある箇所では返事が一瞬遅れ、それを患者に非難された経験を述べている。

このことから会話においては、述べられる言語の意味を超えて、音調の変化に注意を向け、その水準でのコ

ミュニケーションを大切にすべきことがわかる。

ここでペイトソンの二重束縛説に関して、再び述べてもらおう。

登校拒否児等の家族との同時面接を解析してみると、文字に書き取った応対と、録音の音調には不調和ばかりか矛盾が見られた。一貫した愛情表現のニュアンスの陰に、冷ややかな音調があるというような現象を見出すことができる。つまり病理的コミュニケーションの存在が示唆される。

結論として木戸は、普通言語よりは音調、表情、身振りの方が、意思の伝達としては確度が高いと考えている。

どんなにうまく振る舞おうとして言語をあやつっても、結局音調などの態度で、本音は出てしまうということであらう。

布教師たるもの、けっして嘘についてはいけない。しかし嘘もつかねばならない。

例えば末期ガン患者に対するときなどである。一般的には「必ずよくなるから、頑張りなさい」、と嘘をつくべきであらう。

しかし患者は、たぶん自分は直らないと思っているだ

ろう。その時、このような気休めの言葉はどう響くであろうか。いっそ直らないことを前提にして慰めた方が喜ばれるのではないだろうか。今後の課題である。

つきにどのようにして、相手と打ち解けられるか考察したい。

これには神経言語的プログラミング(NLP)が有効である。これはバンドラー(Bandler, R.)とグリーンダー(Greider, J.)が一九七〇年代の中頃、開発したものである。それまでのボディランゲージよりも精密である。

NLPは

呼吸の速度やパターン

下唇の大きさの変化

筋肉のさまざまな緊張パターン

などを観察する。

相手をよく観察し、レポートを形成するのだ。そこで最も効果的なのは呼吸リズムのミラーリングとされている。ここでミラーリングとは、相手の外界認知モデルをよく理解し、それに自分を合わせることをいう。その第一歩は、刻々観察される相手の動作の特徴に気づき、そのパターンを自分に取り入れて行動してみることである。

応用としては、非常に緊張して固くなっている相手には、相手と同じ様に固くなって緊張感を態度で示し、話しながらさりげなくリラクセスしてゆく方法である。

布教師としては、どんな相手であっても、できるだけすみやかにレポートをとりつけて、相手の悩みやこちらの信仰を話し合える雰囲気を作り上げるようにしたい。しかし五分や十分でレポートを形成するのは、至難の技である。これも今後の課題としたい。

また今回は、詳しく書くことができないが、相手との距離、位置等も大切である。場合によっては対面するより、日の当たるベンチで横に座り、ハトを見ながら話をするなどというのも効果的だ。

布教といっても、常に多くの人に話をするというのではない。小人数の方が、効果的であることが多い。あの源智上人も、大人数に対する布教は好まなかったようである。

また対象は多数であっても、一対一という認識、相手からすれば私だけに説いているという認識を、一人一人に持たせることが大切である。それを踏まえてのコミュニケーションを、考えてゆかねばならないだろう。

参考文献

- 一、『サイコロジ』、一九八二年一〇号、サイエンス社
- 一、『美しいポーズ』、ハリエット・シエバード、レイア・メイヤー、ダヴィッド社
- 一、『マンウォッチング』、デズモンド・モリス、小学館
- 一、『面接入門』、木戸幸聖、創元社
- 一、『アニメ』、一九八五年五月号、平凡社
- 一、『かくれた次元』、エドワード・ホール、みすず書房

(東京教区・光取寺)

臓器提供の宗教的意義

研究員 佐藤 雅彦

明譽実応浄土門主は、「時機相応の念仏」という指針を我々に示されている。現代社会に活かす念仏の思想を考える時、我々は、多種多様な課題を与えられていると知ることができる。

中でも「医療」との関連においては、いくつかの問題をあげなければならないだろう。バイオテクノロジーの範疇としての、胎外受精・試験管ベビーのこと、遺伝子・染色体交換のこと、立法成立も時間の問題といわれている死の判定規準・脳死のこと、脳死と共に検討されている臓器移植のこと、キリスト教系病院で、既に幾例も実施されているホスピス・ターミナル・ケアのこと、これら山積みになされている問題について、念仏者として如何に対応していくべきなのか。

拙論では、臓器移植、特に腎臓移植をめぐる問題について述べることにする。

はじめに、筆者が何故、腎臓移植に限って述べるのかを明らかにしなければならない。周知の如く、臓器移植には、心臓、肝臓、脾臓等、多くの臓器が既に、欧米では移植されているが、それらの臓器摘出手術は、脳死の状態でなければ不可能といわれている。つまり、腎臓と角膜のみが「呼吸の停止」「心臓停止」「瞳孔散大」の三徴候が訪れ、従来の心臓死に至り、血流停止後、六十分から九十分以内であれば、摘出、移植が可能なのだ。勿論、腎臓移植とて、より新鮮な臓器の摘出が最も望ましい由で、脳死の状態から摘出ができれば、より一層、有

利な条件のもとに移植できるのだが、今は与えられた制限の都合上、脳死の問題は時期を待つこととし、脳死にふれなくても論をすすめられる腎臓を殊に、とりあげた由だ。

現在、腎不全等により、人工透析を受ける他、生きる道のない腎臓病患者は、五万人以上といはれ、年々約五千人づつ増えている。凡そ、一回に五時間、週三回という透析時間は、日常生活に多大な不安を与えずにはいない。表①②のとおり、今年七月末日現在の死体腎移植希望者は、六四〇二人である。無論、患者の中には、他人の臓器まで貰って生きたくないという人もいるだろう。

しかし、六四〇二人の希望者は、二十代、三十代、四十代の人が圧倒的に多いのをみても解るように、何としても生きなければならぬ、生きたいと強く望む人々である事が察せられる。

これに対し、死後の腎臓提供登録者は、同じく七月末日現在、八九八八七人である。移植希望者の十四倍の登録者数に、充分、足りていると思はれるが、実は、必要数に全く及んではないのだ。

昨年までの累積登録者数、六万人に対して、昨年、登録者の中から移植がなされたのは、僅か一例である。六万人対一例という確率の低さは単純計算ならば、六四〇二人の移植希望者を救うには、三億八千四百万人という膨大な数の提供登録者が必要となるだろう。確率の低さの表すものは、いうまでもなく適合検索が、厳密に行なわれているということが一番であるが、適合が一致しても、その場面になる前に、本人の意志がなくなったり、提供者が死亡しても、遺族が、登録してあったことすら知らなかったり、腎臓移植センターに連絡が届かなかつたり、遺族が摘出を認めなかったりする例が、多々あるようだ。

それでは、表③の昭和五十八年の一三七件という死体腎移植は、誰が提供したかというのと、臨床において、担当医が、死にゆく患者の家族に、直接、提供を求め、説得し摘出することの出来たものが、圧倒的多数なのである。

これら現状の裏にある、臓器移植に関しての問題点についても、避けて通る訳にもいかない。

表① 腎臓提供者・移植希望者都道府県別登録状況 (S60. 7月現在)

	提供者	希望者		提供者	希望者
1 北海道	5,018	153	26 京都	2,036	145
2 青森	1,152	5	27 大阪	11,688	603
3 岩手	551	61	28 兵庫	4,065	118
4 宮城	2,978	348	29 奈良	1,175	35
5 秋田	543	120	30 和歌山	592	10
6 山形	230	52	31 鳥取	180	10
7 福島	937	66	32 島根	25	5
8 茨城	1,230	254	33 岡山	587	2
9 栃木	567	140	34 広島	1,022	7
10 群馬	903	69	35 山口	768	72
11 埼玉	5,840	307	36 徳島	—	13
12 千葉	3,722	350	37 香川	464	11
13 東京	8,366	612	38 愛媛	35	22
14 神奈川	3,563	157	39 高知	—	16
15 新潟	—	20	40 福岡	1,431	701
16 富山	302	85	41 佐賀	389	104
17 石川	1,366	94	42 長崎	1,124	138
18 福井	453	44	43 熊本	438	51
19 山梨	—	89	44 大分	—	26
20 長野	5,311	230	45 宮崎	—	9
21 岐阜	2,972	84	46 鹿児島	—	29
22 静岡	756	182	47 沖縄	—	5
23 愛知	15,550	632			
24 三重	1,117	59			
25 滋賀	441	57	計	89,887	6,402

(腎臓移植普及会・調べ)

表② 年齢別・性別登録者数

		提供者	希望者
10	代	2,315	199
20	代	22,960	1,202
30	代	24,032	2,346
40	代	20,573	1,765
50	代	20,007	890
男		48,154	4,414
女		41,733	1,988
計		89,887	6,402

(腎臓移植普及会・調べ)

表③ 年度別 腎臓移植回数

年度	移 植 数		
	死体	生体	小計
1955	1	0	1
1964	2	2	4
1965	3	6	9
1966	3	19	22
1967	2	44	46
1968	14	33	47
1969	6	14	20
1970	6	15	21
1971	4	38	42
1972	4	37	41
1973	4	82	86
1974	7	118	125
1975	4	131	135
1976	22	132	154
1977	25	170	195
1978	35	221	256
1979	51	173	224
1980	48	233	281
1981	118	239	357
1982	156	244	400
1983	137	237	374
合計	652	2,188	2,840

(日本移植学会・調べ)

一つは、日本人の中にある意識、習俗が、臓器摘出という意向を生み出しにくい体質にあることがいえる。生前、臓器を提供しようという意志をもっていった者や、登録をした者が死亡した場合、遺体からの摘出決定権が、遺族にある為、提供者の遺志が、遺族に充分伝わっていない場合は、遺族の要望により、臓器摘出がなされない事態が発生する。平然、宗教などには無関心であったり、信仰を持たない人達が、その場に際して、死体を傷つけると「あの世」へ往けない、浮かばれない等と発想する背景には、日本の土壌に、長い歳月をかけて培われてきた、習俗的な思想の影響が多とみられる。こ

のような俗信が培われてきた課程に於て、我々、宗教人の関知する処は、等しく大きい。省りみるに、俗信の表面だけを徒らに信ずることを許すのではなく、古来より、何故、如何に、人の身体を傷つけてはならなかったか、真実から俗信が派生していった背景を誤解なく、説いていくことが、必要と考えられる。

二つには、医療と提供者との信頼関係である。腎臓に限らず、臓器移植手術を施し、成功をおさめることで、自分自身の功績点数の為や、極めて危険な、実験的な移植を行う「医の倫理」を疑わざるをえない一個人医師や、一団体としての医療機関が、存在しないとは断言できな

い世情の中で、提供者、被提供者共々、医療の現実本身を委ねられるか、という問題である。

三つめは、摘出、移植手術という医療の現状を通る時、臓器を提供しようという遺志が、平等に活かされるか否か、という問題である。

金銭的にみるならば、移植手術にかかる費用は、平均六十万円、それに、死体から摘出する為、約三十万円。

そこから一般の保健で、約三十七万二千円程、割引になるといふ。ある一定の金額を用意できるものでなければ、“生きたい”願ひをもつていても、手術を受けることが出来ない。そういう現状で、臓器を提供することは、平等性という点で疑問がもたれるという見方もあるが、生活困窮者にも、種々の保健により、手術を受けられる点で、被提供者側には、さほど問題は無いようだ。

また、昨今、医療の実情として、脳性マヒの患者や精神障害者等が、重態の病状に臨んだ場合、本人の意志を問うことなく、家族の了承のもとに、優先して臓器摘出がすすめられる傾向にあることは、人権の問題上、不平等の起る可能性があるといえよう。

四つめは、表④⑤の示す如く、移植手術が成功しても、完全に治癒することはない。その意味で臓器移植は、完治を目的とするより延命的治療といふべきかもしれない。最先端の技術により、人工臓器の開発も急進しているが、実用普及までには、幾歳月かの時間を必要とするといふ。しかし、今、こうしている間にも、“苦しみ、生きたい”と願う人々に、人工臓器が供給される迄の猶予を、誰が与えてくれるのだろうか。

さて、列挙した四点は、社会的問題点にして、宗教的段階には、至っていない。浄土教としての問題点の窮極を指摘すると、往生にふれる事となる。臓器をとった肉体は、往生するのか。臓器自身は、どうなのか。他人の臓器を移植された身体は、どのように往生するのか等、様々な疑問点が見出されるが、祖師方の述作に、現在、明瞭な示唆は、見つけられていない。無論、宗祖が在世当時、想像もされなかった事であろうし、典拠のもとに宗門一致した現代的解釈と対応を施されん事を望まれる由である。

無量寿「生かされる命」という把え方がある。信仰の論

昨今よく使はれる、浄土教の言語的解釈に「阿弥陀」

表④ 1981～1983年度別腎臓移植成績 (1年生存率/1年生着率)

	1981年	1982年	1983年
全 例 (N=症例数)	88.1/65.8 N=357/N=357	90.7/71.2 N=346/N=348	95.4/81.9 N=259/N=261
生 体	92.8/78.2 N=238/N=238	96.7/86.8 N=210/N=211	98.6/93.0 N=166/N=167
死 体	78.6/40.7 N=118/N=118	81.2/46.8 N=132/N=133	90.0/63.2 N=91/N=92

(日本移植学会・調べ)

表⑤ 年齢別腎臓移植生着率

(1975年以前/1976～1980年/1981～1983年)

年 齢	0～15	16～50	51～
症例数観察期間	41/91/68	491/829/541	6/5/11
1 年	78.0/85.7/85.7	59.9/71.7/83.7	-/60.0/89.5
2 年	68.3/77.7/74.3	51.9/65.3/76.7	-/60.0/89.5
3 年	63.4/71.1/61.9	45.6/65.0/72.1	-/60.0/89.5

(日本移植学会・調べ)

理を、きわめて短絡的に「生かされる命」に基き、臓器提供を考えるならば、この我々の身体は、与えられたもの、借りたものといえよう。従って、今生に於て尊く使わせてもらった身体は、臨命終時には、如来の意に叶うが如く返す。つまりは、生かされる命を説くものとして、生きたいと願う人がいれば、生かす使命が、あるのではなからうか。幼少年や、未だ人生の半ばにも至らぬ青年に、人間とは、自分の力ではなく、生かされているからこそ、素晴らしい人生なんだと、たとえ一日でも生きて知って貰う必要があるのではなからうか。これら、生かされ、生かす、という信仰の解釈論からすれば、臓器提供に、積極的に賛同する姿勢となる。

宗教的意義を、単に浄土教に縛られることなく、仏教者として問う場合、「如何なる意識のもとに提供しよう」と心を発すかが問題となる。布施や捨身供養という語も、当てはまる。しかし、提供者、被提供者間の様々な条件、縁故関係等に捉らられることなく、その媒介課程の諸問題も言外とする、「無縁の慈悲」

の心を発し、提供することこそ、真の宗教的意義といえる。

医療と宗教をめぐる問題の中から、腎臓移植を中心とした若干の問題について発言を乞うた由であるが、それらは「生きること」と「死ぬこと」に起因した問題であるだけに、念仏者として、如何に対応すべきか、内に熟慮、外に果敢な発言を、時代は求めている。

脳死と臓器移植に関する文献の中から、入手しやすいものを次にあげ、ひとまず筆を停することとする。

〈単行本〉

『生命と倫理に関する懇談』

厚生省医務局編集・S 58・10 薬事日報社

『脳死と心臓死の間で』 S 58・6

『続・脳死と心臓死の間で』 S 60・7

日本移植学会編・メヂカルフレンド社

『いのち最先端・脳死と臓器移植』

読売新聞解説部編・S 60・4 読売新聞社

『見えない死・脳死と臓器移植』

中島みち・S 60・9 文芸春秋社

『いのちの法律学』

大谷実・S 60・10 筑摩書房

『朝日ブックレット8・医療最前線』 S 58・7

『同22・誤解が多すぎる「脳死」の時代』 S 59・1

『同53・どうする移植医療』 S 60・5

朝日新聞取材班・朝日新聞社

〈雑誌〉

『技術と人間』(附技術と人間)

S 85・3 臨時増刊号「脳死」

S 85・7 「現代医療の裏面」

S 85・9 「第3回・脳死シンポジウム」

『中央公論』

S 60・11 「脳死」立花隆

『からだの科学』評論社

S 60・9・125号「臓器移植」秋山暢夫編

(東京教区・浄心寺)

教団レベルでの広報の意義とその展開

研究員 加藤 俊 哉

価値観の多様化が進み、分衆の時代といわれる現代社

会において、われわれ宗教者を取りまく問題もますます

複雑多岐にわたっている。ざっと列挙するだけでも、

・ 脳死と臓器移植

・ 人工中絶と水子供養ブーム

・ 体外受精

・ 安楽死——末期ガン患者のためのホスピス

など、医療の発達による現実原則のゆらぎ、

・ 靖国神社の問題

・ 古都保存税

・ 宗教法人に対する課税強化

等の国家と宗教の関わり、

・ 某宗教団体の信者の輸血拒否

・ まじない。占いのブーム

に見られる狂信や迷信の流行と信仰心の荒廃、

・ 都市周辺への人口の集中化とこれに伴う「宗教的流

浪の民」の増大。都市開教のおくれ

・ 管理社会の進行によるストレスの増大と歪んだ人間

の大量生産

・ 戒名料等への疑問、僧侶への不信

等々、宗教者の活躍できる範囲が狭まったとはいえ、わ

れわれの果たすべき使命はまだ多く残っている。

ところが、これら諸問題に「浄土宗として」どう対応

しているかを振り返るとき、その立ち遅れが非常に目立

つと言わざるを得ない。公式の見解というものがほとん

ど述べられず、また、発表しようにもマスコミに対する

スポークスマンさえ存在しない現状には、一宗侶として心許なさを感じる。

また、教団の存在理由である布教・広宣活動でさえ実際のアクションは各寺院レベルに委ねられている。

布教とは、現代の情報化社会においては、もはや寺院レベルのお説教のみでは到底あり得ない。教えを広めること、これは立派な宣伝、広報活動である。「心の時代」が強く叫ばれている今日、前述の諸問題への柔軟かつ敏速な対応はもとより、教団レベルで社会に対しアプローチしてゆくことが早急に望まれるものであり、そのノウハウをここで考えてみたい。

—— 一大組織「浄土宗」

浄土宗は全国七〇〇〇ヶ寺のネットワークを持つ立派な大組織である。ただ問題は、組織みずからに統一集団としての意識が十分に形成されていないため、バラバラの活動にとどまっている点である。また、統一行動をとりにくいことが、周囲へのアイデンティティのアピール度や、社会全体への影響度を弱くしている。

この現状をさらに分析するために、「浄土宗」を一般企業の組織体になぞらえて考えてみよう。宗教教団と企

業を比較しても……、と思われる方もいるかも知れないが、企業が商品を開発・販売してゆくように、浄土宗も「念仏」を柱に心のやすらぎを売りものに教化活動をすする以上、よりシステマティックな組織をもたずして今後の成長は望めない。浄土宗の弱体化を防ぐために、21世紀に向けて組織として健全に運営されるべき「浄土宗」をとともに摸索していただきたい。

さて、理解の一助に念仏をチョコに想定することのお許しを乞う次第であるが、この念仏チョコを取扱う「O・D・O製菓の組織図が以下の様に浮かび上がってくる。

(別図参照)

全体像が明らかになったところで、布教研究所員としての私の役割は広報部門にスポットをあてることである。

—— 広報とは？

およそ人として生まれた限り自分のことを他人により良く、より深く理解してもらいたいと願わない人はいない。同様に企業や行政府等の組織にとっても自らの活動やセールスポイントを一般に正しくわかってもらおうという欲求がある。そしてそのための手段、方法を常に考えてきたのである。これがいつの頃からか欧米でP・R

〈JODO 製菓組織図〉

名 称	JODO 製菓 Co. Ltd
商 品	菓子全般を扱うが中心となるのは1300年以上の歴史を誇る念仏チョコ
目 的	より多くの人に念仏チョコの滋味を知ってもらう
販 売 網	全国7,000以上の営業所と約8,700人の営業マンがいて営業活動にあたっているが、今のところあまり統一した動きは見られない。営業所単位の販売では活発なところとそうでないところの差が目立つ
顧 客	江戸時代より原則としてメンバー制をとっており需要の安定化にひと役買っているが、このことが逆に販売力の低下の原因となる
研 修	東京・京都で3週間の新人研修があるが、第一線の社員の養成という意味ではいま一つ効果があがっていない。ブロック毎の各種講習会は自由参加のため全社員数に比して参加者は著しく少ない
研究機関	東京・京都に専門機関がある。商品の歴史的経過の研究に重点がおかれ、商品の拡販戦術、新商品の開発、長期戦略等の研究は特にされていない。またそういった研究者は社内で白い目で見られる。布教（広報）研究所があるが、まだ充分に機能していない
宣 伝	一部を出版室が担当。最近盛んになりつつある。マスメディアの利用度は低い
広 報	社員向けに社内報はあるが人事、予算等に紙数が割かれている。また、コンセプトが定まらないまま発行されている新聞はひと昔前のパブリシティのイメージを脱皮できず、発行部数の伸び悩みに頭を抱える。マスコミ対策等の対外的広報は全くなし
市場調査	マーケティングには関心がうすい。ライバルメーカーS社は最近2度目の大がかりな調査報告を出した
企 画	創立者をはじめ歴代社長の功績を讃える記念式典は精力的に行われる。外資系C社に見られる明るい企画が少ない
営業姿勢	決して消極的ではないのだが、創立者の生み出した商品に固執するあまりその理念が逆にスポイルされている

と呼ばれるようになったもので、日本では広報と訳されている。

P・Rとは Public Relations すなわち「公衆との関係づくり」であり「企業・団体がその事業活動や方針などを一般大衆に知らせ、企業・団体との関係において良い世論をつくり出すよう努める機能」(ウェブスター辞典)である。

また『企業広報の手引』(日経出版)には企業広報の目的としてこう書かれている。

「広報は社会の好意と信頼を得るための対外コミュニケーション活動であることは間違いありませんが、それがすべてではありません。企業のイメージとは、具体的に何をつくり、何を売り、何を訴えるか、そうした個々の活動がひとつにまとめられてできあがるわけです。…このことは、企業における広報活動はまさしく全体を統合する活動であることを示しています。」

「企業のさまざまな活動の源には、企業理念が存在し
ます。現実には広告活動や販売活動のなかから企業理念が浮かび上がってくることもあるし、また反対に企業理念を理解しているために、その企業の広告活動が納得で

きたり、セ・ル・ス・マ・ンの考え方なり態度なりがうなずけるといったこともあります」

文中傍点の部分はまさに浄土宗にかぎらず仏教界に共通してあてはまることで、今後最優先させるべき教団のアクションプログラムのヒントともいえる。

—— 広報の展開

つまり教団の広報活動いかによって次の二つの点で状況の大幅な改善がはかれるのである。

(1) 教団の理念、すなわち浄土宗が社会にとってどのような役割を担ってきたか? あるいは担おうとしているか? 人々の生活向上のために何を提供しようとしているか? ということを明確にP・Rすることで、寺院の存在価値を広く世に問い、また再認識してもらおう。これは末端での教化活動をよりしやすくするための支援でもある。

(2) 現在、マスコミは第三の権力といわれるほど、その報道は影響力を持っている。教団の主張、メッセージを、マスコミという第三者を通じて一般にコミュニケーションすることは、直接訴えるよりも概して効果的である場合が多い。例えばA男がB子に対して自分の長所を並

べたててプロポーズしたとしても、それだけではA男を完全に信用することはできないであろう。が、A男の友人、C郎が「彼は秀才で将来性のある人間だ」とコメントすれば、自分で「私は絶対出世してみせる」というよりは良い結果をもたらすといえよう。

同時に教団、広くは仏教のイメージを高く維持するために、その逆の、つまりイメージダウンにつながるような報道は、教化の妨げになることであるから、さし控えてもらうようマスコミに働きかける。これも、より良い世論を形成し一般社会からの信頼を得るために必要なことである。もちろん、火のない所に煙は立たぬはずなので、宗侶一人一人が襟を正すことも求められる。

——教団内部の統一

これら広報活動から期待される二次的効果がある。それは外に対してなされる広報が逆輸入的に内部にフィードバックして、教団内部の統合や意思疎通がはかれることである。

例えば「浄土宗は安楽死の問題、ターミナルケアについてこの様な意見を持っています」「靖国問題をこうとらえています」と対外的にP・Rする計画があるとしよ

う。第一段階で宗内の専門家・有識者による検討をした上、統一見解を出す。ここでは一部での意思統一にすぎないが、第二段階でその見解を周知させることで、「浄土宗はそう考えているのか」と一般から認識される。そして次に実際に宗侶が信徒等と接する上で、その問題に話が及ぶ度、宗侶は堂々と浄土宗の一員としての立場から見解を口にすることができる。

まだ判りにくいかも知れないが、「トヨタは良いクルマづくりを心がけています」というP・Rは「良いクルマを作ろう」と社内呼びかける以上に、社員全体の意識を高揚するのである。

このようにして組織の一体感をつくり上げることが組織外に対する説得力ともなり、一般社会の理解を得るために非常に効果的であるという観点から、最近C I・コーポレートアイデンティティを導入する企業が増えている。これは経営の長期戦略の一環であるが、わが浄土宗も守りだけでなく攻めの教化をすすめてゆくために、是非とも導入したい課題の一つである。

——具体的には

それでは今後どのような方向での広報活動が期待され

るか、具体案を列举してこのレポートの締めくくりとしたい。

● 広報部門の設置と人材の確保……第一である。

● マスコミへの対応……スポークスマンの設置と各種問題に対する専門委員の選出

● 儀式、法要、布教方法等の再検討

● コピー、ポスター、讃歌等の教団内公募……全員参加型の教団形成

● 宗立大学での専門コースの設置……今後の人材の育成

● 現代に対応し得る教学の研究……過去の研究だけでなく、現在から将来に向かった教えのあり方等の研究

等々、が考えられるが、まだあるであろうこうした具体案を全国九〇〇〇人の宗門人から出してもらおうのも、浄土宗の活性化を呼びおこすものであるし、それが広報の役割でもある。

(東京教区・専修寺)

淨土宗教学布教大会意見発表

三上人の遠忌にあたっての布教活動

〈発表者〉

教 学 院 代 表 佛 教 大 学 助 教 授 三 枝 樹 隆 善

布 教 師 会 九 州 支 部 代 表 大 分 教 区 丹 羽 演 誠

〃 関 東 支 部 代 表 神 奈 川 教 区 坂 野 泰 巨

〃 北 陸 支 部 代 表 新 潟 教 区 佐 藤 耕 哉

〃 中 四 国 支 部 代 表 石 見 教 区 山 崎 一 尊

〈司会者〉

布 教 師 会 九 州 支 部 長 崎 教 区 中 路 秀 暢

〃 東 北 支 部 山 形 教 区 井 沢 隆 徳

司会 ただいまから大会日程第三日の行事に入ります。

このたびの意見発表の司会をさせていただきます九州長崎教区の中路と申します。大変ふつかではございますが、よろしく願います。

ただいまから意見発表に入りますが、皆さま方におこたわりといえますか、訂正いたしておきます。お手許の九月六日の大会日程のプログラムでございますが、北海道第二教区の松岡上人が急に健康上の理由で発表ができなくなりました。その代わりに九州大分教区の丹羽演誠上人がご発表になることになりました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

なお、本年度の意見発表は「三上人 大遠忌にあたっての布教活動」がテーマになっております。発表される時間はお一人二十分でございます。なお、発表される五人の方々全員にご発表いただきまして、それから質疑応答ということになっております。大変暑い中でございますが、最後の行事でございますので、活潑なご意見が出るようにお願い申し上げます。

それでは最初に、浄土宗教学院代表、佛科大学の三枝樹隆善先生にお願いいたします。

三枝樹 今回、教学院から推挙されました三枝樹でございます。

今回のテーマは「三上人 大遠忌にあたっての布教活動」というテーマでございますが、私は総論として、まず三上人を迎えての浄土宗の指針と申しますか、そうしたものをまず認識し、自覚しておかなければならないのじゃないかと、こう考えます。

それにつきましては、幸いに、浄土宗務庁から昨年八月に出版された『三上人の芳躅、輝く法灯』という冊子がございます。これはすでに皆さま方もごらんいただいておりますが、その中に、宗務総長の序文が掲げられております。その序文に、迎えるにあたっての指針が述べられております。宗祖法然上人を中心とした三上人の法灯を鑽仰して、いよいよ念仏生活の充実をはかり、その精神を現実に生かす努力を重ねなくてはなりません。このように強く述べられております。

そして三上人は期せずして吉水正統の護持、法然教学の祖述、祖廟復興の聖業にそれぞれ全身全霊を捧げて始終せられ、なお、この三位一体ともいべき三上人の遺躅を景仰し、厳護法城、正法流布の勤めに精進したいと思っております。願わくは三上人の遠忌を前にして、輝く法灯

を奉戴するとともに、道俗相戒めて心に光を發する社会の出現を期したいものでありますと、こう結んでおられます。

このことは私は今後、浄土宗の教化のあり方として、非常に重要なことだと思しますので、総論としてあげさせていただきます。

次に各論に移りますが、私は教学院代表ということで、当然、この三上人の教学、思想、信仰の特色を把握して、そして布教の理念を明確にすることが教学院の立場ではないか。こう考えるわけでございます。それについても大変いい書物が出版されております。これはご承知のように宝田正道先生が執筆をなさったわけですが、大変、要領よく纏めて、簡潔にこの三上人の伝記や業績、その他について明らかにされております。

しかも後書きには、太田秀三教学局長を通じて、能化むけの三上人紹介文を書くようにとの依頼を受けて執筆したのが本書である、と述べておりますように、私たちに示された書物であるということができます。その中に三上人の特色が掲げられております。概略を踏まえた上で、私の意見を述べさせていただきますと思います。

まず、私はこの三上人の教学の特色をひとことで掴めないか。つまりキャッチフレーズとでも申しますか、ひと言でこの方はこういう特性があるんだ。そういう意味でそれを取って布教の活動の資にしたいという考えを持っておるわけでございます。そういうところから考えていきますと、まず聖光房弁長上人の業績と申しますか、教化の特色をあげますならば、法然上人の教学、思想、信仰の伝持者であるということです。これは非常に重要なことだと思えます。

ご承知のように弁長上人は法然上人にお弟子として随従されておる。これは聖光房弁長上人の非常に強みだろうと思えます。それは分けていきますと、念仏の地方勸化と申しますか、鎮西に布教の根柢を築かれたということになります。しかも根源的な善導流義の補足であったということも、弁長上人の特色であろうと思えます。

その他寺院をたくさん建立され、善導寺を中心として活躍されたわけでございます。ともかく教化の特色というものをあげてみますならば、「念死念仏」という教義をもって、別時念仏の修行を強くなされたということに、非常に深く私は感銘を持っておるのでございます。

そういう意味から『授手印』を作製される上において、序文を見ますと、白川河の辺、往生院のうちに於いて二十有余の衆徒を結び、四十八日の日夜を限って、別時の浄業を修し、如法の念仏と勤む、とあります。

その理由としてこの間においていたずらに称名の行を失せんことを悩み、空しく正行の勤めを廃せんことを悲しみ、かつは然師報恩のため、かつは念仏興隆のため、ということを示されております。

今日、私どもの寺院におきましても、毎月の例会というようなことで別時念仏をなされている寺院がたくさんあるかと思えます。また、私の寺でもかならず勤めております。弁長上人は『授手印』をお書きになるための別時であったかもしれませんけれども、それはやはり、念仏の称名の行を失わないためにというところに私は強く惹かれるわけでございます。

そういうところから、鎮西上人の特色をもしひと言で強調させていただきますならば、各寺院がござって、別時念仏を修して、それを基にして教化に当たっていくというところ。この点を一つだけここでは指摘をさせていただきたいと思えます。

なお、このあとでこれは述べておきたいと思えますが、建久二年の五十九歳の時に請われまして、油山の天台学徒の学頭をお勤めになられた。そういうところからも飛躍的な展開を今回は試みてみたい。こう考えております。これはあとで申させていただきます。

そこで第二番目には、勢観房源智上人の業績と教化の特色をあげてみなければならぬと思えます。

簡単に申しますと、源智上人はみずからの行を主とされてあまり表向きには表れておられないようなお方に見えるけれども、しかし、みずからの念仏の行に励みながら勸進聖としての行動、あるいは著述としても『選択要決』、あるいは『浄土随聞記』という有名な書物を遺されておられます。

それから自行を主とする念仏行者として、とくに知恩院の祖廟を修造された。こういうところに特色があげられ、しかも聖光上人と常に連絡をとって鎮西流義を守っていかれたというところに特色があるわけでございます。特に教化の面から、この方の特色を掴みますならば、『一枚起請文』の要請であったと思えます。

これは鎮西上人に渡された文章にも同じような文章が

あらわれておりますけれども、ご承知のように法然上人の亡くなる二日前に請われております。一枚の紙に記されたということは相当な意義を有するものである。こう認めなければならぬと思います。それは浄土宗における現在の文書伝道の始まりといっても過言ではないと思います。一枚に記されたということは、下手な言葉で申しますならば、チラシといってもいいでしょうか。教を一枚の紙にチラシとして信徒に分ち、あるいは未信の人達に伝えていくという、文書伝道の根本になるのではないか。リーフレットと申しましょうか。今日、文書伝道はいろいろな形でなされておりますが、源智上人の「一枚起請文」の要請というものが、大事な教義を伝えるということだけでなく、教化としてこれを取り扱った場合に、そのことが深く感じられてくるということを申し述べたいと思います。

第三番目に、記主禪師良忠上人の業績と教化の特色でございますが、良忠上人はご承知のように、当時政治の中心地であった鎌倉を舞台にして、関東における鎮西流義の教線拡張をなされました。鎮西上人は鎮西で、源智上人は京洛で、良忠上人は関東で、日本列島を縦断をし

た全国的な教線が見られるわけでございます。その教線擴張の中で、歴大な著述を遺し、弟子の養成にあたっておられるということが、特色であろうと思います。

そしてまたもう一つ加えるならば、四十八ヵ寺の寺院の建立をなさって、そして教化に努められておる。

寺院建立というものの一つ取り上げても、あるいは著作と子弟の養成ということを私は強く取り扱っていきたいと思うんでございます。幸いにして関東には、立派な大学もございまして、寺院建立の教化活動ということから考えていきますと、非常に重要なことでございます。実は私の弟子が沖繩の宮古島に一人おります。宮古島には仏教寺院は禅宗と真言宗の二派があるようでございますが、どうしても島全体に念仏の声を掲げさせたいという念願、悲願を持っておることを聞きまして、私も昨年、事情調査にまいりまして、非常に意を強くして帰ってきたわけでございます。その弟子が仏書などを通じてそこそこの知識人に伝道しつつあるわけでございますが、はっきり申してお念仏を申しましょと、そこまではいってないようでございます。私が行くということで、三十名ほどの方々を集めて下さって、一時間ほどお話を

させていたわけでございます。そこで皆さんと一緒に
緒にお念仏を申させていたきたいと言いましたら、大
きな声で念仏を申していただきました。私はその時、宮
古島全体に響きわたったような感じを受けて、島の人た
ちが非常に喜びに溢れたというような実感を持ったわけ
でございます。そういう面から私は、宮古島に一軒寺を
建てなければ死ぬことはできないとまで思っているよう
なわけでございます。

以上三上人それぞれの教化に対する特色というべきも
のを、あげさせていただいたわけでございます。

振り返って三上人をもう一度見直させていただきたい
と思いますが、法然上人のお念仏の勸化に力を注がれた
ということは、三上人一致していえることでございます。
鎮西上人が油山の学頭をなされた。あるいは良忠上人が
多くの著述を書きしかも書かれるということは、講義さ
れたことでございます。多くの人たちにそれを説かれた
ということは、やはり教育的な見地として見なければな
らないと思います。そのことについて考えてみますとき
に、いまの時代に何が一番欠けているかということとは、
私がここで取り上げるまでもないと思いますが、私はこ

れを宗教教育の重要性という意味で捉えたいわけござ
います。

宗教教育の重要性ということから、いろいろなことが
考えられます。私は佛敎大学に所属しておりますが、私
自身が佛敎大学の地方進出という考えを持っており、学
長自身も持ちのようでございます。大変意を強くし
てここで申し上げたいと思っておるわけでございます。

二十分ちょっと過ぎましたので、ひとまずここで私の
話を打ち切らしていただきたいと思ひます。

司会 まことにありがとうございます引き続きまして、
浄土宗布教師会の代表の方々に意見発表をお願い申し上
げます。まず九州のほうから大分教区正念寺の丹羽演誠
上人にお願ひ申し上げます。

丹羽 いまご紹介のありました大分教区の丹羽ござい
ます。このたび、三上人のご遠忌にあたっての布敎活動
について、九州の支部長さんであります金子貫達さんか
ら、夜遅く電話がございまして、敎学布敎大会にぜひな
にか話をしろということでございます。

実はここにきて感じたんでございますけれども、プリ
ントには載っていないので、へんだなと思つたら手違い

があつたわけでございますが、それはそれといたしました。これも一つの仏縁であつたわけで、実は先ほどの会場に着いたわけでございます。

私は十数年、大分教区の教化団長をしている関係で、遠忌に三回も接しているわけでございます。開宗八百年、並びに善導大師千三百年、生誕八百五十年の記念事業に接しておる。これも一つのありがたいことでございます。そういうことを振り返りながら、私は三上人の大遠忌を迎える布教活動ということを考えてみたいと思うわけでございます。

初めに遠忌ということについて考え、次に三上人のご遠忌の意義並びに期待される活動という三つの問題につきまして、しばらくの間お話をさせていただきたいと存じます。

ご遠忌というのには、必ずそれぞれの特色とその将来への展望というものがなくてはご遠忌の意味がないのではないかと存じます。開宗八百年はやはり開宗八百年としての意義があり、善導大師千三百年にも、また生誕八百五十年にも、それぞれの意義とその使命があつたわけでございます。

知恩院などの本山でいろいろな計画をし、私もその法要に参加したわけですが、みんな一応すみますと、無事にご遠忌が円成した。成功裡に終わったところ申すわけでございます。しかし本当に成功したといえるのであろうか。例をとりますと、本山なども立派になりました。また、それを契機として地方寺院もいろいろな行事をいたしました。まして堂宇も非常に立派になります。

しかしそのみが円成した意味ではないのではなからうかと思つたわけでございます。たとえていいますと、本山におきまして何十万の動員をして、盛大に法要が行われ、大殿の中にいっぱいの人が溢れ出ます。しかしながら一体これでもいいのであろうかと私はつくづく思うわけです。実は私も善導忌の時に、また開宗八百年の時にも法要に随喜させていただきました。非常な感激でございました。しかし、本当のことを考えてみますと私たちにやはり念仏弘通ということが主体でございます。

そういうことを考えてみますと、みずからの手でお経を読み、お念仏を半日なりとも唱えて知恩院で過ごす、そういう法要があつてしかるべきじゃないか。宗祖が喜ぶことは、お念仏するところが自分の遺跡であるんだ

ということを考えて時に、みずからが進んで信仰の中に生きる喜びが味える、そういう法要があつてしかるべきじゃないか。

また生誕八百五十年の時には、全国の寺院の子供さんたちを全部集めて、一つの式典をしたならばどれだけか意味があつたのじゃなからうか。寺門の子弟は次に寺を守つていく、将来のある一つのいのちなんです。そういうことをしないで、ただ法要に喜んだ。でもって終わつたということでは、なにかしら淋しい感じがいたします。遠忌にはかならず、遠忌の意義と、次にくるべきものを、私たちは育てていくべきじゃないかと思うわけでございます。

地方新聞でございますが、ある新聞記者が一年間、毎週、各寺のお坊さんを訪ねまして、インタビューをしました。一年後の結論として、こういうことが書いてございます。どのお寺に行つても堂宇が立派になつた。これは一体、何でありましょうか、と静かに考えた時に、日本の興隆がおのずからそうさせたのではないだらうか。それに比して宗教というもの、信仰というものは実にむつかしいものである。本当に堅固な意思、堅固な坊さん

というものは少ないような感じがすると結論づけているわけでございます。

これはやはり私たちがみずから考えねばならないことであり、ご遠忌を通じて、ご遠忌の意義とそれに対する教化の永遠性というものをもう少し考えるべきではなかつたかと思うわけでございます。

しかしながら私の教区の話でございますが、開宗八百年の時に教区全体に法然上人さまの写真を配つたわけでございます。嬉しいことに、仏間にみんな法然上人の写真が掛っているわけでございます。やはり私たちが大衆の中に生きたものを求めなくてはだめなんだ、喜び勇んで団参して、急いで観光旅行に行くよりも、一枚の法然上人のお像が全教区の檀信徒の仏間の上に掲げられているということが、そのほうが生きたものがあるのではないか、と思つたわけでございます。

次に、三上人の大遠忌を迎えるにつきまして私はこういうことを思っているわけでございます。三上人の徳のことにつきましては、三枝樹先生がいまお話しになりました。私も同感でございます。鎮西弁長上人は法然上人の正しい意を伝え、法を伝え、そして良忠上人はそれを

纏め、正統と正義づけ、そして弟子を養ったということ
は同感でございます。勢観房源智上人は法然上人のこの
知恩院を守って、そして勸進聖としての尊つとい姿、そ
して「一枚起請文」をいただいたということに深い意味
があるということも、同感でございます。

しかし一宗が「輝く法灯—こころ—に光を」というテ
ーマを掲げているということを考えた時に、実際に今日
あるのは、私は各地方の寺院、皆さま方の寺があつてこ
そ今日あつたのじゃないか。そういう意味で、輝く法灯
の中に、私はこのご遠忌を通じて開山上人、並びに中興
上人の歴代のこの先徳の徳を讃える意味を付け加えてい
ただきたい。また念仏を進めてきた檀信徒の方々も祖先
の力をも考えていただきたい。そういうことを各寺院が
行つていった時に、生きたお念仏が拡まるのではないか
と思うわけです。

では、どのような方法をもつてすべきでありましょ
うか。二祖さまの『末代念仏授手印』の序には、一つは淨
土宗の正しい念仏の法を伝えるためであり、二番目には
念仏を勧めるために往生院で四十八日の念仏会を修した
んだということが書いてあります。そういうことを考え

た時に、これを契機に全国の寺院で四十八日の別時をし
たらいかかであろうかと思うわけでございます。四十八
日の別時ができなければ何日でもいい。七日間でもいい。
みんなが揃つてお念仏を申せることが第一の意義ではな
いかと存じます。これがすなわち報恩行であり、また次
のものを育ていくものじゃないかと思ひます。

ある日私の檀家にまいりまして、その家の三代前の大
福帳を見せていただきました。見てみますと、きょうか
ら正念寺で四十八日の別時がある。お米三升寄贈、先祖
代々に供養いたします。何日と何日は誰々が参つており
ました、という記事があるわけです。明治の少し以前で
ございます。昔の坊さんは現代と違ったかもしれないけ
れど、やはり四十八日の別時をやつておつたんだとい
うことを、恥ずかしく思ひながらその記事を読ませてい
ただいたわけです。

淨土宗の布教のもととなるのは、門主の教諭でござい
ます。布教師の方は読んでおるかもしれませんが、一般
の寺院の方は読んでる人は少ないんじゃないか。静かに
読んでみた時に、私たちは現在に即応した布教というも
のはどうあるべきだということを説いております。いま

は一年が三日だところ申します。しかし、私はそれはそれでもいい。やはり素直な気持ちでこれを勤めていくことが大切ではないかと思えます。

では次に、期待される活動についてお話し申し上げたいと思えます。

やはりそれは児童教化のことじゃないかと思えます。

私も十何年、保育園をいたしました。やはり保育園、幼稚園の子供を通じて、宗教教育、情操教育ができるということは大変結構なことです。しかし卒業したらそのまま放っているのが現状でございます。それを私たちが組織を通じて、なんらかの形でこれを関係づけ、意義づけていくことが大切なことではないかと存じます。保育園、幼稚園の子供がお寺に素直に入ってこられるのは、やはり寺の幼稚園、保育園を知った子供でございます。そういう意味で、児童教化に特に力を入れるべきではないでしょうか。

さらに現代は情報化時代と申します。私は『浄土宗新聞』の実情を聞いて驚いたわけでございます。私の教区では二百なんぼしか取っていないわけです。その半分は私どもが取ってるわけなんです。なんともいえない気がい

たしました。

私のところで毎年、檀信徒の研修会がございます。初めは寺の悪口言ったり坊さんの悪口言っておったのですが、数を重ねていくうちにだんだんという方向に向かってまいりました。総代さん、婦人会の中堅、あるいは青年の層を集めて研修会をいたします。年を重ねるにつけて積極的なものになっていきます。やはり組織というものが大切でございます。

三番目には、社会事業をもう少し一宗は考えてしかるべきではないかと存じます。たとえば浄土宗の寺院が三万円ずつ集めたならば、二十一億円のお金が集まるわけです。この二十一億円のお金を各教化センターに纏めて渡すことによって、社会事業を起こすべきではないかと思えます。そしてその中に、教化と福祉と合わせた一つのものを組織立てていくことが必要ではないだろうかと思えます。非行少年が出たならば、その中に入ってしばらくの間しておればよくなるんじゃないか。また、お寺の次男、三男坊が就職に困った時には、そこに入れたいらいんじゃないだろうか。

このように教化センター単位に老人、精薄、アルコール

ル中毒などの施設を纏めてつくってあげることが必要じゃなかろうか。先日も宗務総長に、そういうふうにしませんかと話しましたら、あんなたちがそういう意見を出さんとだめだというので、わざわざぎょうはそういう意見を提唱するわけでございます。いろいろな講習会なども全部やれるような教化福祉センターといったものを、この機会にやったらいかかと思うわけでございます。

所定の時間がまいりましたので、もっと話したいことたくさんありますが、ご遠忌というものは、その上人を立てるとともにこの次のものを育てていく一つの布教活動でないといけないのではないかと思うわけでございます。

司会 まことにありがとうございます。引き続きまして神奈川教区西蓮寺、坂野泰巨上人にお願い申し上げます。

坂野 「三上人大遠忌にあたっての布教活動」、こういうことでありますけども、私は三上人の大遠忌であるからなにか格別のことをしなくちゃいけない、そういうようなことではないと思うんであります。これまで通り元祖

法然上人のみ教えにしたがっていくことは、教化の面からなら変わりがないんじゃないか、このように思っておるんであります。

元祖さまのご精神を正しく相続された三上人のご遠忌を迎えるにあたって、ただ考えることは、もう一度原点を正し、心を新たに精進していこうということだと思っております。原点を正すということは、今日、最も大切なことだというふうに考えております。

『浄土随聞記』の中の「聖覚法印に示されける御詞」には、「浄土宗の学者は先ずこの旨を知るべし。有縁の人のために身命財を捨てても、偏こえに浄土の法を説くべし。自らの往生のためには諸の囂ごうじん塵を離れて専ら念仏の行を修すべし。この二事のほか全く他の営みなし」と、このように元祖さまはお示し下さっております。私はまさに自行化他、二事双修ということを元祖さまはお勧め下さっておるんだと感じ取って、これを常に忘れないように柱としております。まさにこれは私たちにとっての自信教人信であり、仏恩に報ずる道であると考えております。私自身はこれといった格別の教化活動をしておるわけではありませんが、布教活動するという場合には、まず

原点からの教化発想ということをもう二十年来、心がけております。一度原点に戻って原点を正した中で、自分の教化活動を確認していく。このことがやはり大事なことではないかと思っております。最近特に感ずることでありませんが、一部の寺院の様子を見ておりますと、原点を忘れて、目先の流れに便乗してる傾向があるようにも思っております。

元祖さまの法語に「たとひ余事をいとなむとも、念仏を申々これをするとおもひをなせ、余事をしし念仏すとはおもうべからず」とあります。これは浄土宗の基本的なご法語だと思っております。各僧侶は、これを常に頭に入れて教化活動に励まなきやならない大切なご法語だと、受け取っております。今日では、お念仏が余事をしながらのお念仏になっている。正しい信仰が育たない原因もここにあると私は思っております。一つ家庭の仏壇を見ましても、仏壇を心の中心とした家庭はなくなってしまう、だんだん形骸化した片手間の仏壇になっている。これはやはり教化をする側のほうが、原点をおろそかにし正さないからじゃないか。このように思っております。

最近の傾向を分析する形になりますが、墓地分譲の看

板を大きく出して、営利に走っているお寺があります。さらに院号の販売であるとか、お布施の価格化、水子供養の営業化とか、そういう宗教産業がはびこっていることがうかがわれます。僧侶の中にはお金の儲かるお坊さんになりたい、お布施をたくさんもらえるお坊さんになりたいという。また、それを公然と話している人もいるわけがあります。若いお坊さんの中には、そういう言葉を聞きますと、まことに現代は、そういうものなのかと、同調する人さえ増えてるような気がいたします。一方、税務官やマスコミは、一部の宗教貴族化した寺に対して、厳しい目を向けております。その上、最近の都市化の進んだ今日、多くの人は宗教なしに生活をしている。宗教がなくても楽しい生活をしておる。宗教は必要ないんだ、ということ公然と述べる人たちも非常に多いということがあります。

それを考えますと、仏教、さらには寺院、僧侶というもの社会にとって、あの排仏棄釈の時にあったように、無用の長物である。このようにいわれはしないかという危惧さえ、私は感じております。このへんについては、もっと真剣に考えていくべきであるということを、心構

えとして持つております。

なにごととも二代目、三代目ということになりますと、まことにそれを引き継ぐことはむずかしいことであります。それを思いましても、この三上人は法然上人のお念仏の教えに対する異義、異説のさかんな中であって、まさに正法を伝持して正しい念仏に尽くされたわけであり、ます。その真っ先に立たれたのは源智上人であり、聖光上人であると思うんです。さらにその奥義を良忠上人に写瓶相承をし、浄土宗の教義の基礎を固められたわけであり、ます。

今日の浄土宗があるのは、まさにこの三上人のお蔭である、このように感じとるべきだと思っておりますが、二祖聖光上人のお伝記を見てみますと、日頃から、「念死念仏」ということをお唱えになっておられます。これからの高齢化社会、さらには臨終行儀ができなくなっておる時代に、それを考えましても、決定往生の信と申しましか、なるほどふだんからこういう心構えで進んでいかなければならないと思うんです。聖光上人は三十六歳から七十七歳まで、毎日、『六時礼讃』、そして『阿弥陀経』を六回、日課念仏六万遍を唱えたということが出ており

ます。良忠上人も、同じような念仏生活を励まれたというところをお聞きしております。

聖光上人は、晩年には一字三礼による『阿弥陀経』の写経もされております。これは臨終の時の持経にされたと聞いております。また、ご存じの通り『授手印』を撰述されまして、五種正行をはじめとする六重二十二件、そのすべてが念仏一行三昧に結集することを述べておられますことはご存じの通りであります。

特に聖光上人について興味がありますことは、聖光上人がお亡くなりになり、嵯峨の二尊院へ聖光上人のご分骨を納めにまいった方があります。これは持願房と専阿弥陀仏という方ですが、この方が分骨を済ませ、毘沙門堂の明禅法印を訪ねておられます。その明禅が、聖光上人のご臨終はいかがでしたかとお尋ねになりました。そうしますとこの二人は、まことにおめでたいご往生でありましたと述べて、奇瑞があらわれたの大往生の素懐が遂げられたことを詳しく報告されたそうであり、ます。すると明禅は、さては道心が深かったにちがいない。かねて化他を先とされていると聞いていたので往生の一大事をあやうく思っていたが、それはまことに尊いこと

だと、上人のお徳を讃えたといわれております。

自行化他の化他に専念するものは、自行を怠りやすい。聖光上人は自行にも精進をされ、また化他にも精進をなさった。まさに自利利他の円満人であったと伝記に出ておりまして、私は感銘をいたしました。

私たちはとかく化他なら化他のほうにずっと走りがちであります。自行が怠たりがちだということは大いに反省すべきことだと思っております。今日、私たちはお念仏を説き、そして一生懸命に勧めておりますが、現実にはそのお念仏もなんとなく口先だけ、また相手は聞いただけ。そのような形式的な知識に終わっている面も多くあるんじゃないかと思っております。

聞・信・行ということがありますが、ある方は聞に留まってしまう、ある方は信に留まってしまう、その先へいかない。やはり信、行といえますか、行の段階に入っていないで、実践が少ないように思っております。その意味からも、三上人のご遠忌を機会に、浄土宗のいのちともいわれておりますところの五種正行、この五種正行を取り上げて実践すべきではないか。このように思っております。

私達は正定業である称名正行のほかに、前三後一の正行を助業としては知ってはおりますが、案外これがおろそかにされている。どちらかというと、それにふれたくないような、お念仏だけなんだという感じが強くあるんじゃないかと思っております。五種正行も時機相應に工夫をし、読誦正行であればわかりやすいお経を考えていくとか、読むというようなこと、写経するというようなこと、こういうことも含めていったらよろしいかと思っております。また先般、山形教区の渋谷上人の百万礼拝、十万巻写経などの体験報告をいただきましたが、ぜひこれらの日常生活を私たちは考えていきたい。このように思いまして、五種正行の問題をここに提言したいと思っております。

次に、私たちは檀信徒に対しては念仏生活を勧め、また一方、僧侶は僧侶らしく生活しているか、という問題があります。一生懸命に信仰を勧めながら、お坊さんのほうは一体どうなんだ、ということでもあります。

友人から教えてもらったんですが、書道には、実画と虚画というのがありますが、念という字が見えるのは実画なんだ。そ

うです。しかし書道では、念を書く場合に、はねたり、次にいく段階、要するに空間の部分があって、その空間の部分を虚画というんだそうです。目に見えない部分です。空間で筆を動かしている部分です。これは大事なところであります。同様に私たちの生活にも、目に見える部分、これが日常の生活であり、いうなら表であります。それから目に見えない部分、これが裏であり、人間生活の中には、目に見えない部分があるわけであります。

私たちが、法事とか仏事は、僧侶らしく如法にいたしておられます。しかしその他の部分では、在家と同じようなことがないかどうか、これも大切な問題だと思っております。つまり実ということと虚ということが一致してるかどうか。言い換えれば、自行化他が一致した状態にあるかどうか。このことも反省しなければだめだと思っております。

数年前に、曹洞宗の教化研修所で、宗門人の意識調査をいたしました。その中に、寺院は宗侶意識を形成する場になり得るかどうかというテーマがございました。

聖と俗の間に、寺院生活の意識と実態がどうなっているか、という調査です。その調査結果によると、寺院生

活の中に、世俗化が進んでいるということを報告しております。私たち自身が考えればわかることであります。

次は寺院生活の家庭化、すなわち寺院の中も、一般家庭も、ほとんど変わらない。そして核家族化が進んでいるということでもあります。

それから使い分けの傾向が出ております。つまり与えられた宗教状況や雰囲気の中では、如法に行じているけれども、そこから離れた場所では、比較的フリーに振舞っている。

二つめには、原則的には、行住坐臥すべてが、宗教者の生き方でなければならないが、実際には使い分け的な生き方をしている。

三つめには、仕事を終えた住職が使い分けをしている。たとえば本堂から庫裡、すなわち家庭に戻る。これは一般サラリーマンとなんら変わらない。余暇に何をするかといえば、ゴルフ、マージャンをすることがある。

四番目には、信仰者、布教者ではなくして祀りごとを司るといふ、司祭者としての存在になっている。このようなこともいわれている。

五番目には、現在の若い僧侶は、信仰体験を持ってお

らない。教学なしの教化をしている。

このようなことが禅宗の調査から浮き彫りにされておりますが、私たちとなんか変わるところがないように思っています。このままでは、だんだん大変なことが起きてくる危惧を私は持っております。蓮門十字軍というのがありますが、三上人のご遠忌を契機として、現代の蓮門十字軍を、原点を踏まえた上で、つくる必要があるんじゃないのかな。これからの僧伽と申しますか、そういうものについて一日としては何をしたらいいのか。一週間のうちには、一カ月としては、一年としては、どういうことをするのかを、もう少し真剣に考えていかなければならない時期がきているように思うんであります。

司会 まことにありがとうございます。後半の司会は、私のこちらにおられます井沢上人にお願いしたいと思いますが。

司会 山形教区の井沢でございます。今後の司会をつとめさせていただきます。続きまして、浄土宗布教師会北陸支部、新潟教区善導寺の佐藤耕哉さんをお願い申し上げます。

佐藤 やはり地理的なことを少し申し上げなければ、話の進展につながらないと思います。新潟といいますが、富山県に近い糸魚川というところに、善導寺という寺がございます。糸魚川は地理的、地質的に、糸魚川と静岡を結ぶフォッサ・マグナ、大地溝帯で、そこに位置する場所でございます。

寺の構成状態からいいますと、浄土宗だけでなく、浄土真宗、真言宗、禅宗の各寺院がございます。各寺院で一生懸命、布教活動をやっております。

せっかくの機会ですので、檀家に対しての布教の地固めと申しましょうか、浄土宗はこうなんだということを、檀家の方々に対して、心を割ってこうなんだということを話しようかな、そういう立場から、いただいた時間内でお話を申し上げたいと思います。

テーマにございますように、三上人のご遠忌のごことでございますが、前の発表者もおっしゃった通り、改まって云々ということじゃなく、ふだんの布教活動をそのまま継続をしていけばいい。

ただし、はつきり申し上げたいのは、法然上人から伝えられた三上人の業績を、私達は深く感謝をしていかな

ければいけないと思います。

それにつきましては、檀家の方々に説明する過程として、あなた方がその場所におられるのは、やはり自分のお父さんお母さんがあって、またその縦のつながりとして、大親さまの阿弥陀さまがおられる。途中で遮断がされたならば、自分というのがないんだ。あなた方がこの場所におられるのは幸せなんだということで、紐をほどいていきます。そういうことから法然上人が立教開宗されて、二祖、三祖にわたる話を進めていったら、ある程度理解されるんじゃないだろうか。

そういう観点からまいりますと、地理的にも、時代的にも、三上人が活動なされた状況を判断していきますと、三様でございます。

そこには、いろいろと苦難の道があり、その時代その時代のいい方法をとって、教化伝道されてきたわけです。決して楽ではなかった。しかし楽ではなかったが、三上人が流されたその汗は、貴重な汗であった。その流れをわれわれはありがたくも頂戴しております。そこで私が力説をしたのは、二点に絞られます。

その第一点は『選択集』、『授手印』に説かれる「結帛

一行三昧」でございます。

これは言うまでもなく、宗祖より二祖、三祖と伝わったわが浄土門の正流のことでございます。たとえて申しますと、子供が母親をたずねて泣くごとく、私たちのお念仏は、理屈じゃなくて、一つの行である。そういうことを考えてまいりますと、南無阿弥陀仏と、どこにいううとも、どんな方と会おうとも、いつも口に出すということ、これが先決問題じゃなかろうかと思えます。口に出すということは、いうまでもなく、口称念仏のことでございます。その口称念仏と申しますのは、声に出さないといけないということです。わかりやすく檀家の方に申し上げるんですが、念仏は声に出さないと念仏といわない。いろいろ議論もありましょうけれども、頭で考えたり、あるいは南無阿弥陀仏と字で書いたりするのは、念仏といわない。したがって念仏というのは、口から声に出して南無阿弥陀仏と発声した時に、初めて念仏といえることができる。念仏は声に出すものであるということをはっきり、お参りにこられた方に申すわけでございます。他人さまからいくら念仏を申してもらおうとも、この私の口で、そして皆さんの各お口で、そして私が心を

こめて南無阿彌陀仏と申した時に、初めてそこに念仏ということがうたわれてくる。

これも前々からいわれますところの応声即現の問題でございませう。いろいろな悩みや苦しみとか、いろんな問題が出てきますけれども、南無阿彌陀仏と声に出したところにそこへ阿彌陀さま、如来さまが現れてくる。私たちは自分ひとりでは生活はできない。自分で生きることのできないそういう状態を、阿彌陀さまからお救いを願って、大本願のところでは私たちは生かさせていただいてるんだ。なんとありがたいことであろうかということ、論点を絞っていく。そのような南無阿彌陀仏の生活が必要じゃなからうかと思わさせていただきます。

そこで一つ問題は、いかにそういう口称念仏を拵げてゆくのかということでありませう。これは理屈ではわかりませうが、行としての口称念仏を考えたならば、各自が身をもって体験していく場合に、どのようにすればよいのか。みんなと一緒に手を合わせて、ほんとに幸せなんだなという体験を拵げられるのか。それが非常に大きい問題である。これは実際の生活の中に、その念仏をいかに取り入れていくかという問題でもありませう。

二番目に力説申し上げたいのは、報恩感謝の念、すなわち心の持ち方でございませう。いろいろな人間は立派なことを言い自分のできないことも言うわけでございませう。

しかし今の世の中は、挨拶にしても、本当にありがとうございませうという、感謝の念が薄れてきています。微力ながら浄土教の正流を汲むわれわれとして、大いに考えなければならぬ問題です。人と人とが接触する場合に、報恩感謝の念が稀薄になっている現実に対して、これをいかに是正し、浄土宗は対処したらよいのでありませうか。

先般の日航機の悲惨な事故のことが、新聞に書いてございませう。これもお説教の材料にしたいと思っておるんでございませうが、こういうことでございませう。亡くなられた方の家族への遺書でございませう。「どうか仲良くがんばってお母さんをたすけて下さい」と、子供をそのように励まし、奥さんに対しては、「こんな事になることは残念だ」と別れを告げながら、本人はどういうように綴ったかという、「幸せな人生だった」と、このように感謝の念を申しておるのでございませう。新聞やいろんな報道機関の書物を読ませてもらって、本当に偉い人

だなどと思いました。どうか仲良く頑張ってお母さんを助けて下さい、とまず子供に対して励ましの言葉をやってる。これ愛情の問題です。奥さんに対しては、墜落をして命を取られるのは非常に残念だということで、家族、親戚その他の人に別れを告げながら、自分は幸せな人生だったと、なおかつ感謝の言葉を遺しておられるわけです。

これは非常に愛情の籠った遺書ですが、これを材料にして、それこそ三上人の大遠忌の布教活動の一環としてもいいと思います。こういう生々しい一つの事例を挙げて布教したならば成果があるのではないかと思います。そこでもう少し時間がありますが、先ほど私申し上げましたように、人間はひとりで生きていられない。何もかの力で生かさせてもらっている。その何ものかの力とは何ぞや。これは言うまでもなく、阿弥陀さまであり、阿弥陀さまが私たちを守って下さる。そのように考えていけばよろしいかと思えます。

そういうことから考えると、やはり愛情ということが非常に問題になってくる。心と心のふれ合い、これも誰しも思うわけでございますが、人というものはみんな心

を持つている。そういう人と人との心のつながりが社会をつくっていく。その社会をつくっていく一つの条件としては、やはり強い愛情をもっていろんなものに接触をしていく。愛情ということは、言い換えるならば、思いやりでございます。その思いやりというのは、相手のことを思いながらいろいろ話をしていく。これが思いやりだと思います。その思いやりが、愛情に変化をしていくわけでございます。福沢諭吉先生の言葉の中に、世の中で一番尊いことは何であるかというところ、こう言っておられます。ひとのために奉仕をして決して恩に着せないことである。もう一つは、世の中で一番美しいことは、全てのものに愛情を持つことである。こう言っておられるわけです。

福沢諭吉先生の最初の言葉は、世の中で一番尊いことは、ひとのために奉仕して決して恩に着せないことである。われわれはすぐお金に換算をしていく。マネーで換算をしていく世の中です。損をすることはやらない。得をすることをやる。これは大人の考え方だけでなく、子供もそうです。すべて人間はそうだと思います。やはり損か得かということを考えたら、損には手を出さない

で、得のほうへ進む。これは人間の真理だと思えますけど。無償の恩といって、お金が目的でない、ただ気持ちだけで働くということ。これが世の中で一番尊いということを、福沢先生はおっしゃっているわけです。

だいぶ前の話なんですけれども、混んでる電車で浄土宗のお寺さんが乗っておられた。その中に、おばあちゃんが孫を連れて乗ってこられた。坐る場所がない。そうすると孫は、空いてるところを見て、「あ、おばあちゃん、おばあちゃん、あそこ空いてる」と。そこが空いてるということは浄土宗のお寺さんが立ってあげたから、空いてるわけです。そうしたらおばあちゃん、「ああ、よかったね。こんなに混んでる電車なのに、空いてるところがあつて、さあ坐りましょう」と坐った。その横に立っている浄土宗のお寺さんがなんかもさびしい。それは何かというと、三十年も三十五年も、阿弥陀さまに仕えてきたこの私でありながら、他人からお礼を言ってもらわなければ、なにかおかしい感じがする。そこでハッと気づいて、ああ、そうか。福沢諭吉先生が無償の恩とおっしゃったように、決して恩に着せてはいけないぞということ、ハッと感じた。そこで私たちは、自分とい

うものを、考え直さなければいけない。

私が申し上げたいのは、私を含めてわれわれの生き方、浄土宗のお寺さん、僧侶として、本当に皆さんに指導できるくらい力を持つてるか。ただ南無阿弥陀仏と申すということではなく、本当に困ってる人があつたら、救うということがなければならぬ。われわれ僧侶もしっかりしなきゃいけない。と同時に、檀信徒の方の苦しみというものも聞いてあげなきゃいけない。

人間というのは、なにか節目がなきゃいけません。三人上人の大遠忌を控えまして、私自身の節目と思つて、自分の考え、自分の行動をもう一度反省をし、それを基盤として、いろんな方々に教化指導していく。それこそ実行と決断でございます。このような形で、微力でございますが、今後の布教活動に邁進すべく、ふだん思っていることを発表させていただいた次第でございます。

司会 ありがとうございます。それでは次に布教師会中四国支部、石見教区大願寺の山崎一尊上人にお願いいたします。

山崎 私が住職しております石見教区の大願寺は、二祖

上人の開基でございます。二祖さまが九州へお帰りになる時に、山陰道を通られて、大田の町へおとまりになった。そうしたご因縁があつて建てられた寺が、大願寺ということになっております。道光の『聖光上人伝』中に書いてございまして、これが私の寺の非常に大きな誇りになってるところでございます。恐らく、九州へ帰られた鎮西上人から報告を受けられて、元祖さまも知っておられたんじゃないかなと、ひそかに思っておる寺でございます。

私がお話をいたしますことは、具体的な一つ一つの布教の事例も大切ですが、布教をする原点基になるところをしっかり固めておかなければいけないなど、つくづく思っておるんです。そういうわけで、二祖さまのご因縁を辿って、二祖さまの教えを肚に置いて、お話をしたいと思っておるんです。二祖さまの教えはもちろん、心に助け給えと思ひ、口に南無阿弥陀仏と唱える。これは二祖さまの教えの肝腎なところだと、そう思います。

『授手印』の最後に、「釈して曰く、わが法然上人のたまわく、善導の御釈を拝見するに源空が目には、三心も五念も四修も、皆ともに南無阿弥陀仏と見ゆるなり」と

ございます。ただ、二祖さまの但信口称のお念仏を思います時に、私にとって、つかかかることが二つ出てまいりました。

その一つは、葉上先生の言葉なんです。葉上照澄先生には、昭和十五年から七年、一単位か二単位か、授業を受けた覚えがございます。この向こうの旧館の教室で伺ったんですが、いまはでっぶり肥つて貫録のあるお姿なんですけれど、その時は実に痩せて、金縁目鏡の中から目をパチパチさせてお話しなさる、実に神経質な感じの先生でございました。

そのお方がまあ、どうしたことでしょう。戦後にあの苦しい千日行をなさって、「大行満」になられましたですね。その先生の書かれたものが、『在家仏教』の六月号だったと思いますが、それに出ております。「現代を生きぬく智慧」という題でございまして、仏教とは何か、人生とは何か。仏教者は何をなすべきか、というようなことを書かれておるんです。その中の一部に、私にとつて、ひと言の南無阿弥陀仏のほうが、千日の四万キロ歩く行より難しいのです。こうはつきり書いてあります。千日の回峰行は、四万キロあるといわれております。

あの千日行のテレビをごらんになったかどうか知りませんが、ずいぶんひどいもんですね。真つ暗闇の中を小走りになって歩く。歩くというよりも走る。最後の断食行なんて、ほんとにこの世のものじゃないような気がいたします。そういう行のほうは、ひと言の南無阿弥陀仏より易しいんだと。これですね。一体どういふことなんでしょうか。われわれにとっては、実にびっくりするような言葉なんでしょう。

いまの言葉の前にこんな文章が続いています。敗戦でペシャンコになって、どうしていいかわからないのが当時の日本人の気持ちでした。私は若さも有り、根性もありましたし、新聞の論説なんか書いていましたから、新聞人の根性も抜けなかったでしょう。しょうがありません。どうか日本の若い人にしっかりしてもらいたい。そのためにはできませんことは言わん。言うた以上は泣きながらも頑張つてやろうと、私自身が一から出直したと、回峰行をやらせてもらったのです。よく言われました。そんなことをして何になりますか。何にもなりません。何にもならんのになぜやるんですか。何にもならんのにやるんですか。そうです、と。おわかりでしたか。

しょうか。ストレイトにこれこれのために、の行であるならばそれは方法論にすぎません。手段です。そのこと自体に価値があると思うから、なまじっかインテリだったから修行させてもらったのです、というふうにあります。

私はここで、元祖法然上人の言葉、あの有名な言葉です。わがこの身は戒行において一戒をも保たず、禪定において一つもこれを得ず。ここにわれらごときは、すでに戒定慧の三学の器ものにあらず。この三学のほかにわが心に相応する法門ありや。わが身に堪えたる修行やある、という言葉を思い出します。ただ葉上先生、こんなことはお思いにならなかつたのかな、というわけですね。

ところが先生の先ほどの言葉、またこういうふうにつながっているんです。私にとっては、ひと言の南無阿弥陀仏のほうで、千日の四万キロ歩く行よりも難しいのです。何でもかんでも歩けばいいのです。あとはこっちの知ったことではないのです。たまたま縁あって、よき先達にめぐり逢つて、喜んですすんでやった。やらせてもらった。そして日が経つたというだけのことです。

ここまでをご紹介するわけですが、しかしこれ、なんだか聞いたような言葉だと思いいになりませんか。歩けばいいのです。何でもかんでも歩けばいいのです。あとはこっちの知ったことではないんです、という言葉ですね。

これはむろん、お気づきのように、『歎異抄』の中にあります。「親鸞におきては、たゞ念仏して、弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに、浄土にむまるゝたねにてやはんべらん。また地獄におつべき業にてやはんべらん、惣してもて存知せざるなり」。この言葉と非常によく似てるんですね。

また鎮西上人の『授手印』の裏書きに、「その義を知らず、その文を知らざるとも、ただ称名によりて、もつとも往生を得べし、弟子上人拜面の時、かくのごとくこれを学び、これを習う」と。この言葉もそっくりなような気がするんです。

惣してもって存知せず。その義を知らず、その文を知らず。あるいは、何でもかんでも歩けばいいのです。あとはこっちの知ったことではないのです。どうも葉上先

生、ちゃんと親鸞聖人や法然上人の言葉を知って、こんなことを書いておられるのかな、という気さえするわけなんです。けども、じゃ一体、どういうことなんでしょうか。

天台の行者である葉上先生と、われわれの信奉する浄土宗の信仰とどう違うのか。どこが違うのか。踏み分くる籠の道は多けれど、同じ高嶺の月を見るかな、そんなことでごまかせるものではないと思うんです。もっとこれは根本的なものを含んでいるんじゃないかと思えます。そうでなかったら、元祖さまのご苦心、二祖さまのあの生涯を通したご努力、何のためなのかと言いたくなるように思います。

葉上先生のように、行を積まれた方はなんとなく迫力があります。あの迫力は、恐らくは行を積んだ人の迫力だと思えます。とにかく十二年間の籠山比丘の生活は、全く偉大な体験であり、そういう行を終わったという自信が、おのずから溢れている。行を極めた人はそういう迫力持っていますね。

信を極めた人はどうか。迫力というよりも、慈母に似た広い深い抱擁力、そんなものを感じます。本当に信仰

のある方に出会った時にそう思います。

行も信もないものは、ニセ物の軽薄さと虚偽、偽善者ういうにおいがします。私自身これなんだなあと、いやになるし、悲しくなることがあります。

要するに先生は、戒定慧三学の天台の常道を、当にまっしぐらに進んでいっておられる方ですね。それはそれで本当に結構だと思えますが、われわれとしては、これをどうというふうに考えるべきか。べつに葉上先生を批判しようという考えは毛頭ありません。しかしわれわれにはわれわれのお念仏の教えがありますから、それをどう位置づけていくのか、しっかり肚の中に収めておかなければいけないと思っておるんです。

これの結語は最後に申し上げることにしまして、二つめの、もう一つのひっかかりは、現代の真宗教義との衝突なんですね。私のところは、安芸門徒の流れを受けた石見門徒といまして、島根県でも石見地方は非常に真宗が多うございます。寺も多いですね、大田市の人口は三万八千人、面積は非常に広くて、大阪市の二倍近くあります。その広い範囲に三万八千の非常に過疎のところですが、寺院は百カ寺ございます。三万八千の人口で、

百カ寺あるんですから大変ですね。その七割が真宗でございます。ですから真宗の勢い強いですね。また自負を持っていますね。ある日蓮宗のお寺がある加持祈禱をやり始めましたら、とうとう仏教会から追い出して村八分にしちゃったですね。そのくらい真宗の力強いんです。

この真宗とぶつかると申しますのは、有名な三業惑乱騒動というのが真宗にはございました。いまから七十年前ですかね。真宗には安心騒動というのがたびたび起こりましてね。これは宝暦十二年に発端が起こって、文化三年まで四十三年間、揉みに揉んだと、こういうことですね。

そしてこの騒動を簡単に申しますと、真宗では能化といいますが、真宗の中央の学林の学頭なんです。教学布教の一番最高位を能化とこういうんですが、功存という第六代目の能化を中心にして、真宗の学林で三業婦命というのを打ち出しました。これは心に助け給えと思ひ、口に南無阿弥陀仏と唱え、身に合掌礼拝する。これが三業婦命なんです。これはそっくりそのまま鎮西上人の教えみたいなものです。これを真宗の能化をはじめ学林が、しまいには門主までが、ようやくたといつて

講習会の時にこういう教義を打ち出したのを褒めてると
いうぐらい、西本願寺の中心がこれで固まったんです。

六代目の功存という方が、趣前の十劫安心、無帰命安心という異端ですね。これを三業帰命の理論を持っていて収めたという、前段階のお話がございます。十劫安心、無帰命安心といいますが、これは真宗の安心の落とし穴といわれている安心なんです、念仏なんか唱えなくともいいというんですね。十劫以前に阿弥陀さまが成仏なさってる。それで、ああそうかとそれをうかがって、聞いて、それを信じさえすれば、それでわれわれは助かっている。造悪無礙で悪いことしても、阿弥陀さまの本願力のほうが大きいんだから、念仏なんか唱えなくてもいいというところへいくんですね、結局、真に徹底しますと。そういうわけで、趣前の異安心を、この功存能化が行って、叩き潰しました。

功存という人はなかなか偉い人だったとみえて、向こうにも竜養というしっかりした頭領がいたんですけれども、それを福井の別院へ呼び出して、とうとう説き伏せましてね。論破して、断り状、回心状を書かしております。

頭株はそうしてやつつたんですが、まだ地方に無帰命安心の異安心が残っているから、功存は、『願生帰命弁』という本を書いて、三業帰命を宣明したわけですね。

ところがそれに対して、やがて在野から、地方からも轟々たる批判の嵐が起こってまいりました。これが三業惑乱騒動というわけで、地方から毎日千人以上の人が京都へ入って、本願寺を取り巻いて、一体どうなんだ。三業帰命の安心が真宗の本当の安心なのか、ほんとなのか、違うのか、という対決を迫りましてね。それで京都の町は騒乱状態になった。

そういうことなんですが、地方からも何百人というのが旅装束で上がってきます。まるで百姓一揆みたいなこと。それで地方の殿さまはびっくり仰天して、ちょっと待ってくれと。そういうのが都のほうへ上がりますとね、幕府から睨まれるわけですね。一揆なんていうのが幕府の一番いやがることですから、そういうのを出したということになると思われる。殿さまは切腹、領地はとられるということになるかもしれないというんで、家老を出しまして、京都へ上がるのをとどめて、待ってくれ、京都のほうへは殿さまのほうから言うから、お前たち、家へ

帰ってくれと、そういう一幕もあったようです。

四十三年間かかって、能化は七代目の智洞という人になっておりましたが、とうとう能化、学林、本山は、この三業帰命は親鸞聖人の信楽帰命に倅るところの邪義だということ、とうとうこれで決着をいたしました。

石見の真宗の寺院、ないしは門徒の人に移るわけですが、石見から二人の偉い人が京都の本山へ行ってかけ合たんです。広島、北陸、大分からも偉い人が行ったんですが、石見から二人、有名な人がまいました。石見の門徒もずいぶん行ったらしいんですね、京都へ。現在でも真宗の寺院、真宗の門徒の人は誇りに思っているわけです。われわれの祖先が真宗の安心を守り抜いたんだという自信を持っていますね。お説教でも、よくこれをやります。三業惑乱だ、心に助け給えと思ひ、口に南無阿弥陀仏と申し、合掌礼拝する浄土宗の安心、やり方、あれは間違いだ、というわけです。あれは半自力半他力、他力の中の自力の教えなんだ、それで間違ってる、邪義だ。こっちの親鸞聖人の信楽帰命、これが本当の親鸞聖人の教え、ひいては法然上人の教えなんだ、というふうにつもお説教しますね。

仏教会の花まつりが真宗の寺である時に、坐って聞いてますと、われわれを尻目にかけて、半自力半他力の浄土宗、しまいには法然上人といえますね。法然上人から親鸞聖人は、純粋な絶対他力の一步進んだ完全な他力信仰を打ち立てられて、それをわれわれがいま戴いているんだということを。仏教会で、べつに喧嘩するわけじゃないんですが、話し合いの時に、浄土宗といわないですね。鎮西派といえます。だからわざと真宗、真宗といってやるんですよ。真宗といわれるとちょっといやな顔しますね。浄土真宗といわないといやな顔するんですけどね。石見はほとんど西本願寺です。西本願寺は浄土真宗というのが正しい宗名ですから、真宗といわれると、そのほかの東本願寺とか、真宗のほかの派は全部真宗ですね。正式な名称は真宗大谷派ですね。西本願寺だけが浄土真宗です。聞いたところでは、浄土真宗という宗名は戦後、初めてできた宗名だそうです。それまでは浄土真宗という名前によろしなかつたんです。

そういうわけで、三業帰命ではなくて、三業帰命が惑乱だ、これは間違ってる。そういうあからさまな挑発に對して、われわれは、なんとかしなきゃいけない。そう

いう感じがするわけなんです。

われわれのところでは、寺によりますと、法要に参列する人の半数くらいは真宗の門徒という場合もございませぬ。半数以上ですわね。そういうところで、うっかりお説教をして、ある場合には、あとから押しかけてきて突っ込まれて、布教師さん大変困ったというような事例もあります。本当にお念仏の行というものをしっかりと説くお説教ではなくて、普通のお説教になりますというのと、聞いている人は、なあんだ、やっぱり浄土宗の説教はそんな程度か、というんで、表面上は聞き上手ですから、聞いてますけど、腹の中では冷笑してるですわね。せせら笑ってる。そういうようなことがよくあります。私どもも、そばで聞いてて、ああ、なんてことかいなと思うところが時にあるわけなんです。そういうことをなくすためにも、やっぱり、問題は行と信の問題だと思えます。これを確かに解決をしてやらなければいけない大事なところがあるんですが、時間がきていわれませぬ。

念仏の信というものは、これは伝えにくいものですね。行は伝えやすいです。その証拠に子供たちにお勤めをさせます。おてつぎ子供奉仕団というのがありますが、ほ

んとに素直にお念仏しますわね。ところが信を説くわけにいきませぬ。行は伝えやすい。信は伝えにくい。伝えにくい信だから、聞法という行を一つ加えたんだなああと、こういう感じさえるんですけどわね。われわれはこの伝えやすい行を、元祖さまの、鎮西さまの行を、しっかりと受け止めて、そしてこれでやっていかなきゃいけないあと、そう思うのでございます。

司会 どうもありがとうございました。休憩時間をとらずに続けていきます。まことに失礼ではございますが、もう少し辛棒いただきたいと存じます。

ただいま五名の方々の意見発表がございました。三枝樹先生には、三上人を取り上げていただきました。聖光上人には、各人が別時念仏を修するように、というふうな受け止めさせていただきました。また源智上人には布教伝達の始まりである。良忠上人には多くの著述を遺していただき、弟子を養成していただきました。四十数カ寺の建立もあつたというようなことで、宗教上の教育の重要性についてのお話を頂戴したわけでございます。

丹羽上人におかれては、ご遠忌について、三上人のこ

とについて、また期待される布教活動について、ということでお話を頂戴したわけでございます。

坂野上人には、現代をきびしく分析しつつ、浄土宗の五種正行を実践すべきであるまいか、というご意見をいただいたわけでございます。

佐藤上人におかれては、結婦一行三昧、口称念仏、報恩感謝の念、そういったことについて大変な力説をいただいたわけでございます。

また山崎上人におかれては、葉上先生、並びに真宗教義との衝突についてまた行は伝えられるが信は伝えられない。こういった意味でのお話を頂戴したわけでございます。

これらの件につきまして、ご意見ご質問等のある方は、挙手の上、学校名、ないし教区名、寺院名とお名前をお述べいただきまして、どなたへのご意見、ご質問か、合わせてお願いいたします。

藤吉慈海 いま山崎上人の三業惑乱のお話を聞きまして、大変感銘をして伺いました。おっしゃる通りで、真宗では三業惑乱というのは大変なことでございましたようですね。

その影響と申しますか、浄土宗の布教をなざる場合において、真宗から浄土宗は半自力半他力だと批判を受ける。真宗から見るとたしかにそういう面がありまして、ただいまおっしゃったように、法然上人の浄土宗では、信と行との両方を重んずるわけですけども、真宗はやっぱり行ということをあんまりいわない。信を本とするというふうにいわれております。いつかも『中外日報』に書きましたけども、親鸞聖人が『教行信証』の終わりに、私は法然さまから『選択本願念仏集』を書き写させていただいた。そして法然上人がわざわざ、その私が写した『選択集』の初めに、「選択本願念仏集、南無阿弥陀仏、往生之業念仏為本」と書いて下すって、「釈綽空」とまで書いていただいたと、『教行信証』の一番最後のところに書いていらっしやるんですね。だからこれは私は嘘じゃないと思います。

だから親鸞聖人という方は、法然上人から大変重要視されていたお弟子の一人なんです。しかし、残念ながら、そういう大切な親鸞自筆の、しかも法然上人が題をお書きになった『選択本願念仏集』、今日伝わっておりません。ないもんだから、『教行信証』の最後の言葉、

嘘じゃないかという人もありますけど、私は親鸞聖人、そんなにまで疑わない。やっぱり事実だったと思うんですね。

この間、京都で杉本哲郎というインダの絵を描いた人の展覧会があつて、たまたまそのレセプションで、西本願寺の光照前門主と一緒にになりました。ちょうどいい機会だったもんだから、お話をいたしましたして、「親鸞聖人さまが法然上人さまから『選択本願念仏集』写させていだいて、「縛空」とまでお書きになったものが遺っていないのは実に残念ですね」と言ったら、そうだとおっしゃるんですね。

法然上人さまが親鸞聖人に対して、「往生之業念仏為本」と、念仏を本と為すとお書きになったということは、私は法然上人さまが親鸞さまをよく見抜いていらしたんではないかと思う。親鸞は私の弟子の中で、「信心為本」みたいなこと言うてる。信心為本という言葉は親鸞聖人の言葉じゃない。後世にできた言葉のようですね。ご門主もそう言うっておられましたけども。だから親鸞は行よこも信というふうに思ってる。

しかし私が言うのは、親鸞はそういうぐあいに

も信を重んじていたから、わざと親鸞に対しては往生の業には念仏が根本だと、本と為す。往生のためには念仏がもっと大切なんだよ。念仏為本とお書きになったんじゃないでしょうかと私は申しました。

草稿本といわれてる廬山寺本には、ご存じのように、「南無阿弥陀仏、往生之業念仏為先」とお書きになっている。一番初めのご本にはですね。そして親鸞に対しては「為本」と書いていらっしゃる。

ところが『浄土宗大辞典』を見ますと、「為先」と「為本」は同じ意味だと書いていますね。どちらも大切だと書いてあります。これは間違いだとは私は思つて、いつも言ってるんですけども、「先」というのは「後」に對する言葉でしょう。「本」は「末」に對する言葉ですね。法然上人さまが『選択本願念仏集』の一番初めに、「往生之業念仏為先」とお書きになって、親鸞さまには、「往生之業念仏為本」とお書きになった。これは事実ですね。両方ご本が伝わってるわけです。事実、二つお書きになったことは間違いないと思いますし、大谷大学に伝わっております『選択本願念仏集』の中にも、「念仏為先」と初めに書いてあるんですが、消してまた「本」

と書き直してあります。ご本も伝わっております。

だから先とか本とかどちらが本当かを論争したようでもありますけども、事実、二つとも法然上人がお書きになった言葉であるといえるんです。それを見ましても、この弟子親鸞聖人は念仏をするよりも、念仏を本としないで、信を重んずる傾向があることを見抜いて、わざと親鸞に対しては、念仏がもっと大切だと。信よりも大切だとおっしゃいませんけれども、「往生の業には念仏を本と為す」とわざとお書きになったんじゃないでしょうか。光照前門主にこう申しましたら、「ああ、そんな考え方は初めて聞きましたが、そうかもしれないですね」とおっしゃって、「よく考えてみます」というふうに申されて、お別れした印象があります。

浄土宗はやっぱり法然さまおっしゃるように、信と行、両方とも大切であり、どちらが先だとはいえませんが、やっぱり行というもののけして抜きにしない。行を重んずるから、真宗から見ると、浄土宗は半自力半他力だという批判が出てくると思います。

私のほうは、三業惑乱ですでありましたように、信を重んじますとやっぱり行はいらなくなってきましたです

ね。十劫以前にすでに阿弥陀さま承諾得られるんだからして、絶対他力だというんですね。自力は全然いらない。信心すら阿弥陀さまから回向されたもんだ。だから回向された信心を受け取る力が、こちらになくちゃならない。望月先生がなんかの本に書いておられたが、真宗はぼた餅安心だ。口さえ開けとれば、ぼた餅が落ちてくるありがたいお救いにあずかる。しかし口を開けなくちゃならないですね。開けなかったら落ちてきても食べられません。しかし口を開ける力も、真宗からいわせれば他力回向だというくらいにまで、絶対他力を主張するわけですね。

そうすると浄土宗みたいに信行具足して念仏申すのは半自力半他力に見えるわけですね。注意しなくちゃならないのは、絶対他力という言葉は、浄土宗では使っちゃならないと思いますね。

百万遍のご法主は、全分他力とおっしゃるんですね。

これは林先生の言葉かもしれませんが、全分他力という言葉も絶対他力に近いと思いますね。全分他力という言葉も、法然上人も勿論、おっしゃっていませんし、語弊があると思うんです。浄土宗は信行具足していかな

やならない宗教なんですね。

信は伝えにくい。行は伝えやすいといまおっしゃいましたが、まことにそうでございまして、浄土宗の教えはまだ絶対他力じゃないとせせら笑う人は偉いと思いますね。偉いと思いますが、本当に絶対他力を受け取っている人は少ない。蓮如上人がそうおっしゃってますね。たくさん信者がいるが、この中で本当に他力の教えがわかってるのは二、三人だとおっしゃったというんですね。実際にはなかなか、信をまともに受け取ることは非常にむずかしい。すぐ造悪無礙と、悪いことしてもかまわない。絶対他力だからわれわれはどんなことをしてもとか、本願埃りになってしまおう。これは真宗でも異安心だと言っておりますですね。

浄土宗は三業帰命に近いわけですが、お話を聞いて反省させられました。そういう点で、浄土宗の布教は、真宗の説教本なんか読んで、唱えさえすればいいんだという表現の中に、どうかすると真宗風の絶対他力みたいな教えになってしまふ恐れがあります。そういう危険性があると私は思います。布教なさっている皆さまのご批判も承りたいんですが、非常に用心しないと、真宗風な説

教してしまったりいたしますですね。

浄土宗は信よりも行を重んずるということはない。浄土宗の大義信の一字なりというお言葉もございますから、信も大切ですが、信行具足した教えでないとい一般の人は納得しにくい。親鸞聖人の信は絶対的であって、非常にすぐれておりますけれども、これを受け取ることは非常にむづかしいという点で、葉上さんも念仏はむづかしいと言ったんじゃないかと、私は思うんです。

司会 どうもありがとうございます。ほかにご意見ご質問等ございませんでしょうか。それでは発表者のうちで補足的なお話がありましたら……。

三枝樹 都合によっては補足時間が与えられるかと思いい途中で切ったわけでございます。実は私、総論を各論に展開させ、三上人大遠忌にあたっての布教活動を教育的見地に立って見た時に、宗教教育の重要性ということを指摘させていただき、最後に佛敎大学の地方進出という言葉を使って切ってしまったようなことございました。

佛敎大学の地方進出については、私がいまここで申し上げるまでもなく、学長の水谷先生は早くからお考えになられていたようです。いま現に、四条烏丸に四条セン

ターが開設されて、しかも学長みずから指揮にあたって、もう一年に迫ろうとしておるような状態でございます。これは佛教大学の教育と研究が、一般市民の方に開放されなければならぬという基本的な姿勢の下に、四条セクターが開設されておるわけでございます。

また水谷先生は、法然上人の七百五十年のご遠忌の時に、各県ごとに浄土宗の高等学校をつくったらどうかという意見を、一宗に下されたことも承っております。

佛教大学の地方進出という言葉を使うと、いろんな面で差し障りがあるかもしれません、浄土真宗や禅宗では、すでに竜大、谷大、駒大が九州地方に限ってもなされております。しかしこれは真宗教団の僧侶を養成するというのが主眼のようです。私はそういう面じゃなしに、布教活動を宗教的見地から眺めて、宗教教育の重要性を指摘したわけでございます。

具体的に申しますと、鎮西上人の根拠地であった善導寺を中心としたところへ、佛教大学の意義あるものができればと願っておるわけなんです。それは九州地区に佛教女子短期大学の創立ということを願って、ここでお話を申し上げておるわけでございます。その一例をあげま

すと、京都の家政短期大学がございます。これは家政学園ですが、本年は創立八十周年の記念式典を挙げられ、これは五月二十日付の『中外日報』で大々的に宣伝をされております。この家政学園の創まりは、獅子谷仏定上人が九州伝道に行かれて、一隻の渡し舟に乘ろうとされた。そこで順番をお待ちになっておられたところ、若い女性が整然とした列を乱して、年寄りを押しつけて乗船した。そのような姿を見られて、仏定上人は、これでは日本の女子教育が大変なことになっていく。そういうことから家政学園が創立されていったように、ここに書かれております。

しかもこれを見ますと、明治三十七年のその頃は、宗教教育が非常に閉鎖的であった。そういう時期に、最初小さないなば薬師の境内に創設された。その時の第一回の卒業生が、十七人であったことが記録に残っておりますが、そういうところからでも出発ができるんじゃないか。これは絶対に可能であるという自信を持っております。

それと同時に、家政学園と姉妹校になっているネパールの国立大学、バルマカニヤ大学がございますが、ここ

の学長さんの紹介文がここに書かれてあります。それは一九七一年、いまから十四年ほど前、ネパールに女子教育の重要性から女子大学をつくった。ところが最初、十一人の学生と四人の専任教員、三人の非常勤教員から成り立っていた。それが十年後には、学生が三千五百人教員の数が二百人以上、そのような展開を見せております。

そういうことから考えまして、非常に意を強くして出発ができるんじゃないか。また九州地区を中心とするならば、どういうところがいいのか。大学一覧表を見ますと、善導寺を中心としますならば、久留米市に久留米女学院短期大学が一枚設立されております。全面的に見て、九州地区に大学と名のつくものは五十校ほどあります。その中で三十三校が女子短期大学でございます。いかに九州地区で女子教育に力が入れられているか、これによってわかります。佛教大学といわなくても、浄土宗の念仏の教えを、そういう若い人たちに説いていくことは、この機会をなくしてないんじゃないかと考えて、このような意見を申し述べさせていただきました。

司会 どうもありがとうございます。閉会の時間がまわっておりますので、このへんで質問とご意見等のほう

は打ち切らせていただきます。ご協力ありがとうございました。

彙報

▼浄土宗教学布教大会

昭和六十年年度浄土宗教学布教大会は、昭和六十年年度浄土宗布教師中央研修会と第三十回浄土宗教学大会との合同大会として、昭和六十年九月四日（水）から六日（金）までの三日間にわたり、東京の大正大学を会場として開催された。主催は浄土宗布教師会および浄土宗教学院である。

◎大会日程

九月四日（水）

開会式

大会委員会（布教師会）

特別講演

九月五日（木）

一般研究発表

大会委員会（合同）

シンポジウム

合同総会

懇親会

九月六日（金）

一般研究発表

意見発表

閉会式

◎特別講演
阿弥陀仏をほる

大仏師 松久朋琳氏

対談者 大正大学教授 石上善応氏

〔『宗報』昭和六十年十一月号に収録〕

源智上人について

佛教学教授 伊藤唯真氏

〔『佛教論叢』三〇号に収録〕

◎一般研究発表

一般研究発表は、八十三名の発表があり、五部会にわかれて、教学と布教に関する日頃の研究成果が熱心に発表された。この一般研究発表は、浄土宗の教師であれば発表の資格があり、発表時間は十五分、質問は五分である。布教研究所の関係者の発表は左記のとおりである。教団レベルでの広報の意義とその展開

加藤 俊哉

臓器提供の宗教的意義 佐藤 雅彦

知恩・報恩とお念仏 有本 亮啓

生きる杖 石田 彰浩

三上人遠忌にあたっての布教活動 金子 貫司

仏教の実態——白石部落の調査から—— 山本 雄毅

二祖さまの四国巡教について 村中 成信

布教とコミュニケーション理論 大室 照道

北海道開教二世紀への提言 片山 浄教

布教の原点 山上 光俊

テレホン法話について 大門 俊正

鎮西上人と安産祈願 安藤 雅寛

三上人遠忌の現代的意義 東海林 良雲

源智上人の布教について 羽田 恵三

なおこの研究発表の要旨は、発表できなかった研究所員の報告も含めて、『布教研究所報』三号に掲載した。

◎シンポジウム

本年度のテーマは「現代とお念仏について」であり、大正大学助教授、佐藤良純氏の司会により行われた。問題提起者は左記のとおりである。

東洋大学教授 河波 昌

大正大学講師 土屋 光道

大正大学講師 柴田 哲彦

シンポジウムの内容は、『宗報』昭和六十年十一月号に収録した。

◎意見発表

昭和六十二年の三上人遠忌をひかえ、

「三上人遠忌にあたっての布教活動」

のテーマのもと、左記の方々の意見発表が行われた。司会は、九州支部の中路秀暢氏、東北支部の井沢隆徳氏の両名である。

教学院代表 三枝樹 隆 善
布教師会九州支部代表 丹羽 演 誠
〃 関東支部代表 坂野 泰 巨
〃 北陸支部代表 佐藤 耕 哉
〃 中四国支部代表 山崎 一 尊
なお発表が予定されていた北海道支部代表の松岡瑞竜氏は、当日体調をくずされ、理事会の承認により、九州支部の丹羽演誠氏の発表に変更になった。意見発表の内容は、『布教研究所報』三号に収録した。

◎合同総会では、教学布教大会のあり方について議論があり、布教師会と教学院の両理事会の合意のもと、三上人遠忌の年までは合同の大会を開催することが確認された。

▼集中研究会

浄土宗布教研究所の集中研究会は、研究所の関係者全員を招集して、年二回開催される。今年度は左記のとおり行われた。

◎第十回集中研究会

期 日 昭和六十年五月十五日(水)
会 場 東京明照会館
内 容

①新研究所員の片山淨教、宮原文弥、石田彰浩、宮崎浅良、山本雄毅、有本亮啓、山上光俊、金子貫司の各氏への辞令伝達。
②講義

文書伝道の基本

浄土宗新聞編集参与 宝田正道氏
〔『布教研究所報』三号に掲載〕

③総会として、板垣隆寛所長の研究指針の所信表明、並びに教学布教大会における研究発表の打合せが行われた。

◎第十一回集中研究会

期 日 昭和六十年十二月十日(火)・十一日(水)

会 場 京都大本山百万遍知恩寺
内 容 統一テーマ『観無量寿経』

①研究発表は、研究所員として二年目をむかえる梅庭昭寛、大門俊正、羽田恵三、村中成信、安藤雅寛の各氏が、『観無量寿経』についての布教上の解釈や問題点を発表した。

②講義

『観無量寿経』について
大本山知恩寺法主 林 靈法台下

『観無量寿経』を頂いて

知恩寺布教師会 岩井 信道氏

▼月例研究会(公開)

昭和六十年年度の浄土宗布教研究所の月例研究会は、左記のとおり東京明照会館で行われた。

◎六月二十二日(土)

布教と同和問題

浄土宗同和推進事務局参与 蓮池瑞旭氏

◎十月九日(水)

三上人遠忌の布教の視点

浄土宗新聞編集参与 宝田正道氏

◎十一月二十八日(木)

京都における良忠上人

大正大学講師 広川堯敏氏

◎二月二十五日(火)

タイの僧院生活について

大正大学教授 宮林昭彦氏

▼輪読会

浄土宗布教研究所の輪読会は、宮林昭彦主任の指導の下、研究員を中心に行われている。テキストは聖光上人の『末代念仏授手印』であり、引用文献の抽出、口語訳の試みを行っている。この輪読会は継続中であり、その成果は次年度の『布教研究所報』第四号に掲載の予定である。

る。

▼浄土宗布教研究所分室の開説

京都の佛教大学浄土宗文献センター内に、浄土宗布教研究所の分室が開設された。昭和六十年十一月一日、浄土宗布教研究所と佛教大学との間で、施設借用にあたっての覚え書がとりかわされた。借用期間は、宗務庁舎の完成までである。

▼浄土宗布教師大会

昭和六十年年度の浄土宗布教師大会は、昭和六十年十月十八日(金)、十九日(土)の両日にわたり、布教師会東海支部の担当により、名古屋都ホテルと建中寺において開催された。なお布教研究所からは、指導講演と特別講演の資料蒐集にもむいた。

◎大会日程

十月十八日(金)

開会式

指導講演

特別講演

懇親会

十月十九日(土)

大挙伝道

閉会式

◎講演(於都ホテル)

浄土教から見た故郷喪失の現代人

大本山知恩寺法主 林 靈法台下

葬儀と墓と霊

大正大学教授 藤井正雄 氏

◎大挙伝道(於建中寺)

北海道支部

東北支部

関東支部

東海支部

北陸支部

近畿支部

中四国支部

九州支部

杉 浦 定 善

小 川 金 英

長 谷 川 光 洋

小 滝 隆 定

高 島 昭 堂

小 林 忍 英

佐 野 隆 和

中 路 秀 暢

▼布教研究所所長の板垣隆寛氏は、全日本宗教連盟の推薦でローマ法王庁の招待を受け、六月二十六日、ローマ法王ヨハネ・パウロ二世との会見にのぞんだ。

編集後記

○浄土宗布教研究所の『布教研究所報』第三号をお届けいたします。

○宝田正道先生の「文書伝道の基本」は、昭和六十年五月の第十回集中研究会のときにご講義いただいたものです。

○研究所員の研究成果報告は、昭和六十年年度の浄土宗教学布教大会の一般研究発表で発表した要旨であり、これに発表されなかった方の研究成果報告を加えて掲載いたしました。

○浄土宗教学布教大会の、シンポジウムは『宗報』に、意見発表は『布教研究所報』にという布教師会と教学院の合同理事会の申し合わせがありました。

○「三上人大遠忌にあたっての布教活動」は、昭和六十年年度の教学布教大会の意見発表であり、これを収録いたしました。

○本誌の「彙報」には、昭和六十年年度の布教研究の活動状況が掲載されていますが、印刷、発行期日等の関係で報告できなかったものもあります。

○集中研究会や月例研究会では、各界の第一人者にご講演をいただいております。

すが、紙数の関係等もあり、残念ながらそのすべてを本誌に掲載できかねる状況です。ご尽力贈った先生方にお詫び方々、厚く御礼申し上げます。

布教研究所報 第3号

昭和61年2月20日 印刷

昭和61年3月1日 発行

編 集 兼 板 垣 隆 寛
行 発 者

印 刷 所 東京都千代田区 共立社印刷所
神田神保町3-10

発 行 所 浄土宗布教研究所

〒105 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

